

宗方小太郎日記，明治 32～33 年

大里 浩 秋

1. はじめに

本所報 No. 37 に「上海歴史研究所蔵宗方小太郎資料について」を載せ、そこに宗方の明治 21 年の日記の一部を収録し、No. 40 に「宗方小太郎日記，明治 22～25 年」、No. 41 に「宗方小太郎日記，明治 26～29 年」、No. 44 に「宗方小太郎日記，明治 30～31 年」を載せた。今号ではその続きとして、明治 32～33 年の宗方の手書きの日記を活字に起こすとともに、解題をつけることにする。

前回までと同じであるが、お断りすべきことをいくつか記す。解読できなかった文字は今回もいくつかあり、文中では□で示した。また、日記中の人名や地名の記載ミスについては、直さずにそのままにし、字が抜けている所は空いたままにした。さらに、原文のカタカナはひらがなに改め、漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を加えたが、日本の人名の漢字は原文のままにした。私のこの解題中の原文の扱いも同様である。日記の解読と入力作業は、本学中国言語文化修士課程修了の増子直美さんに手伝ってもらった。

2. 明治 32 年 1 月から 12 月までの日記

明治 32 (1899) 年の日記は、1 月 1 日から 3 月 31 日までの一綴じと 4 月 1 日から 12 月 31 日までの一綴じ、そして 12 月 2 日から翌年 1 月 11 日までの、「瀟湘泛槎日記」と題する一綴じからなっている。それらをその順に並べ、その中のいくつかの動きを取り上げてコメントする。

この年の正月は熊本で迎え、中旬に東亜同文会に参加している中西正樹、池辺吉太郎、田鍋安之助らの上京を促す手紙が届き、下旬に上京、さっそく溜池にあった東亜同文会本部事務所に外向いて、「時事討求会」に出席したり (1, 26)、「我会对清の事業並に経営に要する費目を議定」したり (1, 30) した。『東亜時論』第 5 号「会報」には、1 月 29 日に牛込東五軒町 35 番地に移ったとあるので、30 日には新しい事務所に行ったことになるし、日記にもその住所が書かれている。この 2 度の会議のうち前者については、東亜同文会の機関誌『東亜時論』の第 4 号「会報」には 1 月 12 日に開いた際の記録は載っているものの、26 日の分は見当たらない。また後者については、『近衛篤磨日記』付属文書 (『東亜同文会史』、霞山会、に収録) にある「東亜同文会西清支部設立地及其事業」について検討した時のことを指していると思われるが、なお確認が必要である。

その後、参謀本部に福島安正等を訪ね、さらに青木周蔵外務大臣に会った後、2 月 7 日には東京から熊本に帰り、3 月 9 日に田鍋から電報が来て「大陸経営に要する外務機密費貴衆両院を通過せり」と伝えてきた。このことは 1 月、2 月に上京した時の動き、とくに 1 月 30 日の会議と関連があると思

われるが、その詳細は後考に俟つしかない。なお、前年10月分から海軍嘱託費はそれまでの100円から130円に値上がりしているが、4月17日の日記によると、5月から7月までの3か月の嘱託費として400円もらったことになっている。それをひと月あたりで換算すると133円余になるが、130円から多少とも値上げた額なのか、130円は変わらないがその3か月分390円を切りのいい数字で400円として支給したものは不明である。さらにお金に注目して日記を見ていくと、4月28日に東亜同文会から4月5月の支部費と漢報補助費を合わせて計500円が送られてきた。この書き方からは支部費がいくらで漢報補助費がいくらかは不明であるが、その後の日記の記載を見ていくと、支部費とは宗方の場合は漢口支部の運営費を意味しているが、当初はひと月いくらとは決められていないようで、5月25日の日記には6月分として250円送られてきたと書かれている。また漢報補助費とは、海軍や外務省の財政援助を得て1896年から宗方が漢口で発行している中国語新聞『漢報』のために出されている補助金のことで、さらに5月4日には、東亜同文会から漢報拡張費1000円を受け取っていることがわかる。『東亜同文会第十四回報告』の「会報」に「本会は本会創立の当時より之〔漢報のこと〕を補助し以て本会の機関となす」とあることの具体的な証言となろう。

時間が前後するが、5月10日に上海に渡り12日にはそれまでと同様「髪を剃り、髻を剃り、邦服を脱し清服を着」た。そして主には上海で大勢の中国人と会って、談話を重ねている。名前を挙げるならば、汪康年、姚文藻、唐才常、狄葆賢、張通典、文廷式等で、彼らとは個人であれ集団であれ繰り返し会っている。また、漢口樂善堂以来の同志で東亜同文会広東支部長である高橋謙の紹介で鄭官応と会った。鄭は広東省出身、清末から中華民国初期の実業家、思想家。6月中旬漢口に出かけて、5日目に上海の白岩龍平からの電報が来て、小田切万寿之助、姚文藻が「日清提携問題の爲め日本に赴くに付き」宗方の同行を求めてきて(6, 22)、上海に引き上げることになったが、その時期哥老会中の人物3人が入れ替わりで訪ねてきたのは注目される。唐才常らが湖南で準備している武装蜂起と関連する動きであろう。上海に戻ると、「今回西太后の密旨を帯び慶慶と共に日本に赴く」ことになっている劉学詢等と会って打ち合わせをした後、7月8日に一行と共に帰国の途に就いた。

日本に戻ってからの宗方は、東京で数回劉等に会っていることを記しているだけなので、一行についてきた役割がどの辺にあったかが日記からははっきりしないところがあるが、劉等を日本の要人に会わせる役を任じたのは確かであろう。またこの時期孫文と何度も会い、揚句に彼を帝国ホテルに連れて行き、そこに宿泊している劉に「密会」させている(7, 27)のは、とても興味深いことである。宮崎寅蔵の紹介で前々年に熊本で会い、前年には東京で会っている孫文が、今回は滞在先の横浜から繰り返し訪ねてきて、宗方のところに泊まり、宗方が熊本に帰る際には新橋駅に見送りにまで来ているのである。孫文がどんな意図で劉に会ったのかは不明だが、『国父年譜』上冊ではこの時の密談で、劉は「現在中国は日本と連盟しているが、君の革命の宗旨はいかなるものか」とたずねたのに対し、孫文は「私の革命の宗旨は一貫して中国を立ち上らせることにある」と答え、劉はそれに対し「政治革命であれば協力できるが、種族革命であれば、それはとても難しい」と述べたとする。この時の劉の来日、劉と孫文の密会についてはいくつかの先行研究があるが、狭間直樹「劉学詢と孫文の関係についての一解釈」(『孫文研究』38)によれば、劉一行は表向きには「考察商務」を掲げた使節団であったが、西太后の密旨を奉じて「清日同盟」を結ぶという裏の使命については、何の成果もあげることができなかった。また劉と孫文は、宗方の手引で会った他にも何度か会っており、その際に劉が孫文に梁啓超暗殺をもちかけ、その見返りとして革命資金20万両を孫文の方から求めたという噂が流れたとのことである。また、宮崎滔天の『三十三年之夢』には、劉のことを「孫文と同じ広東省香山県の人で、広州の大紳、若くして進士に及第、両広総督の幕僚であり、1895年孫文が創設した農学会に参加した。戊戌政変の翌1899年、日本政府をして康有為、梁啓超を追放または引渡しむべく清朝上層部を動かし、特使として来日、明治天皇に謁見したが、遂に言い出せ得なかった」とある。

7月29日に東京を離れてからはしばらく熊本に滞在し、10月5日になって上海入りした。それから、この年前半と同じく、汪康年、唐才常、姚文藻、文廷式、張通典等との交流が続いたが、それが一時中断されたのは近衛篤磨一行の訪中によってであった。10月25日上海着から11月4日漢口から上海に向けて船で発つまで東亜同文会会長近衛のお供をした。その間南京では両江総督劉坤一の、武漢では湖広総督張之洞の歓迎を受けており、日記には彼らの歓迎ぶりを詳細に伝えている。また近衛等が漢口を離れて3日後の8日には内藤湖南が上海から漢口に来て14日に去るまで漢口や武漢などを案内している。内藤は宗方とは前々年1897年に台湾で知り合っていたが、知り合うきっかけになったのは、おそらくは宗方にとってはともに漢口楽善堂に参加した仲間であり、内藤にとっては同郷である石川伍一が日清戦争で処刑されたという事実であった。内藤はこの初訪中で北京、天津、蘇州、上海、漢口と3カ月の旅をして、帰国後その体験を紀行文にまとめ、のちに「禹域鴻爪記」と題して『燕山楚水』に収めている（『内藤湖南全集』第二巻）が、その中に宗方との出会いについても詳しく触れている。それからしばらく漢口に滞在し、11月25日に鉄道局総弁鄭孝胥に会っている。辛亥革命後にしばしば会うことになる鄭の第1印象は「顔る気概有り」であった（11、25）。

12月2日に漢口を船で湖南に向けて出発し、翌年1月11日までの長旅をした。同行したのは岡幸七郎、緒方二三の2人である。2人共当時漢報社で働いており、うち緒方は宗方と同じ熊本の出身で、漢口楽善堂の仲間であった。船を借り船頭を雇っての旅で、通る先々で集落の特徴や人家の数、一日の移動距離などを書いているのは、それまでの調査旅行と同様で、旅の興趣を漢詩で表現しているのも同じである。

12月10日に着いた洞庭湖畔の岳州府では、前年イギリスの要求で開いた居留地があるとして、「通商埠租界地章程十条」をそのまま紹介すると共に、そこの現況を描写しているのは租界方面の資料としては貴重である。そしてそこをながめて回顧しつつ、日清戦争の際に大本営に意見書を送り、戦後の清国に対して日本の影響を及ぼす際に岳州府を開かせ「努て其の人心を収攬し、以て他年有事の秋に当り我用為らしむ可き」を主張したが、それが取り上げられなかったのは遺憾であったと述べている。

12月15日に長沙に着くと、前もって打ち合せをしていたのであろう、文廷式の邸に到着を伝えると、文は歓迎して長沙での世話役を任じている。宗方が長沙で一番会いたかったのは王先謙であったようで、それは王が「前年以來保守党の牛耳を執り、所謂新党の士此人の為に排斥駆逐せられ」ている現状を打破するには、まず「此人を説き我囊中の物と為すに非ずんば殆んど手を下す能はず」と考えたからであった。そこで自己紹介の手紙と「東亜同文会規則書」を送ってから王の家を訪ねたが、旅行中とのことで会えなかった。まもなく王からは返事があり、宗方が長沙を離れたあとにも弟子に自著を漢口まで届けさせたりして、意見交換は続いている。が、12月24日の日記に付した長沙府に関するレポートで、宗方が湖南の人才、とくに南学会に参加した紳士や青年に中国改革の中心になることを強く期待し、それを王ら「老先輩」が押さえつけている状況に何とか手を打つべきだと考えている状況を伝えているのは興味ある内容である。

ここで、明治32年中に書いた海軍への報告の号数と日付を日記から拾うと次の通りである。なお、これまでの年度において厳密にチェックしなかったことに気づいたのは、『宗方小太郎文書』に収録されている報告に付された日付を日記で確認しても、そこには「安原に報告」とか「安原に発信」としか書いていないことがあり、それさえも書いていないこともまれにある点である。そこで、32年以降は、『宗方小太郎文書』を参照しつつ記すこととし、『宗方小太郎文書』中には、日付が書かれていないもの、あるいは収録されていないものについては、日付あるいは号数のそばに＊印をつけることとする。

5月26日一日記には海軍の「安原に報告」とあるのみだが、その時第四十一号、第四十二号を書き送ったと思われる。5月31日一日「安原に発信」とあるが、この時第四十三号を書き送ったのであろう。11月23日一日*第四十四号、12月2日一日第四十五号。

- 正月元旦 健晴。清晨起床、盥嗽整衣、一家円坐迎年の式を行ふ。終日親戚故旧を歴訪し新正を賀す。
- 正月二日 晴。知人を訪ひ正を賀す。午前木下卯三郎の上京を池田駅に送る。午後松倉を春日に訪ひ鶴を食ふ。夜辞帰。
- 正月三日 晴。出て年始を賀す。漢口岡幸七郎の信到る。昨来知人の来りて正を賀するもの多し。
高橋、徳田、岡次郎、山内崑、鳥居、林市蔵、守田、古島一雄等新年の賀状に答ふ。漢口岡、東京田鍋に返書し、朝鮮葉室に致書す。
- 正月五日 陰寒。午後松倉来訪。共に出て山田九郎に抵り其北堂の死を吊す。小談、帰る。松倉を留て晚餐す。
- 正月六日 晴。小山秋作。根津一等の年始状到る。直に之に復す。午後井手三郎来訪。四時共に出て藤本親信の招邀に赴く。来会者松倉、毛利、高木、門池、板井、村上、井手並に予也。
- 正月七日 晴。午前安達謙造来訪。宇土田中重に吊状を發す。台南奥村の年賀に答ふ。東京中西、台湾岡本の賀年に答ふ。午後出て井芹経平を訪ふ、在らず。帰途古川を訪ひ小談、帰る。
- 正月八日 晴。朝齊藤国雄来り、別を叙す。本日より兵学校に帰ると云ふ。谷口長雄来談。漢口柳原、上海橋元、佐賀船津辰一郎の信到る。午後支那店に到り晚帰る。
- 正月九日 陰天。鹿兒島樗木成章、台湾木下賢良、上海橋元、□牧、河本等に復書す。
- 正月十日 風大。午前東京安原金次、佐々友房二氏に復書す。井手、松倉来訪。台湾平野六郎、元島正礼、糸川直元、上海米田等の年賀状到る。東京梶川重太郎、狩野直喜の賀状到る。梶川、狩野、矢島、平野、本島の年賀に答ふ。
- 正月十一日 陰天。午後古川を訪ひ小談、帰る。漢口岡、藤森、井口、福州前田、岡田兼次郎、大島、原田等賀年状到る。夜牛島、上田来訪。
- 正月十二日 雨天。福州前田、岡田に復書し、豊島捨松、木村信二二人への信片を同封にて送る。原田生に復書す。東京佐々友房氏の信到る。上京を促し来る。東京安原大佐の電報あり。釜山成田定、台北岡田晋太郎の賀年状到る。直に之に復す。安原に復電し、佐々氏に葉書を送る。熊本病院長谷口長雄列より本日午後六時精養軒に招待有り、雨を衝て往く。来会する者十一人、谷口、大島為次郎、豊田虎之進、松浦有志太郎、行徳健男以下六人なり。支那医道の事に付き一場の談話を為し、洋饌の饗応を受け、九時過ぎ帰宅。
- 正月十三日 晴。東京中西正樹の信到る。予の上京を促し来る。山鹿河口介男の信到る。谷口長雄に発信す。晚東京池邊吉太郎、田鍋安之助の信到り予の上京を促す。池辺、中西、田邊に覆書す。夜大風。
- 正月十四日 陰。午後出て津田静一氏を訪ふ、在らず。高木正雄を訪ひ小談、帰る。台湾河野久太郎、今村平蔵、廣瀬貞治等賀年状並に齊藤国雄、井手三郎等の信到る。夜大江を訪ふ。
- 正月十五日 朝。微雪。十時天晴。今村、河野、廣瀬に復書す。午後井手三郎、片山次彦来訪。井手を留めて晚餐す。夜井手と米原、古川を訪ふ、皆在らず。井手留宿。
- 正月十六日 快晴。軍令部安原の信並に二月分より四月に到る三ヶ月の手当金送り来る。東京木下宇三郎の信到る。夜田鍋の電報到る。
- 正月十七日 晴。頭痛。宇土田中重、台湾富永又吉の信到る。午後大江岳父より猪肉一包を贈らる。金百五十元を大江に致す。上海白岩、漢口岡、橘、市原、杭州多田、蘇州橋本、上海石崎の信到。直に以上諸氏並に台南富永又吉に返書を出す。
- 正月十八日 晴天。午前古川来訪。午時東京安原大佐に覆書す。午後毛利を訪ひ小談、帰る。古川、柴

田来訪。東京佐々友房氏の電報到る。

正月十九日 晴。正午松倉善家来訪。東京田鍋安之助の信到る。夜嶋田数雄来訪せりと云ふ。午後大江の招邀に赴き、晚帰る。

正月二十日 晴天。午後支那店に至る。晚井手、藤本、松倉三氏と鶏を食ふ。九時帰る。留守中米原、秋山、島田、河口、横田列来訪せりと云ふ。東京林市蔵の信到る。

正月二十一日 晴。朝安達謙蔵、古川権九郎来り、別る。東京山田珠一、鳥居赫雄の信到る。晌午松倉、井手、高木来る、共に中食す。午後古川、永原来訪。井手、古、永三氏と晚餐を共にす。夜十時半井手と上車池田駅に到り、終列車に乗り東上の道に就く。是日芝罘高垣徳治、漢口緒方二三の信到る。汽車中寒氣凜烈不成眠。

正月二十二日 晴。午前六時半門司に達し、川卯に投じ朝食を吃し、九時徳山行の汽船上等室に乗ず。午後二時徳山に達す。上陸、停車場に休憩し、三時大坂直行の汽車に坐し東上す。

正月二十三日 晴。午前六時大坂に達し、車站に小休。七時の汽車に換坐して発す。江州に入れば寒威頓に加はり、琵琶湖上の比良山積雪皚然、頗る佳麗なり。進んで関ヶ原、米原地方に至る。溪山の間堆雪尺余。午後三時遠州浜松に達し、停車場前の大末屋に投宿す。浴後晚餐を吃し船車の勞を癒す。極て快適。

正月二十四日 晴。午前六時浜松発の一番列車に投じ発す。午後三時半新橋駅に達し、上車神田連雀町の佐々木に至り投宿す。晚山田と談ず。

正月二十五日 夜来大雪、屋瓦皆白。午前九時井手氏と上車、佐々氏を四谷仲町三十二番地に訪ふ。古莊嘉門氏来会。主客中食を共にし、午後一時辭して溜池の同文会に至る。田邊、中西、宮崎等皆在焉。談話時を移し、予は麻布に安原を訪ひ小飲。再び同文会に帰り、六時帰寓。是日熊本留守宅に着報を發す。

正月二十六日 晴。午前中西正樹来訪。午後上車。永香園に鳥居を訪ひ、晚餐後同文会の時事討求会に列し、九時帰る。是日留守中池邊吉、林市蔵来訪せりと云ふ。

正月二十七日 晴。午前上車、四谷に佐々、牛込柳町に池邊、堤等を歴訪して帰る。午後二時麹町七丁目に近衛公爵を訪ひ談話、時を移て帰る。鳥居、林、田鍋、中西来訪。豚肉を割て会食す。談話十時に至て散ず。留守中尾本壽太郎来訪せりと云ふ。朝鮮葉室の信、熊本留守宅より転交し来る。

正月二十八日 陰天。午前澤村繁太郎、岡次郎、尾本壽太郎、林安繁、松田舒等来訪。朝鮮葉室、熊本留守宅に発信す。

正月二十九日 雨天。日曜日。心気不佳。河村寿之進、江崎嘉蔵等に発信、来京を報ず。芝罘高垣徳治に復書す。熊本松倉の電報到り、上京の事を報ず。直に復電之を止む。

正月三十日 雨天。午前牛込東五軒町三十五番地同文会に至り、中西、田鍋等に会し、我会对清の事業並に経営に要する費目を議定す。松本亀太郎亦来会。午後四時帰寓。留守中江崎嘉蔵再度来訪せりと云ふ。晚鳥居、池田末雄、堤敬太郎、中川義弥来訪、牛肉を食ふ。十時散帰。

正月三十一日 晴。寓に於て髪を理す。時事新報社對島機並に池田末来訪。午前井手、池田と鉄道馬車より新橋に至り、歩して山王永香園に鳥居を訪ふ。其の明日を以て大坂に帰るを以て也。堤、狩野、林、安藤来会。健啖快談時を移し、九時半狩野、堤、井手と同く辞帰。留守中守田愿、河村寿之進来訪せりと云ふ。上海白岩龍平の信到る。熊本松倉善家に復電し、其上京を促す。松田舒の信到る。

二月一日 晴天。松田舒に復書し並に江崎生及び上海山根虎之助に致書す。大坂深水十八の信到る。午後國友重章来訪。夜西田龍太、山田央来訪。八時佐々友房氏来談。十二時に及んで帰る。

二月二日 晴天。午前上車、外務省に至り内田康哉を訪ひ、篠原の事を依頼し、去て參謀本部に福島安正、小山秋作、木下卯三等を敲き、談話時を移て帰る。明日午前青木外務大臣と会見を約す。江崎嘉蔵、岡次郎の信到る。午後田鍋安之助来訪。夜上車牛込東五軒町三十五番地同文会に至り、近衛公

爵、陸実、田鍋、池邊、中西、大内等と会務を評議し、夜十二時に及で帰る。

二月三日 晴天。午前九時中西正樹来談。十時青木外務の約に赴く。十二時帰る。午後山田夫、佐々木某来訪。佐々木は台湾に在て高山国と称する雑誌を発行せる者なり。國友重章来談。陸実、池邊吉太郎の信到る。夜池邊吉太郎来訪。続て梶川重太郎、木下卯三郎来訪、十時帰る。

二月四日 晴天。早朝佐々氏を四谷仲町に訪ふ。談話頃刻、中西、井手、田鍋三氏と連車、上根岸に陸実を敲く。午時陸氏の案内にて上野公園内餐亭に至り会食す。境地閑雅、江都形勢を俯瞰し、平陸渺茫、眼界無際。快談二時に及で散ず。諸氏と徒歩上野山中を閑歩し、動物園を一覧し、去て南洲翁の銅像を見る。短衣脛を掩はず、裸足草鞋を着け、腰に短刀を帯び、右手獵犬を引て屹立す。風姿堂々、当年を想望せしむ。帰途聖堂を一観す。三百年の遺築、水戸義公の設計に成るもの也。暮時帰寓。松倉善家在り、午前来着せりと云ふ。中西、田鍋等と晩食を共にす。北御門、中西重太郎、松田鯨、井上雅二、池田末雄等交も来り訪ふ。松田巻紙五巻を贈る。熊本留守宅の信到る。松倉の携来せるもの也。安原に発信す。

二月五日 雨天。日曜日。午前江崎嘉蔵来訪、幼年学校生徒なり。余二年前熊本に在り千百の学生中より鑑識し、東肥少年第一流と為す。此時嘉蔵歳甫て十五、氣宇品性に超群の概有り。別後二年余今日再び之を見る。屹然として鉅人の如し。予諄々訓戒期するに天下の士を以てす。我心甚之を受す。中餐後辭し去る。松岡勝彦来訪。午後松倉善家、佐々友房氏来訪。晚西田龍太来談。夜松倉を東陽館に訪ふ。

二月六日 晴天。午前田鍋来談。深水清、岡次郎亦来訪。午後青木外務、軍令部安原、文部樺山並に梶川等を訪ふ。午後三時高等商業学校中山五郎、井上の添書を携へ来り訪ふ。夜松倉善家、林市蔵来訪。東郷、辻岡、芳野三生、井上雅二の添書を携へ来り訪ふ。

二月七日 晴天。詰朝飯食上車、客舎を辭し、新橋發一番六時二十分の汽車に乗ず。井手三郎、山田珠一來り送る。夜十時過ぎ神戸に着し、山陽列車に換坐し徳山に向ふ。

二月八日 陰。午後一時徳山に達し、一時四十分の春日丸に乗り門司に向ふ。風浪嫌惡、進行遅々、夜十時半漸く馬関に達す。風急に於て上陸を得ず、船中に一泊す。

二月九日 朝微雪。午前九時平安丸に換坐し漸く門司に上陸し、十時四十五分の汽車にて熊本に向ふ。午後六時半池田駅着。車を驅りて家に回る。漢口岡、厦門知新報館、横浜清議報館の信並に上海より河本磯平漢口にて自殺の計至る。

二月十日 陰。福岡高橋謙、上海白岩列、井手三郎等に致書す。

二月十一日 陰。午前毛利、高木列を訪ふ、皆在らず。去て支那店に至り藤本を訪ひ、転じて岡崎唯雄を敲き、四時帰宅。晚大江を訪ふ。

二月十二日 晴。午後島田敦雄を訪ふ、在らず。古川に抵り小談、帰る。夜牛島来訪。

二月十三日 晴。井手三郎の信並に長崎白岩龍平の電報到る。午後原田維新を訪ふ。鳥居の爲に其親族の女を娶らんが爲也。鳥居、林市蔵に発信す。午後牛島生来訪。

二月十四日 陰天。午前 晚古城貞吉来訪。

二月十五日 強風、雨。午後白岩龍平來過、上海よりの帰途なり。高橋謙の信到る。

二月十六日 晴。東京安原に発信す。午前九時白岩を送りて池田駅に到り別る。午時上田生来訪。午後新聞社に至り山田、毛利を訪ひ小談、帰る。東京田鍋、中西に致書す。原田維新来訪。

二月十七日 晴。板井、井手の信到る。夜米原を訪ひ、十時帰る。昨來右肋痛を覚ふ。

二月十八日 陰天。午時辻岡生来訪、本日是地を発し清国に渡航すと云ふ。

二月十九日 健晴。東京松倉、朝鮮葉室、大坂鳥居の信到る。午後内藤儀十郎、古川、永原、島田諸氏来訪、之を留て小酌す。晴時中西正義来訪。

二月二十日 快晴。午前鳥居赫、林市蔵、古城貞吉の信到る。鳥居、古城に復書し並に中西正樹、原田

維新に発信す。中学生中山新来訪。他日有望の青年なり。黄昏津野一雄来り、七円五角を返付す。夜
莊村秀雄来訪。

二月二十一日 雨天。是日宇土郡大嶽村火災義捐金一円を九州日々新聞社に投ず。午後柴田常三郎、山
田九郎来訪。漢口岡幸七郎、井手三郎の信到る。

二月二十二日 雨天、大風。漢口岡幸七郎、東京中西正樹に発信す。朝高橋謙来訪、終日之と談ず。夜
留宿。鳥居赫雄の為に光永氏の女を媒妁せしが、本日をも以て確定を告ぐ。之を大坂鳥居に翰告し、其
の来態を促す。県知事徳久恒範氏より二十六日夜静養軒に晚餐の案内あり。

二月二十三日 微雨。朝高橋謙を送りて、池田駅に到る。帰途池邊源太郎の病を問ひ帰る。塩浜より来
客五人有り、夜に入て帰る。

二月二十四日 半晴。朝来頭痛殊に甚し。中食を用ひず就褥す。津山土屋具安、東京田鍋安之助の信到
る。津山土屋、東京林市蔵に鳥居の内事確定を報ず。夜に入て心気頗好。上田、牛島、原田来訪。

二月二十五日 晴天。田鍋安之助に発信す。松倉善家の信到る。

二月二十六日 晴天。日曜日。東京宮崎寅藏に致書す。東京古城貞吉、大坂鳥居の信到る。午後四時徳
久知事の立食会に静養軒に赴く。会するもの茨木師団長以下官民の有志者五十余名。献酬時を移し、
七時辞し帰る。途中横田家を訪ひ、八時帰宅。東京井手の信、大坂鳥居の電報到る。美作為次郎及び
高等中学生岐部富雄、奥村政雄、岩田衛三生来訪。

二月二十七日 晴天。春色大動満城処として花ならざるは無し。午前出て九州日々社に至り、去て支那
店を敲き、中食後春日駅に赴き一時半の下り汽車に乗り宇土に抵り、城山の先塋に謁し香花を供す。
明日先考の三年忌たるを以て也。一里奥村宅に至り小談。法華寺への布施を托し、転て同寺に至り展
墓。問道より停車場に出で、五時十五分の汽車に坐し、池田駅に下車、七時前帰宅。夜末永節、山田
夫外一人来訪。鳥居赫雄の信到る。

二月二十八日 春雨蕭々。庭前の梅花大に開く。是日先考の三年忌たり。午時諸妹を会し一家樂坐追悼
の意を表す。東京中西、白岩の信到る。午後山中新来訪。

三月一日 春雨霏々。岐部富雄、山中新両生来訪。

三月二日 微雨。高橋謙、林市蔵の信、東京井手三郎の電報到る。午前原田を訪ふ、在らず。去て郵便
局に至り鳥居より送來金二十円を受取り、支那店にて小談、帰宅。午後大江に到り梅花を觀る。夜に
入て辞帰。

三月三日 晴。朝山田珠一を訪ふ。東京宮崎寅藏の信到る。午後支那店に至り直に帰る。

三月四日 晴。岡幸七郎、齊藤国雄、井手三郎の信到る。井手昨日帰郷せりと云ふ。午後原田維新と上
車、新山光永氏に到り鳥居の結納を行ふ。小飲四時に及で帰る。留守中島田数雄、大江某来訪せりと
云ふ。井手三郎に発信す。平山周の信到る。鳥居赫雄の信到る。

三月五日 快晴。午前四時友義子と振食。熊本駅に至り下り一番に乗り宇土駅にて下車。江入山に入り
小鳥を獵し、去て伊津野松山に至り、正午迄松涛竹影の裡に徘徊し所獲頗多し。此地十八年前常到の
処彼山水此水皆旧識たり。午後再び江入に転回し、四時帰途に就く。小鳥二十羽を獲たり。七時熊本に
帰る。留守中井手三郎、安達謙造、古川権九郎、莊村秀雄、横田五郎等来訪。鳥居の電報到る。

三月六日 晴天。齊藤、平山、板井に復書す。午後四時鳥居赫雄来着。晩食を共にし、出て熊本病院に
至り浅山知定氏の病状を問ふ。九時帰る。鳥居を留て宿せしむ。

三月七日 春雨霏々。午前鳥居を送りて上通町塗師屋に到り、去て鎮西館に山田珠一、安達謙造を訪ひ
小談、辞帰。浅山知定氏本日午時終に病没せりと云ふ。可痛也。

三月八日 晴。午前鳥居、古川来訪。古川と佐野直喜を誘ひ上車、出て浅山知定氏を吊す。香典一元を
靈前に供す。是日鳥居赫雄、光永友子の結婚式を我家に於て挙行せんとす。午後之が準備に着手す。

八時光永家より入興、新人を合て五人、鳥居姻属二人、並に井手三郎及び余と内人となり。而して余

等二人之が媒妁たり。式終り十一時宴散ず。内人新郎新婦を送りて通町塗師屋に到る。井手三郎留宿。

三月九日 晴。午前井手と出て支那店に至り理髪し、共に鎮西館に於ける浅山知定氏の葬儀に臨む。午後二時帰る。途中鳥居を塗師屋に訪ひ小談、辞帰。東京田鍋安之助の信到る。夜又た田鍋の電報到る。大陸経営に要する外務機密費貴衆両院を通過せりと云ふ。

三月十日 晴天。朝東京田鍋、中西、福岡高橋謙、並に井手三郎に発信す。午前鳥居、松岡、原田來過。中食後予媒妁の故を以て鳥居と同行、新山光永氏に赴く。宴会多時、五時諸氏と車を連て帰る。

三月十一日 朝雨。午前妹田鶴の媒妁福島氏より横田家より田鶴離婚の事を商量す。之を諾す。夜更田鶴を横田家より呼び還す。

三月十二日 晴。午前上車池田駅に至り、鳥居新夫婦の帰便を送る。佐野直喜來訪。午後井芹經平來訪。井手三郎、片山敏彦、樗木政章、林市蔵、松倉善家の信到る。午後妻と田鶴を送りて宇土に到り、一里奥村氏に托す。五時十五分の汽車にて帰る。

三月十三日 晴天。午前古川來訪、共に出て佐野直喜を訪ふ。午後莊村生並に宮原義雄來訪。東京松倉、博多白岩龍平、齊藤国男の信到る。

三月十四日 晴天。台湾岡田晋太郎に発信し、煉瓦の状況を問ふ。大坂鳥居、佐野に発信し、河口の事を托す。午前美作為次郎來訪。午後出て新聞社に至り宇野七郎氏より預け金百円を受取り、山田珠一を訪て帰る。河口介男を訪ふ。

三月十五日 晴。深水十八、田鍋安之助の信到る。午後牛島、上田、山中三生來訪。五時古川と出て美作為次郎の招邀に静養軒に赴く。八時帰る。米原繁蔵を訪ふ。夜雨。

三月十六日 陰天。午後隣家福島家の葬儀を送る。松倉義家の信到る。

三月十七日 半晴。晩牛島生來訪。

三月十八日 晴天。是日黎明起床。春日駅に赴き、友義子と下り一番汽車に乘じ宇土に向ひ、西山に銃獵す。終に小鳥九羽を獲て帰る。夜井手三郎來訪。東京田鍋、大坂佐野の信到る。

三月十九日 晴。午前井手去る。東京田鍋に復書す。晩河口介男、同敬信、友義諸氏を招き会食す。

三月二十日 快晴。東京安原金次、漢口岡幸七郎に発信す。午後古川、米原を訪ふ。夜大江に到る。

三月二十一日 健晴。朝井手に発信。明日銃獵の途次訪問の事を報ず。

三月二十二日 晴。友義子と春日駅の二番列車に乘じ川尻に赴き、緑川堤沿て下り、錢塘より右折し伊勢官畔を過ぎ、九時半中島村井手三郎宅に到る。中食後井手兄弟と同行。海辺に出て往来小鳥を獵し、四時井手家にて小食し、五時辭して帰途に就く。八時半家に到る。

三月二十三日 小晴。夜雨。山田珠一來訪。福岡高橋謙の信到る。晩小鳥を会食す。

三月二十四日 晴。朝藤本親信來訪。東京松倉に致書。

三月二十五日 晴。是日井芹より済々黌卒業証書授与式に臨席の案内有り、行かず。九州日々新聞社より五千号祝式の案内狀到る。朝鮮葉室より來信有り。午後新聞社に至り、九州日々第五千号に登載する隨筆數則を山田に渡し、毛利と一叙して帰る。宇土矢島に其弟篤政台南にて病死の吊詞を致す。

三月二十六日 雨天。東京中西に致書す。牛島貫吾、上田小三郎両氏來訪。夜東京同文会より電報到着、政府の出資少額の爲め設計に変更を要し、至急上京を促す。

三月二十七日 晴天。東京同文会に返電し、万事一任する旨を告げ、別に書信を發し、電信主意を詳報し、在京の同志にて妥弁せん事を囑す。井手三郎に発信し東電の趣を報ず。外に毛利篤に致書す。午前深水十八來訪、昨日帰着せりと云ふ。再び東京田鍋列に致書す。岐郡富雄來訪。

三月二十八日 晴。午前東京安原大佐、上海白岩の信到る。安原、白岩、田鍋、中島列に復書す。莊村秀雄來訪。

三月二十九日 晴。午後米原繁蔵、夜牛島生來訪。東京松倉善家の信到る。

三月三十日 陰天、夜に入て雨。午前篠原由雄来訪。原田維新又来訪。井手三郎の信到る。

三月三十一日 雨天。是日漢口緒方二三、岡幸七郎に致すの書を作り、牛島の西航に托す。朝毛利篤来り、葉室より送來の金子を返却す。光永氏来訪。午後支那店に至り小談、帰る。大坂佐野直喜に発信す。

四月一日 陰天。午後谷口長雄来て妻の病を診す。

四月二日 陰。午前九州日々新聞社五千号の祝典に臨む。会する者一千余人。午後井手を伴て帰る。晩塘林の招待により井手と貧兒寮に至り一場の談話を為し、九時帰る。留守中秦長三郎来訪せりと云ふ。井手留宿。東京高橋謙、長崎西田龍太の信到る。

四月三日 雨天。東京田鍋安之助、中島真雄の報告到る。直に之に復書す。外に西田、佐野に発信す。東京高橋謙の信並に亀雄の信到。岡村敬蔵来訪。夜牛島、上田来談。

四月四日 雨天。庭前の桜花盛開。午後大江岳父君来過。山中新来訪。晩徳久知事を訪ひ名片を留て帰る。漢口岡幸七郎の信到る。

四月五日 晴天。午前篠原由雄、古川権九郎、莊村秀雄等来談。夜米原繁蔵を訪ひ、十時帰る。

四月六日 陰天。晩山田九郎来談。

四月七日 陰天。朝内田無外来訪、支那行の事に付き商量する所あり。午後東京田鍋、中島、中西列に発信す。

四月八日 晴。午後山田九郎を訪ひ小談。共に出て古川を敲き帰る。松倉善家来訪、本日東京より帰熊せりと云ふ。大坂佐野直喜の信到る。

四月九日 晴天。東京安原、福岡高橋並に亀雄に発信す。午前山田岐、岐部富雄来訪。午後谷口来診。牛島、上田来訪。三時永野金次郎翁古稀の賀筵に赴く。五時井手と岡崎唯雄の招邀に静養軒に赴く。九時散ず。井手を拉して帰る。東京中西正樹の信到る。安原金次に発信す。

四月十日 晴。東京田鍋の信到る。田鍋、中西列、佐々氏、内田康哉等に発信す。午前井手と出て支那店に到る。松倉善家は日より大坂に向ふ。午後帰る。

四月十一日 雨。午前篠原、莊村、上田来訪。正午牛島宅に赴き、其妹の死を吊す。午後川野廉来訪。東京中西、宇土篠原に発信す。漢口岡幸七郎の信到る。

四月十二日 半晴。午後高等学校生朝日胤一、川崎軍治来訪。午時上田、牛島二生の為に清国留学旅行口願に付き資金の出処に関する証明を為す。

四月十三日 雨天。大坂松倉善家に発信し、莊村生の履歴を送る。

四月十四日 雨天。午後井芹經平来訪。今晚より上京すと云ふ。岐部富雄来訪。夜米原を訪ふ。

四月十五日 晴。午前宇土に至り奥村宅にて午餐を吃し、七時の汽車にて熊本に帰る。帰途支那店に立寄り、九時帰宅。上海白岩龍平、東京亀雄、大坂松倉の信到る。岡村敬蔵、美作為次郎等より茶並に菓子を贈り来る。

四月十六日 晴。午前毛利篤、米原繁蔵来訪。午後古川を誘ひ竜田山下に柴田常三郎を訪ひ、茂林の下新筍を煮て飲む。夕陽辞帰。

四月十七日 雨。海軍々令部より五月より七月迄三ヶ月の手当四百元を送り来る。安原金次、高橋謙の信到る。上田、牛嶋二生来訪。

四月十八日 雨天。東京安原、高橋□□、弟亀雄並に田鍋列に復書す。尾本寿太郎、野州に於て急病の為に死去せる旨、田鍋、中嶋等より報じ来る。漢口柳原の信到る。篠原来訪。

四月十九日 陰天。西田新太、松倉善家の信並に東京田鍋より電報到る。政府支出の金半額受領せりと云ふ。西田に復書し、莊村並に台湾岡田晋太郎に致書す。田鍋安之助に発信す。午後大江に赴く。留守中高岡元真氏の紹介状を携へ友枝伴蔵なる者来訪し、銘酒二瓶を贈れりと云ふ。田鍋安之助の信到る。之に復す。

四月二十日 晴天。友枝父子来訪、清国へ同行を請ふ。福州前田、東京田鍋、中島村井手に発信す。夜雨。朝日胤一來訪。

四月二十一日 雨。午後莊村、牛嶋、齊藤等来訪。同文会より予算書を送り来る。莊村の為に松倉に発信す。

四月二十二日 晴天。土曜日。高橋謙、松倉善家の信到る。夜米原を訪ふ。

四月二十三日 晴。矢野諸房、莊村秀雄前後来訪。午後勝木恒喜来訪、本日上海より帰来せりと云ふ。莊村生の為に農商務省清国留學生の身元引受人と為る。東京田鍋安之助の信到る。

四月二十四日 晴。午前井手三郎、藤本親信前後来訪。午後井手と出て支那店に至り、晩食後帰宅。東京中西正樹の信到る。直に之に復す。外に田鍋に返書す。

四月二十五日 陰天。午前奥村傳氏来訪。午後白岩龍平、莊村秀雄、牛島正己の信到る。佐々干城、高岡元真前後来訪。

四月二十六日 晴。上海船津辰一郎、漢口岡、藤森列への添書を作り、内田赫一郎に交付す。友枝伴藏、牛嶋、上田、池邊源太郎等来訪。大坂白岩龍平に発信す。

四月二十七日 晴。片山生来訪。大坂鳥居、松倉、東京田鍋の信到る。同文会より四、五兩月支部費並に漢報補助費合計五百円送り来る。東京田鍋に復書し、漢報拡張費の送方を促す。

四月二十八日 晴。午前支那店に至り、人に托して銀行より金子を受取り、海軍省よりの手当其他五百円を熊本銀行に預く。各種の物品約十九元代を購ふ。台湾岡田晋太郎の信到る。之を宇土宮原に転送す。安達謙造来談。

四月二十九日 晴。中西正樹の信到る。午前同文会費三月より七月迄五ヶ月分五円を郵送す。内田無外来り別を叙す。本日より武昌に赴くと云ふ。午後井手三郎来訪。晩食後辞帰。

四月三十日 晴。午前田鍋の信到る。午後松倉善家来訪。本日大坂より帰来せりと云ふ。晩餐後辞帰。

五月一日 陰天。午後田鍋より秘密予算を送り来る。晩河口夫婦及び敬信子を招き晩食を饗す。夜牛島、上田来訪。齊藤国男の信到る。東京田鍋の電報到る。

五月二日 雨天。午前大坂白岩、中西の電報至り、余の啓程日期を問ふ。出て支那店に至り、白岩に返電す。午後緒方二三漢口より帰来。諸氏と談話時を移し八時雨を衝き上車帰宅。

五月三日 陰天。雷鳴。午前毛利篤来訪。午後上田、牛島、佐々干城諸氏前後来訪。古城貞吉の信到る。

五月四日 晴天。午前片山哲哉氏来訪、鶏卵を贈らる。午後出て高見廣川翁を訪ふ、在らず。去て支那店に到り井手、緒方、松倉、深水等と談ず。夜山田珠一と共に帰る。留守中古川、柴田来訪せりと云ふ。東京同文会より漢報拡張費一千元を送り来る。高橋謙、岡本源次の信到る。

五月五日 陰。午後出て新聞社に至り別を叙し、去て支那店に至る。福永銀行より金子を受取り四百円を預け、再び支那店に到る。緒方、松倉帰来。兩人予を往訪せりと云ふ。東京田鍋に復書す。

五月六日 雨天。招魂祭。午前奥村傳氏、田鶴を伴ひ来る。篠原由雄、古川権九郎来訪。午後出て柳原、大江、内藤諸氏に到り別を叙し、去て支那店に到る。四時緒方、松倉、深水、藤本諸氏予を開陽亭に送別す。六時辞帰。留守中山中新、莊村等来訪せりと云ふ。夜莊村、山田九郎、河口介男来訪。

五月七日 晴天。早起行装を理し將に禹城に向はんとす。八時半上車。家門を出て池田駅に到り、九時八分の汽車に乗ず。岳父並に友義氏、藤本、緒方、牛嶋、松倉、山田九郎、莊村秀雄、池邊源太郎、山田珠一、古川権九郎、津野一雄、永野金十郎、山中新、毛利篤、板井麻雄、勝木恒喜、門池、平山、柴田某来り送る。井手三郎、篠原由雄、牛島吉郎、上田賢象、友枝伴藏、井手友喜等同行たり。深水十八同車、大坂に向ふ。妹婿河口介男、菊地行の為植木迄同車し別を叙して去る。午後一時鳥栖に達す。深水と別れ、駅内に小休止、一時半長崎行の汽車に換坐す。八時半長崎に達す。一行七人土佐屋に投ず。熊本より車中同郷の旧友増田武雄に邂逅す。少時分袂相見ざる二十余年、此人職を陸軍

に奉ず。台湾より熊本を経て松山に帰る者なり。鳥栖に於て相別る。矢部川、鳥栖の間河野久太郎に遇ふ。

五月八日 晴天。午前安原氏に電報し、西航を告ぐ。土屋貞安、鳥居、山田珠一列に端書を發す。小田桐勇輔、橋元祐藏來訪、本日上海より來着せりと云ふ。西田新太、岩永八之丞、佐々澄治等來訪。午後大澤新等來見。三時土佐屋を出で、神戸丸に乗ず。西田、大澤、岩永、橋元、小田桐、中知等來り送る。午後六時開船。海波平穩。

五月九日 晴。海面如油、湖上を航するに似たり。如此の穩晴十余年來無き所たり。

五月十日 晴。海上平穩。早起浙海の諸山を望む。午前十一時船呉淞江に入る。潮を待て碇泊す。午後三時上海に達す。雷雨俄に至る。石崎、牧、山下稻、遠藤留、船津辰、香月等來り迎ふ。上車、豐陽館に投ず。晚食後東肥出張所を訪ひ、去て山根、安藤等を時報館に訪ふ、荒井在り。九時半辭帰。牧卷次郎、香月梅外、渡邊正雄、深沢暹、山下稻三郎、遠藤留吉等來訪。

五月十一日 晴天。午前石崎に托し金百元を兌換す。熊本より同行の諸氏來訪。午後仁平宜旬、小林新六來訪。小林より安慶楊子翁の信二封を転交す。領事館船津、深沢二氏より明日四馬路聚宝園に晚餐の案内あり。事冗を以て辭す。荒井甲子之助來る、中食を共にす。晚出で牧、香月、渡邊、山下、遠藤等を訪ひ、九時半去て領事館に至り船津、深沢を敲き、十時帰る。山下稻三郎來訪、明日蘇州に赴くを告ぐ。片山敏彦へ其の嚴君よりの送物を托寄す。

五月十二日 晴天。午前宇都宮太郎來訪、広東に赴くの途次なり。汪康年來訪。談話時を移て去る。午後東肥支部に至り髪を剃り、髻を削り、邦服を脱し清服を着す。蘇州片山の信到る。六時半井手と共に四馬路聚豐園の招邀に赴く。船津、深津等主人たり。來客は稻村、宇都宮、仁平、香月、井手、遠藤及び子の七人なり。九時辭帰。

五月十三日 晴天。午前宇都宮太郎より中食の案内あり。東和洋行に赴く。二時帰る。安藤、小曾根、熊澤等來訪せりと云ふ。三時唐才常、張通典、狄葆賢等と會談の約あり、時報社に會す。晚唐、狄、張等より四馬路一品香に招邀す。井手、山根、安藤、荒井等と共に赴く。洋饌の饗あり。十時半散ず。趙徒蕃、楊讓梨亦來會。是日熊本留守宅、大江岳父、安原金次に発信す。汪康年の信到る。

五月十四日 陰天。午後荒井來訪。晚食後汪康年を訪ひ、去て姚文藻を敲く。未だ蘇州より帰らずと云ふ。

五月十五日 雨天。岡幸七郎、田鍋安之助の信到る。蘇州山下生に発信し、広東行を勧む。午後遠藤、香月、渡邊等より晚餐の案内あり。一品香に赴く途中宇都宮、仁平等を東和洋行に訪ふ。

五月十六日 陰天。午後緒方二三、鳥居赫雄の信到る。湖南長沙人張燦來訪、畢永年の友人なり。湖南の急を訴へ拳義の速かならん事を言ふ。其同志譚祖培、李心榮と共に來滬せる者なり。三人少壯氣鋭真率愛すべし。江南地方に在りて得可からざるの才なり。予百万戒諭、大事の輕く為すべからざるを説き、暫く沈潜。實力を養ひ時會を待たしむ。

五月十七日 陰天。午後張通典來訪。湖南の歛山を日清兩國人にて開掘し、大に人員を集め、他日雄飛の地を為さん事を言ふ。又た洞庭湖畔蚕桑の利多きを以て蚕桑局を興し、日本の技師を聘せん事を説く。蘇州山下、熊本松倉善家の信到る。山下生に復書す。午後六時井手と碼頭に至り山城丸を待ち、高橋謙、中西正樹等を迎ふ。東和洋行に至り暢談。十一時に及で帰る。本便にて畢永年亦來着せり。平山周の信到る。

五月十八日 晴。午前畢永年、文廷式、唐才常、山田良政、中西正樹、高橋謙、志賀、中島等來訪。正午文廷式の案内にて唐、畢、山田等と共に洋饌を食す。午後畢永年又た來る。湖南人張燦、譚祖培、李心榮等來訪。談話時を移て去る。夜東和に中西、高橋等を訪ひ、十時半辭帰。

五月十九日 雨天。熊本留守宅に致すの信を作り、友枝伴蔵の帰国に托す。妻に金五円並に六神丸一個、蜜柑一簍二十六個托送す。外に熊本山田、毛利列並に池邊源太郎、古川權九郎、東京田鍋安之

助，安原金次に発信す。漢口より東京江崎嘉蔵の信，海軍よりの信四封，沙市松平福綱の信，福州前島真，台湾山田耕造の信を送り来る。東京江崎生並に亀井英三郎に発信し，江崎の事を托す。沙市松平福綱，漢口岡幸七郎に致すの信を作り篠原由雄の漢口に赴くに托す。是夜篠原大井川丸にて西上。友枝山城丸にて帰国，諸氏と之を埠頭に送る。

五月二十日 晴。午前高橋謙，中西正樹，山田良政，勝木恒喜，汪康年，畢永年，李心榮，張燦，譚祖培等來訪。蘇州姚の信を文廷式より送り来る。晚文廷式，汪康年両氏より案内あり，文氏の寓に赴く。会する者中西，高橋，井手，唐才常，畢，李，譚，沈以下数人なり。十時散ず。東和に至り，十一時帰る。遠藤來訪せりと云ふ。

五月二十一日 晴。朝畢永年來訪。東京安原氏に発信し，北京の形勢變動の兆有るを報ず。是日井手，中西，高橋等と蘇州行の約有り。午後出て東和洋行に至り，五時老閘の碼頭より大東洋行の小汽船に乗ず。船窓無事，詩を賦し，酒を把り楽言ふ可からず。

五月二十二日 朝陰，午雨。午前七時半船蘇州に達す。直に大東支店に至り荒井，海津等を訪ひ，朝食を吃し，共に出て城内の領事館に至り，諸井領事，片山，吉岡等を訪ひ，中食の饗を受け，午後荒井，片山，中，高，井諸氏と匪筋を質し圍門に至り，上岸市上を一覧し，再び船に乗り，細雨虎邱に遊ぶ。即ち呉王闔閭の墓，予此地に遊ぶ三回，四顧の江山皆旧識たり。邱上六朝の美人真娘墓，劍池，隋代の宝塔等あり。遊覽時を移し晚に及て帰る。姚賦秋より案内あり，中西を拉して之に赴く。雨甚猛。夜姚氏と快談。中西と共に宿す。

五月二十三日 陰。朝姚と共に居留地を一巡し，九時辭して大東に至り，高橋，井手等の来るを待ち，船を僦ひ石湖に遊ぶ。岸上范氏の祠堂有り。入て一調し山路を取て上方山に登る。頂上高塔有り。宋の太平興國年間の建る所楞伽塔と謂ふ。此処眺望甚雄，西南太湖を望み，東北平原千里茫として際涯無し。盤垣多時旧路を取て石湖に帰り，船に投ず。此処范石湖別業の遺址有り。午後五時蘇州に着す。晚諸氏と再び船に乗り探菱洲に至り月を賞す。詩酒情興近年の無き所。十時大東に帰り宿す。

五月二十四日 晴。午前荒井，中西と領事館に至り，片山の処にて中食の饗を受け，領事等に辭別し滄浪亭及び東本願寺の設立に係はる日語学校を見る。松林孝純，伊藤賢道等之を管理す。午後五時吳門橋下に至り大東の汽船に搭す。片山，荒井，海津，石原，橋本，田村諸氏送り来る。

五月二十五日 微雨。午前九時船上海に達す。上車豐陽館に帰る。東京同文会より六月分支部費二百五十元を送り来る。此外本部よりの信，熊本留守の信，美作為次郎の信到る。午後出て東和に至り中西，高橋等を訪ふ。山田良政亦來会。晚餐後時事を暢談し，十時辭帰。福州仁平宣旬の信到る。

五月二十六日 雨。朝太田原総治來訪，明日より福州に赴くと云ふ。前田彪に復するの書を作り之に托す。領事館船津，深沢より杏花楼に晚餐の案内有り。畢永年の信到る。福島某漢口より來着，岡幸七郎の信を携へ来る。東京田鍋に報告。台湾美作為次郎に返書。東京安原氏に報告を出す。夜井手，中西，高橋等と船津等の招邀に赴く。九時帰る。

五月二十七日 雨。昨日作る所の報告を郵送す。蘇州山下の信到る。午時出て山田良政，福嶋某の帰国を送る。高橋謙來訪。畢永年，中西正樹を拉し來りて中食を共にす。熊本美作より硫黄に関する電報至る。唐才常，勝木等前後來訪。夜永安里に中西を訪ふ。

五月二十八日 晴天。午前高橋，畢永年等來訪。畢に金九十円を与ふ。夜七時中西，高橋，井手等と四馬路一品香に至り文廷式，汪康年，唐才常，張通典，狄保賢，畢永年等を饗す。九時散ず。吉田順藏來訪せりと云ふ。

五月二十九日 陰。午前山下稻三郎來訪。東京より送來の本人広東行の旅費三十円を交付す。出て文廷式を訪ひ，午時帰る。午後張通典來訪。高橋謙，吉田順藏，中西正樹等來訪。夜牧港次郎來談。中西，井手と出て大井川丸に畢永年の漢口に行くを送る。畢は余の漢報館主筆に聘せし者なり。東京田鍋，熊本友枝の信到る。

五月三十日 微雨。午後高橋謙、龍沢厚、程詒、龍応中等来訪。午後高橋の処に於て広東人鄭官応に会す。一種の識見を具すと雖ども要するに自奮の氣象無く、有為の器にあらず。夜吉田順藏、山根、安藤、香月、渡邊、遠藤、牧、船津、深澤、山下、勝木、那部等十二人を四馬路杏花楼に饗す。十時散ず。

五月三十一日 晴、雨。東京安原、大坂鳥居に発信す。午後五時出て白岩龍平を迎ふ。六時高橋、中西、井手等と鄭官応、陶齋の招饗に四馬路一家春に赴く。来客は英人ミルトン及びアテム、安徽人呉広需、広東人陳露庭、王省三、鄭の四子某及び予等四人なり。九時半散ず。呉は朝鮮清国公使館書記官にして快活の人物なり。帰途吉田順藏を訪ひ、十時半帰寓。大坂深水十八の信到る。

六月初一日 晴天、熱甚。午前出て白岩を訪ひ中食。同人相会し河本磯平の法会を本願寺に営む。留守中狄葆賢来訪せりと云ふ。午後文廷式、姚斌秋来訪。姚は本日蘇州より帰来せりと云ふ。六時吉田順藏の招邀に四馬路杏花楼に赴く。八時半散ず。吉田宅に至り寛話。十一時高橋謙の広東行を送りて金利源馬頭の富順輪船に至る。十一時半握別。

六月二日 晴。朝中西正樹来訪。白岩龍平又来。汪康年来談。夜在上海同文会員山根、白岩、安藤、香月、那部、渡辺、勝木、遠藤、牧等より余及び中西、井手を招邀す。九時散ず。中西留宿。

六月三日 晴、風気爽涼。午後出て中西正樹を訪ふ。夜中西を招商局の海晏輪船に送る。十二時帰る。

六月四日 晴。午前白岩龍平来訪。中食後井手と三人馬車を雇ひ張園に遊び、藏煙吟社に小憩し、去て日本墓地に至り亡友の墓を展し、楊樹浦一帯の地を一遊して帰る。稻村大尉、細田謙藏、那部、牧等来訪。夜茶話会に臨む。来会者二十人許。

六月五日 晴。午前姚文藻、陶森甲、巢林来訪。陶は長沙人、現に江南に洋營務処に官し道台たり。総督劉坤一の器量する所。談話時を移て去る。夜姚氏より石路普慶里謝新卿の家に招待す。文廷式、井手、白岩、余を合せ主客五人たり。十時散ず。帰途那部武二を訪ふ。

六月六日 晴。午前東亞同文会上海文部の家屋を租賃す。橋本来訪。蘇州荒井及び牧卷次郎、勝木等来訪、帰る。畢永年、岡幸七郎の信到る。直に之に復す。是日張通典氏より四馬路一品香に晚餐の案内あり、事を以て辞す。福岡橋本齋次郎に致すの書を作り、之を其弟の帰国に托す。

六月七日 晴天。午前多田亀毛、白岩龍平、橋本良吉、文廷式等来訪。午後熊本留守宅の信、東京田鍋安之助の信二封、亀雄の信到る。杭州辻岡三郎の信到る。午後文廷式を訪ひ、譚時を移て帰る。

六月八日 晴。漢口岡氏に発信す。

六月九日 晴。是日井手、武昌路仁德里に移転す。夜橋本、田村二生を饒す。文廷式、其弟を携へ来たり訪ふ。十時姚斌秋来談、午前一時去る。

六月十日 晴天。是日熊本留守宅、東京安原、田鍋等に発信す。医書八冊を留守宅に送り、谷口長雄に転致せしむ。晌午橋本、田村二生の帰国を山城丸に送る。帰途山根虎之助を訪ひ小談、帰る。井手来訪。晩洋徑浜に到り物品を購ふ。船津辰一郎来訪。血脇亦来訪。

六月十一日 晴。午前井手の寓に至り、午後三時帰る。野中文雄来訪。晩井手来訪。夜英界に散歩す。

六月十二日 晴。是日陰曆端午たり。午前東肥に至る。午後海津駒吉蘇州より来訪。白岩龍平亦来訪。唐才常、狄葆賢来訪。晩井手の処に会食。

六月十三日 陰天。熊本留守宅並に佐々千城、東京安原、田鍋、江崎、梶川、大坂深水、台湾別府等に致書す。佐々には其の依頼せる露清銀行の事を報じ、安原には白岩の計画せる湖南に小汽船航路を開始する事に付き海軍よりの助力を求め、江崎には梶川への紹介状を送る。深水、別府へは正金銀行に従事する意無きやを問ふ。午後井手来訪。台湾奥村金太郎、東京善隣書院の信到る。白岩龍平より五馬路新泰和に晚餐の案内あり。汪康年より万年春にて晚餐の請帖到る。白岩との先約有るを以て之を辞す。夜白岩の約に新太和に赴く。文廷式、汪康年、姚文藻、吉田、井手、余の六人なり。九時散ず。洋徑浜に至り雜物を買ふて帰る。井手、白岩来訪。唐才常来訪せりと云ふ。

六月十四日 晴。是夜大元丸に乗り漢口に向はんとす。行李を整頓す。午前唐才常、狄葆賢を訪ひ、別を叙し、去て時報館に山根、安藤を訪ひ、帰る。中食後領事館に船津、深澤列を敲き辞別し、去て汪康年を訪ふ、在らず。姚文藻を敲く、亦た在らず。転て白岩、香月、渡邊、牧、井手列を歴訪し、遂に文廷式に抵り別を叙て帰る。晚汪康年より夜食の案内あり。之に赴く。九時華順馬頭に至り、大元丸に乗ず。吉田順蔵、山口、井手、船津、深澤、白岩、香月、山根、安藤、牧、勝木、牛島、上田、井手友喜等来り送る。十二時辞し去る。大元丸事務長川野姓、研究所出身たり。予の為に周旋尤も力む。

六月十五日 晴。午前二時開船。角田真平と同船す。

六月十六日 雨。午前金陵を過ぐ。

六月十七日 晴。午前六時安慶を過ぐ。午後二時小姑山、彭沢諸勝を過ぐ。六時湖口を過ぎ、鄱陽湖を望む。夜九時半九江府に達す。此夜月明、廬山を穩約の間に望む。風趣佳絶。

六月十八日 朝晴、午後雨。午前十時南岸武昌県を過ぐ。人煙二千計。城西に西山有り。十時半北岸黄州府城を過ぐ。城の突角岩石の上台樹小亭有り。東坡舟游の赤壁即是也。山高五十米突、断面は土色、赤の山上一木を生ぜず。所謂斷崖千尺文人の虚誇のみ。現に赤壁の下は麦隴にして水浜を距る四丁許り。江流状に變じ、昔時と同じからず。午後四時半船漢口に達す。上岸東肥に至り小談、轎を雇ひ漢報館に帰る。晚商船会社石原市松より一品香に招邀す。在漢の邦人三十余人皆会す。席上瀬川、前原等に晤す。九時辞して東肥に至り、十一時帰る。

六月十九日 雨。橘三郎、井口、藤森、石原、河野等来訪。是日携來の土産を武昌大原、柳原、東肥洋行、木野村並に沙市松平等に贈る。晚出て商船会社に至り角田真平の帰国を送り、去て東肥に至り、留守中借る所の金百三十円を返却す。

六月二十日 雨。終日在家。

六月二十一日 雨。東京西田良知より竜雄を細田家に養子たらしむるの媒介者として予の同意を求め来る。直に之に返信し承諾を告げ、又た内人に西田の書を転致す。橘三郎来訪。藤森来訪、晩食を共にす。金二十円を借て去る。瀬川領事来訪。夜吉田清揚来訪。

六月二十二日 雨天。午後井口来訪。白岩龍平上海よりの電報到る。小田切、姚、日清提攜問題の爲め日本に赴くに付き予の同行を求め来る。直に復電、上海迄下るべきを報ず。晚五台山副龍頭華人傑来訪、湖南長沙人なり。夜東肥に至る。

六月二十三日 晴。午後瀬川領事を訪ひ小談。三輪高三郎を訪ひ小叙、帰館。熱氣如焚騰龍山正龍頭李雲彪来訪、湖南長沙人、又名王紹棠来問亦哥老会中の人なり。張燦来り、团扇一把を贈る。

六月二十四日 晴天。午前金島に托し金二百五十元を銀行より受取る。午後柳原又熊来訪。李友雲、舒雲凱、李泉溪等来訪。石原市松来訪。是日上海に下らんとす、行李を收拾す。午後八時漢報館に出で大井川丸に乗ず。岡、畢、篠原、瀬川、藤森、橘、木野村、金島、吉田、前原等来り送る。石原市松、須世義、中山等と同船たり。八時半開船。

六月二十五日 陰。江風甚冷。予長江を上下する二十回たり。

六月二十六日 雨。

六月二十七日 晴。午前十一時船上海に達す。白岩、勝木等来り迎ふ。上車井出の寓に至る。白岩来訪。午後姚文藻、文廷式来訪。晩安藤、勝木来訪。夜英界に散歩す。帰途白岩等を訪ふ。

六月二十八日 晴。午前姚文藻、劉學詢来訪。劉は広東香山人、一千五百万の資を擁す。今回西太后の密旨を帯び慶寛と共に日本に赴く者なり。切に予の同行を促す。予見る所あり、遽かに之に応ぜず。談話時を移て去る。文廷式、姚文藻、廷式の弟等天津連莊会の首領邵鵬飛を携へ来り訪ふ。荒井来訪。夜四馬路大誠茶園に觀劇の案内有り。狄、唐二氏之が主人たり。汪康年等十余人之に赴く。十二時帰る。熊本留守宅の信到る。田鶴の縁談將に成らんとするを報ず。

六月二十九日 晴。午前文廷式を訪ふ。十一時劉學詢の案内にて其住宅に赴く。結構宏大、具に驕奢を極む。中食の饗あり。膳膳甚美。寛談三時に及び、転て張園の藏煙吟社に遊び、帰る。船津辰一郎來訪。夜安藤の北京行を一品香に饒す。十時散ず。

六月三十日 晴天。是日午前小田切、船津等を訪ひ小談。時を移て帰る。小田切は本夕上船帰朝するもの也。是日山中樵、安原、田鍋、西田良知、内人一号へ発信す。西田へは龜雄養子の事に付き万事を一任し、内人へは田鶴縁談の事を賛成せり。漢口岡、畢二氏へ発信す。晚石原市松、宇佐美某を東和洋行に訪ふ、在らず。去て英界に散歩し、帰て井出と山城丸に至り、石原、中山等の帰国を送り、十一時帰る。是日漢口より熊本留守宅の信を送り来る。

七月一日 晴。安藤虎男來り辞行す。本夕此地を辞し天津に赴くと云ふ。夜東肥に至り石崎生の病を問ひ、転て亜東時報社に安藤を訪ふ。十時安藤を送りて怡和の連陸輪船に至り、十時辞し帰る。此船甲午の秋、予虎口の厄に遭ひ纔かに免れしもの今昔を俯仰し、感殊に深し。

七月二日 晴天。寒暖計九十五度。白岩龍平來訪。夜文廷式より大馬路狀元樓に案内あり。会するもの張某（江西人張良の後全国道士の本家たり）以下七人。会散するの後、姚賦秋より案内到る。予之を辞す。唐才常、狄葆賢來訪。

七月三日 晴。大坂深水十八、熊本谷口長雄の信到る。漢口岡に発信し安永の爲替券を封送す。夜船津、深澤を領事館に訪ひ、十時帰る。是日姚賦秋來り、日本行を促す。予之を諾す。

七月四日 晴。終日在家。広東より趙蘭生、萱野某來訪。帶び高橋謙、益田三郎の書信有り。趙は康門の俊才、今年二十二歳と云ふ。

七月五日 晴。午前文廷式、白岩、那都、水谷等來訪。熊本留守宅よりの書信到る。直に之に復す。午後唐才常、狄葆賢來訪。劉學詢、慶寛二人主と爲り文廷式、趙夢石連名にて夜会の案内到る。之を辞す。晚中島真雄來訪、本日來着せりと云ふ。談話夜更に及で帰る。萱野某亦來訪。船津辰一郎亦來訪。

七月六日 晴。石崎の病を問ひ、去て瀛華洋行に至り、転て姚文藻を訪ふ。劉學詢在り。邵鵬飛亦來会、小談。去て常盤に至り中島真雄を訪ひ小談、辞帰。午後萱野、成田鍊之助等來訪。成田は昨日來着、此地正金銀行の従事する者也。広東高橋謙の信到る。夜宮坂九郎來訪。白岩龍平、水谷彬來訪。

七月七日 微雨。午前広西桂林人趙蘭生來訪。康門の俊才なり。漢口岡幸七郎に致書す。文廷式來訪。午後藤森茂一郎漢口より來着。安永松彦の信あり。直に之に復す。石崎生の病を問ふ。夕刻姚賦秋來訪。白岩、中島等來訪。七時半石崎終に病院に歿す、可憐哉。

七月八日 晴。予是日西京丸に乗り、西太后の密使劉、慶等一行を伴ひ東京に帰らんとす。早起行李を整頓す。九時上船。上等室に坐す。宇都宮少佐と同室たり。同行者は劉學詢問弔、慶寛小山、姚賦秋、蔡燕生金台、邵鵬飛夢石等なり。中島真雄、井出三郎、白岩、山根、荒井、牧、文廷式、上田、牛島、成田等來り送る。十一時開船。

七月九日 雨。風浪甚大。

七月十日 半晴。午前八時船長崎に達す。郵船会社の小蒸気船にて上陸、土佐屋に投ず。宮崎寅藏來訪。井深彦三郎亦來る。予を誘て宝亭に饗す。森永卯八郎亦來会。熊本留守宅に発信す。四時西京丸に乗ず。雨。五時開船。

七月十一日 晴天。午前七時門司に達す。碇泊四時間。劉等三井の案内にて馬関春帆樓に至る。十一時開船。碇泊中郵便会社支那派遣員茂木鋼之に会す。安原大佐より添書あり。且つ其の求に応じ瀬川、緒方、岡、白岩、井出等に致すの紹介状を与ふ。是日風波平穩。夜に入て織月如眉。内海の風光名状す可からず。支那人一行口を極て風景の美を称道す。清人等と閑談四更に及び、寢に就く。

七月十二日 晴。午前八時神戸着。嫌疑を避くる爲め支那人一行と別れ三宮風月館に投ず。電話にて山内崑、深水十八を招き中食を共にす。二人留談、夜に入る。十時東京行の汽車に乗ず。深水と大坂迄

同車す。大坂以東上等客は予一人たり。浜松に至り始めて二人乗車す。

七月十三日 陰。午前六時名古屋より東京田鍋安之助に電報す。午後六時五十分新橋に達す。小田切万寿之助、田鍋安之助、向野堅一等来り迎ふ。小田切の案内にて花月に至り会食す。九時半辭て神田の佐々木利助方に至り投宿す。田鍋来談。

七月十四日 晴天。午前松浦有志太郎来訪、近日中歐洲に留学すと云ふ。十時出て海軍々令部に至り安原氏に面し、去て東亞同文会を訪ひ小談、帰る。角田隆司郎、田鍋安之助来訪。田鍋を留て晚餐を共にす。

七月十五日 陰天。熊本留守宅並に山田珠一、横浜孫逸仙に致書す。午前佐々友房氏を四谷に問う。安達亦来会。中食後辭して同文会に至り一場の談話を為す。会する者長岡子爵、佐藤少将、田鍋、佐々木、小川、安藤俊明、外一人なり。諸般の事を商量し、五時散す。寓に帰れば孫逸仙在り。談話夜更に及て寢に就く。清浦奎吾、姚文藻二氏の信到る。

七月十六日 陰。午前清浦氏を城山町に訪ひ、談話時を移し、去て帝国ホテルに劉學詢、慶寛、姚、蔡、邵等を訪ひ、諸事を協議し、十二時辭帰。午後孫逸仙辭し去る。林安繁来訪、支那行に付き予の添書を請ふ。即ち漢口、上海の諸知人に致すの帖を作り之に与ふ。警保局長安樂を訪ふ。前日の来訪に答ふるなり。午後二時上車。永田町支那公使館に李公使を訪ひ、去て西郷氏を敲く、在らず。転て錢尙を麻布に訪ふ、亦た在らず。遂に安原金次の招邀に赴く。饗応具さに到る。暮に及て辭帰る。雨。晚田鍋安之助来訪。上海井手、朝鮮葉室、武昌中畑栄の信到る。

七月十七日 陰天。午前九時安樂警保局長を訪ひ、談話時を移て去り、海軍々令部に至り伊東祐亨、伊集院次長、安原大佐等に会し清国の現勢並に前途の趨勢を談説し、十一時伊東部長、伊集院次長と山本海軍大臣の処に至り対清の方略を説き、十二時半辭帰。午後亀井英三郎、佐々木四方志、小山秋作来訪。亀井、小山を留て晩食す。上海井手、白岩に復書し、漢口岡、畢、朝鮮葉室に致書す。宇都宮太郎、岡次郎に致書す。

七月十八日 陰天。朝三幸町に西郷内相を訪ひ、小生辭して支那公使李盛鐸を敲き寛談、晌午に及て帰る。孫文来訪。午後中野熊五郎来談。海軍中將芝山矢八氏の信到る。岡次郎来訪。蔡金台の詩信到る。直に之に和す。

七月十九日 陰。午前田鍋安之助、清藤幸七郎来訪。午後中路来訪。二時佐々氏を四谷に訪ひ、去て柴山を敲き暢談。暮に及て帰る。此人現に海軍大学校長たり。晚警保局長安樂兼道来訪。

七月二十日 陰。午前六時松浦有志太郎の独逸行を送りて新橋に到る。岡田晋太郎、村井十次郎、人見一太郎等に邂逅す。人見は同郷の人、相見ざる十五、六年。帰途岸田吟香を樂善堂に訪ひ、去て帝国ホテルに劉、慶、姚、邵、蔡等を訪ひ談話。晌午に至り、去て同文会に到る。柏原文太郎在り、暢談多時、午後二時帰寓。岡田晋太郎、對馬機来訪。熊本留守宅の信到る。田鶴緑談の事に關し奥村夫婦故障有るを告ぐ。直に書を作りて留守宅並に奥村に致す。夜留守宅の電報到る。奥村叔母来宅の事を告ぐ。直に返電。其をして宇土に送還せしむ。御嶺雅文来訪。晡時佐々克堂を訪ふ。

七月二十一日 陰天。午前田鍋安之助、中野熊五郎、原口聞一、安永東之助、孫逸仙等前後來訪。原口は広東、安永は上海に赴く者なり。孫を留て中食す。午後留守宅に発信し内人数日間家事上の苦心を慰む。神戸山内崙に発信す。姚文藻に発信す。上海井手、漢口岡、畢の信到る。直に之に復す。夜更田鍋安之助来訪。

七月二十二日 雨。朝西郷氏を訪ふ、大磯に赴けりと云ふ。樺山氏を敲く、亦在らず。宮島大八を訪ひ小談、去て參謀本部に至り福島を訪ふ。対州に向て出發せりと云ふ。遂に宇都宮、小山、齊藤等を見、晌午帰る。熊本留守の電報到る。留守宅に発信す。午後對馬機来訪。夜田鍋安之助来訪。

七月二十三日 晴。午前十時同文会に於て長岡子爵と会見の約有り、之に赴く。十一時帰る。午後一時旧華族会館に至り、同文会員に向て一場の談話を為す。会する者長岡護美子、佐藤宮中顧問官、長谷

場純孝，村松愛蔵，国友重章，池邊吉太郎，田邊安之助，陸実，原口聞一，角田，森井，隈元，清藤，安藤俊明，小田桐以下二十人。午後五時散ず。原口，村井啓太郎，田邊，清藤，中野，安藤等と築地の青柳楼に至り会飲し，夜十時衆に先て帰る。留守宅の電報到る。田鶴宇土より帰宅せるを報ず。

七月二十四日 晴天。午前 劉学詢，慶寛，姚文藻等を帝国ホテルに訪ひ，談話時を移て去り，田鍋を同文会に敲き，長岡子爵にも一面し，晌午帰寓。国民新聞社塩津誠作来訪。神戸山内崑の信並に池邊吉太郎より二十七日晚餐の案内到る。池邊に復書し，熊本留守宅に一書を發し帰県のを報ず。宇都宮太郎に発信す。宇都宮の信到る。柴山中将の信到る。井上雅二来訪，之を留て晚餐す。岡次郎来訪。

七月二十五日 午前大雨，午後晴。田鍋，塩津来訪。熊本留守宅の信到る。直に之に復し，並に宇土奥村に発信す。漢口岡幸七郎，畢永年の信到る。午後柴山中将，宇都宮太郎に返書し，其の案内を辞す。午後五時有楽町日本倶楽部の宴に赴く。来会者長岡子爵，榎本武揚，神鞭知常，田邊，村松，佐々木，佐藤少将，福田，小川，清藤及び予の十一人なり。九時散ず。田鍋来談。深水並に深水の為に正金銀行山川勇木に致書す。

七月二十六日 晴天。朝劉学詢，慶小山に発信す。漢口緒方二三，岡，篠原に発信す。上海井手に発信す。午前出て海軍軍令部に安原を訪ひ，去て西郷氏を敲く。已に内閣に出頭して在らず。宮島を訪ひ，転て同文会に至る。宮川某来り，窮を訴へ金を借る。之に少許を与ふ。午後中野熊，深水清，田鍋等来訪。岸田吟香に発信す。松平正直より明日会見を要求し来る。大坂鳥居赫雄の信到る。直に之に復す。池邊吉太郎に発信し明日の案内を辞す。上海白岩龍平に発信す。

七月二十七日 陰雨。朝西郷氏を訪ひ，談話時を移し，去て支那公使李盛鐸を敲き，午時帰る。午後帝国ホテル，劉学詢一行を訪ひ，辞別し去りて松平正直を麻布に訪ひ，転て安原を敲き，帰る。夜田鍋，御嶺，孫文等前後来訪。十時孫を伴て帝国ホテルに至り劉学詢に密会せしむ。午前一時帰る。大坂深水，岸田の信到る。孫留宿。

七月二十八日 晴。熊本留守宅の信到る。大坂鳥居，上海白岩に発信す。午前蔡金台，姚文藻，邵碧石，清藤，田鍋等前後来訪。姚，邵，孫を留て中食を共にす。快談三時に及て帰る。深水十八大坂より来着。今田主税来訪。四時出て池邊を朝日新聞社に訪ひ，五時帰寓。孫文より紅葉館に晩食の招きを受く。事見を以て辞す。岡次郎来訪。九時佐々氏を四ッ谷に訪ふ，在らず。十時劉学詢来訪。談話午前一時に至て辞し帰る。長岡子爵より余に勧めらるるに更に数日間の滞京を以てす。余書を送りて之を辞す。安原氏に発信す。

七月二十九日 晴天。午前五時半旅宿を辞し新橋に至り，一番汽車に乗り帰県の途に就く。広東に赴く原口聞一，上海行の清藤幸七郎，品川行の深水十八と同車す。安藤俊明，村井啓太郎，孫逸仙，並に清国公使訳館馮孔懷，公使李盛鐸の代理として名刺を持し来り送る。六時開車。夜十時四十分神戸に於て山陽列車に換坐す。

七月三十日 晴。午後一時徳山に達し，一時四十分の第二平安丸に乗ず。午後六時二十分門司に達す。清藤，原口に別れ，石田に投じ晚餐，沐浴，九時半九州鉄道の列車に乗ず。清藤亦来り乗ず。原口来送。

七月三十一日 晴。午前五時池田駅に達す。上車千反畑の宅に帰る。齊藤国男，川口介男等来訪。孫逸仙より写真を送り来る。晩大江を訪ふ。

八月一日 晴。午前新聞社，鎮西館，支那店に至り，晌午帰宅。岡村生来訪。午後九州新聞社員中村事来訪。夜河口氏来訪。

八月二日 晴。朝毛利篤，池邊源太郎来訪。大坂鳥居，東京亀雄に発信す。午後岡本源次来訪。六時池田より上車，宇土に赴き奥村家を訪ひ，十時二十分の汽車にて帰る。

八月三日 陰。午前藤本親信、市原、井口来訪。午後松田満雄、山田九郎、矢野某来訪。夜山田珠一來訪。

八月四日 晴。朝清藤幸七郎、勝木恒喜、佐々干城来訪。大坂鳥居の信到る。午後九州日日社山田を訪ひ、去て支那店に至り曾遊会の事を商量し、晩帰宅。山田九郎、矢野来訪。

八月五日 晴。片山哲哉、佐々干城二氏の信到る。

八月六日 晴、熱氣甚。午前谷口長雄来訪。上田小三郎来問。午後永原、古川来訪。片山、佐々二氏に復書し、並に郡ノ浦永嶺慎治に其弟死去に付き吊状を發し金一円を郵送す。是日妹田鶴、田中清に嫁するの約成る。朝来諸般の準備を為す。白岩龍平、徳田弘策の信到る。午後八時大江岳父、河口妹婿並に内人と田鶴を送りて上林町田中家に至る。結婚式終り、十二時半帰宅。

八月七日 晴。早朝阿部野利恭、井口忠、梅田尉太郎来訪。阿部野は西伯里に居を構へ、紅茶販売に従事せる者なり。午前河口氏と田中家に至り昨夜の礼を述べ、去て佐々布家に至り其の媒妁の労を謝し、津田静一、谷口長雄を歴訪し名刺を留て帰る。上海井手三郎、朝鮮葉室謹純、東京田鍋安之助の信到る。午後柴田常三郎来訪。夜内人と河口家を訪ふ。

八月八日 晴。牛島貫吾氏来訪。上海井手、岡山白岩、巴黎大内、外に松浦、阿部野の信到る。白岩に復書す。午後上車支那店に至り、転て砂取碧水樓の清韓曾遊会に臨む。出席者高岡元真、村上一郎、有吉、村井、安達、山田、山田九郎、清藤、有働、深水兄弟、吉岡、藤森、井口、藤本、橋口、沢村、石坂、下村、成田定、佐藤潤泉、以下数人。夜九時散ず。

八月九日 晴。午前清藤、友枝、徳田、深水来訪。夜大江に至る。

八月十日 晴。午前深水十八、松田満雄来訪。佐々友房氏に発信す。晚齊藤国男、阿部野利恭来訪。

八月十一日 朝微雨、午前風大。同文会よりの書信到る。晚田中家より初入有り、十時散ず。鳥居赫雄の信到る。

八月十二日 陰雨。朝井口、藤本来訪。東肥洋行前途の事に付き商量する所あり。漢口岡幸七、畢永年、牛莊松倉善家、莊村秀雄、香港陳白、四川井戸川辰三、大坂深水、上海井手三郎、北京中島雄、沙市松平福綱の信到る。松平より藤田東湖翁の真蹟を送り来る。午後田中清司、清藤幸七郎、大村友之丞、村上一郎前後来訪。

八月十三日 陰、夜雷雨。東亜同文会に四月より七月に至る四ヶ月分の決算報告を送る。中野二郎に致書し、阿部一身上の事を依頼す。清藤来訪。上海井手三郎への紹介状を与ふ。松田満雄、井口、齊藤、中根等来訪。午後六時清藤の支那行を池田駅に送り、転て支那店に至り、十時帰る。是日藤森より三十元の内二十元還さる。漢口瀬川浅之進に致書、其内人の死を吊す。岡幸七郎に発信す。佐々干城氏の信到る。

八月十四日 陰雨。午前古川、津野、永原、河口来訪。午後松浦有志太郎来りて別を告ぐ。十七日より獨乙に遊学すと云ふ。米原繁蔵来訪。夜更暴風雨、簷倒瓦飛。

八月十五日 風狂雨暴。上海井手三郎、畢永年等の信到る。

八月十六日 陰天風大。清藤幸七郎長崎よりの信到る。東京龜雄、夏羽織一領を郵送す。東京姚賦秋に発信す。古川権九郎を訪ふ。

八月十七日 雨天。午前九時池田駅に至り、松浦有志太郎の洋行を送る。午後長崎より中西正樹の電報到る。北京より帰来せるものなり。出て電報局に至り中西に復電し、去て支那店に抵り物品を購ひ帰る。佐々干城氏を開通社に敲き小談、帰宅。夜河口介男来訪。

八月十八日 雨天。午後市原源次郎来訪。大坂白岩龍平の信到る。夜新屋敷一番町に古閑威雄の病を問ふ。夜十一時中西正樹来着。北京より帰途道を枉て来訪せるもの也。談話深更に及で寝に就く。

八月十九日 陰。午前中西と出て山田を九州日々新聞社に訪ひ、去て支那店に至り、井口を拉し三人水前寺に至り臨流亭に飲み、閑談午後三時半に及で帰る。夜内人女兒を伴ひ中西と四人通町勤工場に至

る。中西女兒清子に玩具数点を購ひ贈る。

八月二十日 晴。午前中西帰京の途に上らんとす。共に出て中島真一を下馬天神丁に訪ひ、中食の饗を受け、午後三時中西に別れ帰宅。六時池田より上車、宇土に到り法華寺、城山の先塋に謁し香華を供し、帰途一里奥村宅に至り晚餐を吃し、金拾円を贈り、十時二十分の汽車にて熊本に帰る。偶々春日駅にて中西正樹の上車するに会ふ。深水十八同行たり。予も為に池田駅迄同車し中西等に別れ、明月に歩して帰る。是日旧暦孟蘭盆会たり。

八月二十一日 晴雨無定。午後四時佐々干城、古閑信喜二氏の招邀に静養軒に赴き洋饗を吃し、八時帰る。夜更下痢激甚。

八月二十二日 雨天。午後松田満雄來訪。晚井上秀治、田中清司を招て会食す。

八月二十三日 晴。午前木村万作來訪。午後岩田衛來訪。河口敬信氏に托し熊本銀行より当座預け百五十円を受取る。上海井手三郎、清藤幸七郎、漢口岡幸七郎、四川井戸川辰三、漢口緒方二三等の信到る。緒方より金五十円を一時立て替へ、池田勇氏へ送らん事を求め来る。夜上海井手三郎に復書す。

八月二十四日 晴。夜田中清司宅を訪ひ、十時帰る。

八月二十五日 晴。午後緒方二三の依頼により金五十円を池田勇氏に送る。漢口緒方に致書し、池田氏に送金の趣を報ず。夜大江を訪ふ。

八月二十六日 晴。午前九時二十分内人並に友義子を伴ひ池田より上車、松橋駅に至り、腕車を賃して二本松に向ひ、一茶店の樓上に休憩し、小汽船の到るを待つ。午後五時漸く来る。即ち之に乗じ三角に向ふ。七時二十分着油屋に投宿す。

八月二十七日 晴。朝海岸に散歩す。朝食後富岡知事の為に建立せる記念碑を見る。碑銘は井上毅氏の撰に係はる。此处温泉岳を前面に望み天草の諸山を海門の欠処より遠見す。宛然一幅の活画図、九州の絶勝たり。帰途下田一巳に名刺を留めて帰る。午時下田氏來訪。午後出て下田、安富喬二氏を訪ひ、晚餐の案内を為して帰る。七時下田、安富二氏を招て会食す。十時散ず。

八月二十八日 陰。午前七時小汽船に搭じ、富岡に向ふ。湯島の辺を過ぎ赤崎、島子、町山口、鬼池等の地に立寄り、早崎の瀬戸を通過し、通詞島と本島の間を航し、午前十一時富岡に達す。航程五時間たり。雨を衝て上陸、岡野屋に投ず。衣袂皆沾ふ。夜に入て風雨激甚。

八月二十九日 晴。午前西海岸に散歩す。太平洋に面し、氣象浩蕩、怒濤山の如く来て岸辺を嘯む。鞆鞆声有り。海浜小石密布、瑩沢如珠。晌午松江某、吉川嘉久馬、森茂等、刺を通じ來り訪ふ。皆地方の有志家なり。晚内人と西海岸に散策し、姪子崎に遊ぶ。此处高丘の一角海中に斗出し、喬松数十株、一小祠の四辺を囲み、前に大洋を俯瞰し、後に内海の諸勝を望み、形勢最雄、時恰も太陽波間に没し、暮色蒼然、前海後湾、漁火千点、夜景亦甚妙。海風衣袂を払ひ、爽氣兩腋に生じ、人をして羽化の思有らしむ。

八月三十日 晴。朝森茂來訪。内人、友義子を伴ひ臥龍城址に遊ぶ。村の西南に在り。山上松樹鬱蒼、稻荷の祠有り。山下小池有り、村中の飲料多く此水を引く。祠内に小休して帰る。朝來鰯魚を食ふ。味甚美。午後松江氏來訪、談話時を移て去る。富岡町人煙七百、多くは漁業を以て生を為す。人情醇朴、甚だ愛すべし。夜瑞林寺に散歩す。風趣甚佳、富岡十二勝の一たり。

八月三十一日 陰。午前白岩崎に散歩す。奇岩怪石錯峙乱排、潮水其間を往来し、最も沐浴に適す。午後分署長山内幾四郎、松江某、中田卯之吉、道田俊之、吉川嘉久馬等來り訪ふ。晚当地の有志家十七人、予を招待し一場の談話を聴かん事を求む。即ち之を諾し、六時会場に至る。饗応大に到る。且つ談じ且つ飲み、十時に及て辞帰。

此日有詩、

天地茫々一葉秋、閑遊探勝入茶洲、雄心遙指大洋外、鶻影低迷覺羅州。

満月風光欲暮天，扁舟對酒人如仙，壯心付與閑鷗夢，世上突然涼何處。

九月一日 積陰。午後雨。松江丈部，吉川嘉久馬，森茂，山内幾四郎諸氏來訪。三時吉川氏の案内にて松江宅に至り，山内等に會し，相携て臥龍山下ト部翁の閑居を訪ふ。翁伊予の人，茶道に精し，予が為に茗を煮て侑む。閑談暮に及で辞す。途中諸氏に別れ，吉川氏と西海岸を散歩し，帰る。河口敬信，鳥居赫雄，山田珠一，沙市松平福綱諸氏に致書す。此日ト部の閑居を訪ふ席上の詩如左，

瀟洒竹堂ト勝地，半窓入海半窓山，主人愛客情如故，貪取林泉一日間。

夜吉川氏，其先人蓄ふる所の小石一匣を携へ來り示す。

九月二日 陰天，午後微雨。午前西海岸を散歩す。午後出て吉川，森，山内等を歴訪し，去て松江氏に至り小談。同氏を誘て帰り，蛭子鼻に至り盤桓多時，夕陽海浜を漫步して帰る。松江を留て晩食を共にす。夜吉川，松本，小山等來訪。

九月三日 健晴。是日此地を辭し熊本に帰らんとす。朝來行囊を戒む。松江來訪。午後一時半富野口を辭し小林回漕店に至り汽船の到るを待つ。松江，吉川等來り送る。四時に至りて船始て到る。二三子に別れ上船す。山内幾四郎と町山口迄同船す。九時船三角に達す。油屋に投宿。

九月四日 晴。午前七時乗船三角を辭し，八時半二本松に達す。上車松橋に到り，午前十時の汽車に乘じ熊本へ帰る。岡本源次，狩野直喜來訪。佐々干城，古閑信喜，官原義雄の信到る。留守中岡，篠原，白岩，佐々干城，西田良知等の信到る。又た留守中來訪者は井口，齊藤国男，木村万作，友枝，岡本，米原，奥村，市原，大島大尉，月本猪介，広岡理則等なり。晩米原と鎮西館に至り岡本を訪ひ，十時帰る。

九月五日 陰，午後四時頃より降雨。水草松江丈部，吉川嘉久馬，山内幾四郎，上海井手三郎等に発信す。上海井手の信到る。午後河口敬信の病を問ふ。矢野某來訪。

九月六日 雨。木村万作，牛嶋貫吾來訪。午後支那店を訪ひ，帰途田中清司を訪ひ，帰る。

九月七日 雨。齊藤国男，官原義雄來訪。龜雄に発信す。

九月八日 半晴。午前行徳健男，市原源次郎來訪。午後米原を訪ふ。六時米原繁藏，市原源次郎，齊藤国男並に友義子を招て晩餐を饗す。

九月九日 晴。晚大江の招邀に赴き，十時帰る。

九月十日 晴。牛莊莊村秀雄の信到る。午後古川権九郎を訪ふ。津野，永野等在焉。五時辭帰。

九月十一日 微雨。午後支那店に至り，帰途鎮西館にて山田，村上，柴田諸氏と晤し，暮時河口敬信の病を問ひ，帰る。夜河口介男，米原繁藏來訪。

九月十二日 晴。午前藤本親信來訪。之を留て中食を饗す。

九月十三日 晴。朝木村万作來訪。龜雄に発信す。

九月十四日 晴。午後山田九郎，美作為次郎來訪。夜市原源次郎來訪。

九月十五日 晴天。

九月十六日 晴。朝佐野直喜の信到る，昨夜來着せりと云ふ。晚佐野を訪ふ。山内幾四郎，佐々干城，古閑信喜等の信到る。

九月十七日 晴。八時上車。中島村に至り井手素行の留守宅を訪ひ，其嚴君，北堂，其他の諸君に面し小飲。十一時辭し帰る。午後河口介男來訪。佐々，古閑二氏に復書す。

九月十八日 陰，午後微雨。正午美作為次郎の案内にて佐野，古川，牧諸人と水前寺に至り，暮に及で帰る。帰途古川と佐野を訪ひ，九時帰る。

九月十九日 積陰，微雨。上海井手三郎の信到る。東京宇都宮太郎，井戸川辰三に発信す。午後宇土に至り法華寺，城山の先塋に展し，奥村宅に至り晩食後，辭して七時半汽車に乗ず。風雨頗強。九時帰宅。是日中西正樹の電報到り，鳥栖に會合せん事を求む。

九月二十日 雨天。午後上車。開運社に佐々，古閑を訪ひ，去て市原，藤本，上田，牛島，清藤，佐野

等を歴訪し、三時帰る。四時半出て、佐々、古閑二氏の招邀に静養軒に赴き、七時帰る。西田良知の信到る。

九月二十一日 微雨。朝佐野直喜来訪。中西正樹、鳥栖より信到る。東京西田良知、亀雄、長崎中西正樹に発信す。西田氏へは亀雄送藉の事に付き依頼する所あり。晩新屋敷牛嶋貫吾の招邀に赴く。藤本親信と偕にす。九時帰る。市原生来訪。

九月二十二日 雨。午前支那店に至り、藤本、藤森に会す。中食後辞帰。途中河口介男宅を訪ひ、帰る。夜中西正樹、長崎より来着。

九月二十三日 陰。午前山田九郎、古川、米原、田中、山田珠一、河口介男等を歴訪して帰る。午後大江に至る。上海井手に発信す。美作、池上辰雄、田中氏全家、河口介男諸氏来訪。夜中西と古川、津野、米原等の宅を訪ひ、九時帰る。微雨。予明日を以て禹域に遊ばんとす。事故有りて一週日を延期す。

九月二十四日 晴。午前藤本、岡本、池内源七、寺元猪介、牛嶋等来訪。午後中西と支那店に至り理髪。去て中嶋真一を下馬天神に訪ふ、在らず、歩して帰る。夜河口介男来訪。

九月二十五日 陰天。午前中島真一來訪。午後三時中西正樹福岡を経て長崎に帰る。

九月二十六日 晴、熱甚。午後第五高等学校生太田祐三郎来訪。友枝伴蔵来訪。

九月二十七日 晴。夜米原を訪ふ。

九月二十八日 晴。午後山田九郎の蔵君の葬式に往生院に会す。晡時米原来り、晚餐の案内を為す。六時之に赴く。武藤虎太在り。九時辞帰。

九月二十九日 雨。牛嶋貫吾氏より其四男の死去を報じ来る。直に書を作て之を吊す。午後山中新、古川権九郎来訪。夜池内源七来訪。

九月三十日 陰天。午前山田九郎を竹部に訪ひ、其父翁の死を唁す。午後大江に至り辞別す。夜米原来り別る。河口介男来談。嶋田数雄に発信す。

十月一日 晴天。是日郷里を辞し、清国に遊ばんとす。早起行李を整頓し、八時半上車。家門を出て九時八分の上り列車に池田駅に乗り、長崎に向ふ。岳父、友義子、田中翁、同清司、米原、池上、池内、寺本、美作、藤本諸氏来て行を送る。午後一時鳥栖に着し、長崎行の汽車に換坐し、夜八時半長崎に達し、土佐屋に投宿す。電話にて中西を招く。他出不在。十一時就寝。

十月二日 晴天。朝京都土屋員安、東京亀雄、並に留守宅に発信す。中西正樹来訪。午前中西の寓緑屋に至り談ず。鈴木天眼来談。中食後帰寓。岩永八之丞、吉川季次郎、西田龍太、田岡正樹、佐々澄治来訪。上海行の船出帆明日午後に延期せりを報し来る。佐々の依頼により佐々友房氏に発信す。外に牛莊松倉善家に致書す。夜西田来談。

十月三日 晴。朝権藤外一名来訪。午時中西来訪。午後田岡正樹、木塚某来訪。権藤外一名より松浦濱四瓶を贈り来る。三時半土佐屋を出て山城丸に乗ず。中西送り来る。上等切符を中等と誤り出帆の際始て之を知り、遽かに人を郵船会社に派し漸く交換するを得たり。梶原某と同室たり。小田切亦此船に在り。

十月四日 穩晴。

十月五日 穩晴。午前四時半船揚子江口に達す。碇泊四時間、正午吳淞口外に至り潮を待ち、午後二時に及で抜錨、三時半上海に達す。井手三郎、佐々木四方志、清藤幸七郎、白岩龍平、牧卷次郎、宮坂九郎、橋元裕蔵、以下八九人來り迎ふ。上車、同文会に入る。夜宮坂、橋元等来談。汪康年来訪、湖南に赴くと云ふ。

十月六日 晴。正午白岩の案内にて井手と共に赴き中食の饗を受く。勝木来訪。夜小山秋作の病を得て漢口より着せるを聞き、往て之を訪ふ。衰弱甚し。角田隆郎及び稻村、仁平の二大尉亦来会。十時帰る。漢口岡宰七郎、東京宇都宮太郎の信到る。

十月七日 晴。熊本留守宅，安原大佐，田鍋安之助に発信す。安慶楊子荃の信二封到る。山根虎之助，仁平宣介来訪。午後船津，深澤，成田，唐才常，張通典等来訪。

十月八日 晴。成田，勝木等来訪。東京亀雄の信到る。之に復書し且つ西田良知に致書す。長崎権藤善太郎に発信す。西巻豊佐久，白岩龍平，香月梅外来訪。夜宮坂，安永列来訪。

十月九日 晴。午前文廷式，汪甘卿，張通典，李嶽衡等来訪。熊本留守宅に発信す。大井川丸に托し，漢口緒方，岡等に致書す。是日邦服を解き満衣を着く。晚金島文四郎来訪，本日北清より帰来せるもの也。

十月十日 晴。東京同文会に八九二ヶ月の決算書を送る。白岩，山根来訪。夜英界を散歩す。

十月十一日 晴。午前支那服を購ふ，価金三元。午時東肥にて中食す。夜市街を散歩す。

十月十二日 晴。午後郵船碼頭に至り吉田順蔵の福州行を博愛丸に送り，且つ瀬川浅之進，井上雅二を迎ふ。領事館小田切の処にて瀬川等と小談。辞帰。外務書記官西村静夫亦今僕にて来着せり。夜洋徑に散歩す。宮坂九郎，橋元祐蔵来訪。唐才常，沈克誠来訪。

十月十三日 晴天，午後陰，夜雨。瀬川浅之進來訪，本夕より漢口に赴くと云ふ。晚佐々木四方志の案内にて新泰和に至り晚餐す。会する者西巻，伊吹山，原口，石田，井手，井上，牧及び予なり。九時散ず。井手と領事館に至り小田切，瀬川等を訪ひ，十時天龍川丸に瀬川の漢口行を送り，十一時帰る。

十月十四日 雨。工科大学生高橋雄次郎来訪。東京宇都宮太郎，井戸川辰三並に内田岳父，河口介男，田中清司，米原，池上，友枝伴蔵，木村万作，佐々干城，古閑信喜等に発信す。

十月十五日 晴。夜白岩を誘ひ，去て豊陽館に中島を敲き，帰る。

十月十六日 陰，秋冷甚厲。午前井手と稲村を楊樹浦に訪ひ，兼て張元済を敲く，在らず。午後井手，佐々木等と滬報館に至り機器を点検し，帰途姚文藻を訪ふ，在らず。去て唐才常に抵る，亦た在らず。牧巻次郎を訪ひ小談，帰る。熊本留守宅の信並に田鍋安之助の信到る。

十月十七日 陰寒。午後文廷式来訪。沈克誠，師讓，汪甘卿等前後来訪。漢口岡幸七郎の信到る。西田龍太の信到る。

十月十八日 積陰，夜雨。午後稲村新六，山根虎之助，井手三郎，佐々木四方志，清藤幸七郎，井上雅二等と馬車を賃し徐家匯に至り南洋公學を觀る。盛宣懷の創立する所生徒二百人有り。師範学校の予科にして米人二名之を監す。教場，自習室，寢室，化学室，図書室等に區別し，頗る整頓す。蘇人李一琴なる者康派の俊才たり。現に副提調の位置に在り，余輩を各教室に導き周旋甚だ力む。四時辞し帰る。夜白岩の案内にて其の寓処に至り会食す。

十月十九日 雨。午前松田満雄来訪，昨夜来着せりと云ふ。宜昌に赴き農商務省の商品陳列を管理する者なり。姚文藻亦来訪。昨日蘇州より帰来せりと云ふ。

十月二十日 健晴。東京安原氏に報告。外木村万作，岩崎士雄，田鍋安之助に発信す。出て姚賦秋，文廷式等を訪ふ，不在。白岩を敲き，去て松田満雄を訪ひ，暮時帰寓。夜月に歩す。

十月二十一日 晴。熊本留守宅に発信す。午後唐才常等を訪ふ。張通典坐に在り，小談。去て停車場を見，白岩の処にて小談，帰寓。夜雨。

十月二十二日 雨。午前小越平陸を訪ふ。北京より来り，近日中南清に歴遊せんとす。白岩の処にて成田鍊之助等と会食し，晡時帰寓。宮崎寅蔵香港より来着。

十月二十三日 晴。午前十時宮崎外国船より日本に帰る。夜江辺に散歩す。八時諸氏と出て松田満雄の漢口行を天龍川丸に送り，十一時帰る。漢口岡，緒方，瀬川等に致書，近衛公到鄂の事を報じ予め布置を為さしむ。

十月二十四日 晴。午後馬車を賃し諸氏と出て近衛公を迎ふ。明朝にあらざれば入船せずと云ふ。去て大花園に遊び，四時帰る。夜白岩，井手と一品香に至り洋食を吃し，帰途三井を訪ひ，帰る。

十月二十五日 晴。朝馬車にて怡和碼頭に至り近衛公を待つ、来らず。直に帰寓。文廷式來訪。午後五時諸子と馬車を駆り、近衛議長を永生号に迎へ、共に三井の旅館に至り小談、帰寓。高橋謙広東より□行し来り、我寓に來宿す。

十月二十六日 微雨。午前近衛公を訪ひ、転て瀛華洋行に那部を訪ひ小談。去て石路に至り衣服を購ひ帰る。午後郵船会社の案内にて中食の饗を受く。近衛公を主賓とし、予等七八人なり。夜近衛の歓迎会に東和洋行に至り、八時席散ずるの後三井の案内にて近衛公と支那演劇を観る。十二時帰る。

十月二十七日 陰。午後姚文藻の病を問ひ、帰りて行李を收拾す。今夜瑞和号に乘じ近衛公の一行と南京を歴て漢口に赴くが為なり。午後聚豐園に近衛公を饗す。夜深水十八、勝木列來訪。十一時井手、佐々木、清藤等と同文会を出で、怡和洋行の瑞和和船に搭ず。上海在留の日本人多く来り送る。同行は近衛公爵、小原、大内、井手、佐々木、白岩、清藤、藤原及び予の九人なり。

十月二十八日 晴。午前二時開船。午前通州、江陰を経過し、日暮圖山関を過ぐ。有詩曰、孤篷江水遠、日落圖山関、詩思何切是、荻花秋一灣。船中同行者多数の爲め興味如湧。

十月二十九日 晴。午前四時半南京に達す。洋務局及び本願寺より来り迎ふ。六時一行と馬車に乘じ城内に入る。天色未明、秋冷骨を砒す。大道の両側柳樹列植、風趣如画。先つ本願寺に至り小憩。朝食を吃し、予、白岩、井手と洋務局に至り廖姓に面し諸般の交渉を為し、帰る。七時近衛公と洋務局に移る。総弁汪嘉棠出迎。午前公爵以下一行九人驢に乘じ朝陽門を出で、紫金山下明太祖の陵に謁す。俗に皇陵と謂ふ。廢礎断壁滿月荒涼俯仰今昔多少の感無くんばあらず。陵の中腹に上り金陵を俯瞰す。形勢雄偉、居然たる南方の重鎮たり。紫金城の西端砲台有り。富貴山砲台と曰ふ。陵道の西側石人石象依然尚存、其大可驚。洋務局に至り中食の饗を受く。総弁汪氏之が主人たり。午後四時近衛公以下と四人擡の轎に乘じ総督衙門に至る。礼砲三發大門を開く。督撫兩軍一中隊兩側に整列し、捧銃して敬意を表す。総督劉坤一中門に立ち公爵以下に一々握手、迎て正庁に至り、三鞭酒を出し歓待す。清官の陪席する者、道台黃承乙、汪嘉棠以下二名なり。談話一時間後の辞出。総督又た送て中門に至り、握手相別る。劉年齒七十一、容貌温和、他の奇態無きが如し。然れども談笑の間誠篤の意面に表はれ老臣の体度自ら備はる。夜洋務局に於て盛饌を設け一行を饗す。黃承乙、総督の代理として来り列し一行に総督の名刺各一枚つつを送る。九時席散ず。九時半洋務局を辞し一行皆馬車に乘じ下関に至り投宿す。洋務局特に兵丁及び委員を派し来り送る。夜漢口瀨川領事に電報す。南京謁明太祖陵有詩曰、六朝金粉尋何處、城市蕭秦恣恤流、今古興亡君莫說、荒涼滿目故陵秋。

十月三十日 積陰、微雨。午前三時半起床。五時半近衛公爵、小原、大内等と太古洋行の安慶輪船に乘ず。予と大内と一室を占む。井手、白岩、佐々木三人此地より一行に別れ上海に帰る。

十月三十一日 半晴。午後二時九江に達す。近衛公等と上陸。居留地並に支那街を散歩し、磁器數点を購ひ帰る。三時二十分開船。

十一月一日 晴。午前三時船貴州に達す。二品官護軍後營管帶王得勝、訳官木野村成徳等張之洞の命を奉じ貴州に來りて公爵を迎ふ。九時半船漢口に達す。瀨川領事以下居留民一同來り迎ふ。近衛公は領事館を以て旅館と爲し、隨員中の大内は予の処に來寓せり。午後張之洞と会見の約有り。張氏より小汽船江清号を派し一行を迎ふ。織布局碼頭より上岸。護軍營兵一小隊江干に謁立し捧銃して敬意を表す。直に四人抬の轎に乘じ湖広総督衙門に至る。迎接の儀式は南京に於けるが如し。総督張之洞中門に出て一行を迎へ、正庁に至り酒菓を出し歓待す。幕僚の陪席者は汪鳳瀛、梁敦彥の二人なり。談話一時半、辞して紡紗局の公館に帰る。張氏本年六十三。精神尚確、容貌拳動應對の節、副島伯に彷彿たり。其人物流俗に超脱し顔る見る可き者有りと雖も、要するに器局偏狹決して大臣の才に非ず。午後五時張之洞紡紗局に來り答礼す。談話半時間にして去る。夜汪鳳瀛、馮嘉錫等主人と爲り局内に於て晚餐の饗を爲す。八時辞出、総督より備ふる所の小汽船にて漢口に帰る。

十一月二日 晴天。午前八時近衛公等と大坂商船会社の大井川丸に乗り漢陽鉄政局碼頭に至り上陸、製鉄所並に槍砲廠を見る。午前十一時伯牙台の近衛公歓迎会に臨む。会する者武漢居留民五十名許。午後三時席散ず。是より公爵と大別山を越へ碼頭に至り大井川丸に乗り漢口に帰る。途中漢報館、高船会社、東肥洋行に立寄り、茶話の後公は領事館に帰る。熊本留守宅、上海内藤虎次郎、東亜同文会、四川廖鏡清の信到る。

十一月三日 晴。天長節。午前十時大内暢三、岡幸七郎、篠原、清藤等と出で領事館に至り、御真影を拝す。正午武漢居留民一同に立食の饗有り。終はりて福引、撃剣、競争、綱引等の余興を催す。午後支那の文武官を饗す。公爵、領事、小原、大内、予の五人之を接待す。五時席散ず。晩松田、枅原、緒方、橘以下数人來訪。

十一月四日 半晴。是日汪鳳瀛、徐家幹二人主人と為り、総督張之洞の命に依り予輩を武備学堂に饗す。午前八時総督より廻はす所の小蒸気船に乗り武昌に至り、準備の馬車に駕し護軍營に抵り、歩騎、砲三種の操練並に器械体操を見る。午時酒を出し歓待す。陪席の官吏は督帶官張彪、管帶官王得勝、統領官総兵吳元愷、並に汪鳳瀛及び独逸武官二名なり。午後馬車にて両湖書院に至り提調梁星海に面し、学生の課業を觀る。二時武備学堂に至り饗応を受く。汪、徐二氏の外大原武慶、木野村成徳亦席に列せり。三時武備学生の兵式操練及び器械体操を觀る。熱練甚だ至れり。終はりて馬車を駈り自強学堂に至り日本語の授業を一覽し、勿々に辭して黃鶴樓の宴会に臨む。張彪、徐家幹、方友升、吳元愷、汪鳳瀛、程頌万、王得勝、馮啟鈞、梁敦彥、馮嘉錫、方悅魯諸氏主人と為り近衛公、小原、瀬川、大内、予及び岡の六人を招邀せるものなり。八時辭して小汽船に上り招商局の江裕輪船に移る。方友升、吳元愷、張彪、汪鳳瀛等送りて船に乗る。是夜近衛公、小原、大内等漢口を去りて上海に帰る。十時拔錨。公以下に握別して寓に帰る。大内に托し白岩より借る所の五十元を返却す。

十一月五日 晴。晩東肥洋行を訪ふ。夜瀬川領事來訪。

十一月六日 晴。是日熊本留守宅、東京安原、田鍋等に発信す。尹仲韓、劉彝卿來訪。野中文雄來訪。夜商船会社前原巖太郎より予及び桑原政、緒方二三を招邀し、晚餐を饗す。八時桑原、緒方等と辭して黃陂街に至り、骨董を買ひ帰る。

十一月七日 陰天。同文会に近衛会長、武漢滞在中の記事を郵送す。午後文廷式より漢口着の報有り。午後東肥に至り、暮時帰る。

十一月八日 陰。午前文廷式來訪。午前共に出で緒方、橘を誘ひ一品香に至り文廷式を饗す。東肥にて晚餐し、九時帰る。内藤虎次郎上海より來着。長崎権藤、上海深水十八、東京龜雄文廷式の信到る。

十一月九日 雨。午前文廷式来り別を告ぐ。本日より湖南に赴くと云ふ。東京安原金次、上海渡邊正雄に発信す。

十一月十日 秋雨蕭蕭、夜來少しくも休まず。終日在家、雜書を読む。

十一月十一日 雨天。朝河南胡天然なる者光州の梁太卿、胡慶煥の添書を携へ來り訪ふ。中餐を饗し、数日間館内に留まらしむ。午後楊開甲來訪。昨日安慶より來れりと云ふ。夜牛島、浅井二生來訪。

十一月十二日 晴天。上海勝木恒喜に発信し、福島安正への添書を与ふ。午前内藤虎次郎、岡、篠原、清藤等と江を渡り武昌に至り、黃鶴樓に上り吃茶。去て自強学堂に至り柳原、根岸等の処にて中食し、午後農務学堂に汪鳳瀛を訪ふ、在らず、教師某々等と小談。転て武備学堂に抵る。緒方、橘等在焉。小談、辭帰。夜郵便局に桑原政を訪ひ、去て領事館に至り談話、十時帰寓。

十一月十三日 健晴。午前漢陽に遊ばんとし門を出つ。適々大原武慶、緒方二三の來訪せるに会ふ。一叙して去り、舟を賃して漢陽に渡り、晴川閣に上り大別山を越て白牙台に至り、茗談頃刻舟に乗じて月湖を過ぎ、更に漢水の舟に転乗し漢口に帰る。

十一月十四日 晴、風大。午前武昌に赴かんとす。旧友楊子荃安慶より來り訪ふ。小談、共に出で龍王廟に至り官渡船に坐す。激浪船を掀げ、殆ど覆らんと欲す。途中楊、内藤、篠原等と別れ、余は岡と

文昌門内に朱姓を訪ふ。中餐の饗を受け、共に車に坐し、南湖書院に至り院長梁星海を訪ふ。談話時を移て辞出。農務学堂に内藤、篠原等と会し、江を渡りて帰る。夜内藤虎次郎、大井川丸に乗り上海に帰る。出て之を送り、帰途東肥に小談、帰寓。内藤の帰朝に托し大坂鳥居、上海渡邊に致書す。

十一月十五日 晴。穆姓来訪。傭人曾姓妻を娶るを聞き、之に金四円を与ふ。又た本月岡幸七郎氏の巖君六十の寿辰たり。金十円を贈て寿を為す。午後関帝廟街に至り骨董を觀る。

十一月十六日 晴。午前周天順、李泉溪前後来訪。夜東肥を訪ふ。

十一月十七日 晴。朝瀬川浅之進来訪。加藤高明一行来らんとするを告ぐ。出て之を迎ふ。加藤並に本田種竹来着。水野道は病の爲め上海に留れりと云ふ。長崎西田龍太、香港畢永年の信到る。本田は上海郵船会社永井久一郎の添書を携へ来る。領事館より晚餐の案内有り。同座は加藤公使、本田、桑原及び予なり。九時辞帰。緒方、神坂来談。

十一月十八日 晴天。上海白岩、東京大内暢三に発信す。外に熊本留守宅に発信す。晚柳原又熊来宿。三輪高三郎来り訪ふ。九時出て加藤公使の帰申を江寛号に送る。

十一月十九日 健晴。午前桑原政、緒方、木野村等来訪。之を留て中食を饗す。原田外一名来訪。午後三時岡等と出て独逸居留地及び日本租界を視、城外を散歩し、大智門を入れて帰る。夜東肥を訪ふ。

十一月二十日 晴天。東京本部に十月分決算書を送る。午後橋、栃原来訪。四時上海道台の予余祖琛、余祖鈞二人来訪。神保軍医、中野某来談。夜東肥を訪ふ。上海渡邊正雄の信到る。

十一月二十一日 晴。

十一月二十二日 晴。午前九時橋、岡、篠原、清藤等と船に乗り沙口に至り上陸（漢口到此約二十清里）。行く十里霸口に至り、鉄道線路を視察し、一麵舗に投じ中食す。此地人煙三百許。高地に抛り河流に臨む。此より以北線路の修造せらるるもの約三十里、以南は沙口河の西岸よりして直に漢口に達す、二十五里許。午後鉄道線路を歩し、五時漢口に着す。上海滕木恒喜、香港畢永年の信到る。

十一月二十三日 晴。東京安原に四十四号報告を郵送す。桑原政来訪。夜東肥を訪ふ。

十一月二十四日 晴。午後余祖琛兄弟来訪。鉄道局総弁鄭孝胥と明日の会見を約す。晚楊子荃来訪。江永輪船より安慶に帰るを告ぐ。羅進夫亦来会。楊氏と談話、時を移し八時半行を送りて、江永船に至り別を叙て帰る。

十一月二十五日 陰。午前沈克誠、林、田野橘治来着。田野は湖南の有志に聘せられ該地に至り日本語教師たらんとする者なり。白岩龍平、唐才常、宇都宮太郎、西田良知等の信到る。又た文廷式の信湖南より到る。楊開甲来訪。五元を借り去る。午後鉄道局総弁鄭孝胥蘇堪を訪ふ。福建人頗る気概有り。晚桑原政の招邀に一品香に赴く。八時帰る。瀬川浅之進来訪。

十一月二十六日 陰寒。午前沈克誠、林錫珪、蔡鍾浩来訪。湖南長沙に學校設立の事に付き予の助力を乞ふ。午後張堯欽、郭祥麟来訪。夜余祖琛、祖鈞来訪。

十一月二十七日 晴。東京同文会田錦に致書し、日野生湖南行の事に付き云々す。外に篠原由誠に寄書。亀雄送籍の事を依頼す。午前領事館に至り、瀬川を訪ひ小談、辞帰。午後本田種竹来り、別る。本日より岳州に赴くと云ふ。緒方、栃原、神保等来訪。上海井上雅二の信到る。晚金島文四郎を訪ふ。

十一月二十八日 晴。東京宇都宮太郎に発信す。午後東肥に至る。留守中鉄道局長鄭孝胥来訪せりと云ふ。晚張燦、郭祥麟来訪。領事館に至り三輪等を訪ひ、九時帰る。

十一月二十九日 陰。午前林述唐来訪。晚余祖琛兄弟来訪。

十一月三十日 晴天。午前諸氏武昌に至り自強学堂にて中食し、去て本願寺出張に至り小休。江を渡りて帰る。夜緒方、岡二氏と領事館に至り湖南行の護照願を出し、十時帰館。

十二月一日 陰。午後白岩龍平、荒井甲子之助、上海より来着。湖南に赴く者なり。中野某及び余祖琛兄弟来訪。明日より緒方、岡二氏と船を賃し湖南に遊ばんとす。行李を整頓す。田野生上海に下らん

とす。金十円を餞す。東京近衛公爵及び田鍋安之助、井手三郎、並に熊本留守宅に発信す。別に近衛氏に黄鶴樓の石榴七枚を送る。夜東肥を訪ひ、十時帰る。

十二月二日 晴。午前三輪來訪。護照を交付す。白岩、荒井來訪。東京安原に第四十五号報告を送る。

東京井手の信二通、熊本留守宅の信一通、東京同文会の信一通到る。夜八時緒方、岡二氏と漢報館を出で、長清輪船公司碼頭より上船、湖南行の道に上る。夜船中に宿す。

十二月三日 晴。午前十時開船。三十里串口に泊す。

十二月二日以後の記事は瀟湘紀記に詳かなれば日記には之を略す。

十二月四日 晴。六十里東江腦に泊す。

十二月五日 晴。六十里洲に泊す。

十二月六日 晴。好洲頭に泊す。行程五十里。

十二月七日 晴。九十里陸溪口に泊す。

十二月八日 晴。羅山に泊す。行程一百十里。

十二月九日 雨。斜風港に泊す。行程六十五里。

十二月十日 晴。岳州岳陽樓下に泊す。行程二十五里。

十二月十一日 晴。洞庭湖上の合龍塘に泊す。行程六十五里。

十二月十二日 晴。琴棋望に泊す。行程六十里。

十二月十三日 晴。三十里。白魚塔に泊す。

十二月十四日 陰。百七十里。靖港に泊す。

十二月十五日 晴。七十里。湖南省城長沙府に泊す。

十二月十六日 陰。九十里。湘潭に泊す。

十二月十七日 陰。湘潭滞在。

十二月十八日 風雨。湘潭城外の文昌閣下に泊す。

十二月十九日 風雨。四十五里。包爺廟に泊す。

十二月二十日 風雨。五里。李家坪に泊す。

十二月二十一日 陰。四十里。長沙府に泊す。

十二月二十二日 陰。長沙滞在。

十二月二十三日 雨。長沙滞在。

十二月二十四日 雨。長沙滞在。

十二月二十五日 風雨。長沙滞在。

十二月二十六日 陰。十五里。三叉磯に泊す。

十二月二十七日 陰。四十里。丁字湾に泊す。

十二月二十八日 寒雨。三十六里。靖港に泊す。

十二月二十九日 晴。七十五里。湘陰県に泊す。

十二月三十日 風雨。湘陰滞在。

十二月三十一日 風雪。湘陰滞在。年を送る。

明治三十二年十二月二日

瀟湘泛槎日記

十二月二日 夜八時緒方、岡二氏と漢報館を出で長清輪船公司碼頭より船に上る。漢口より湖南岳州、長沙を経て湘潭に至る往復船価二十五吊五百文。

十二月三日 晴。午前十時開船。龍王廟に到り錨泊。正午帆を揚げ発す。朝来頭痛、床に上て一睡す。

覚むれば則ち船已に鸚鵡洲を過ぐ。雀顙の詩に晴川歴に漢陽樹、芳草萋に鸚鵡洲、即ち此地洲は漢陽府の西辺、長江の左岸に在り、江干人家櫛比十余清里に連る。居民多く木材の売買を業とす。江浜木竹を堆積するもの甚夥し。午後六時半船沌口に達す。漢口を距る三十里、此地に武昌関有り。往來の船隻を稽查し、其の大小に応じて税を課す。人戸百許。小漁を挾て居る。遂に泊す焉。是日詩有り曰、葦才無術濟時艱、萍跡廿年鬢欲斑、一幅布帆孕斜日、扁舟遙指大軍山。

十二月四日 穩晴。午前六時沌口を發す。十二時右岸の金口鎮を望む。人煙五百許。下流の江辺淮山有り。左岸の大軍山と相對峙し自ら関門を成す。大軍の当方に峙つ者を小軍山と云ふ。往昔吳魏兵を此の両山の間に陳す。金口に兵營一処有り。兵数を詳かにせず。詩有り曰、

両山相對擁江関、説是金口大軍山、維昔吳魏陳兵処、形勝居然扼通寰、折戟銷沈千古事、江流無聲碧澤々、行客到此何所思、浮雲一片意自閑、休説半生浮沈跡、脛毛絶尽鬢斑斑。

午後五時半東江腦に泊す。茅屋十余戸、左岸に位置す。船舶の碇泊するもの約二百隻。此より以西江流繞りて環の如し。是日行程六十五里。

十二月五日 健晴。天明東江腦を發す。篷窓一望、千帆万帆曉霧を破りて走る。宛然画図の趣有り。小詩一首得たり、

曉色初分霜滿船、平江千里万帆連、客心好付東流水、漾々從波到日辺。

是よりして上る。江流湾曲六十里、極目平茫、兩岸の景致記するに足る者無し。六時鐘州に至り泊す。行程六十里。此地人煙六百七、江の左岸に位置す。長江水師漢陽鎮標鐘州營有り。晩市街を散歩す。纖月如眉、夜色言ふ可からず。詩有り、

漁火欲沈古岸前、半篷所思一燈景、多情最是江頭月、眷々來光夜泊船。

十二月六日 快晴。曉霧江上を罩め船を出す能はず。价をして鯿魚、鷄卵、豚肉、蜜柑、野菜等を買はしむ。九時に至りて霧霽る、即ち船を發す。逆水無風、舟行甚緩。舟子三人推挽極て苦む。篷窓一詩を得、

濃霧橫江柵不開、白帆如夢破天來、此行不識依何事、未到巴陵詩思催。

晩号球頭に達す。左岸の茅屋十余戸有り。是日行程五十里。夜古風一篇を得、

形似太閒心不開、軀已許國豈辭艱、往事匆匆人休問、歲末四十鬢欲斑、赤脚朝涉大凌水、白衣夕宿小姑山、曾遊回首如隔世、笑我依然顛顛顛、世事茫茫天未定、迢々去敲碧湘關、皇天若祐興興業、廓清中原驅歌還。

十二月七日 半晴。七時船を發す。風順にして行駛頗る迅し。江上一群の江豚出沒。波を吹き大犢の如し。十二時右岸に大魚、尖峯の二山を望む。零時三十分嘉魚県の前を過ぐ。城は右岸の内部に在り、船上より望む可からず。午後風急にして浪湧き舟行頗る艱む。左岸に宝塔洲有り。人家百許。往來の船舶皆此に入りて風を避く。我舟亦た就て憩はんと欲す。逆風激浪交も相打ち、舟子百方すれども進む能はず。不得已舟を右岸に移し陸溪口に泊す。小塔一基有り。瓦屋二百許、小市集を成す。是日行程九十里。夜に入りて風雨蕭条。小詩二首を得たり、

北馬南船事遠征、深閨応有數帰程、陸溪江上孤篷夕、又是巴山夜雨情。

其二

江流東下我西征、途遇漁翁問去程、大地茫茫人欲老、孤篷夢冷遠遊情。

十二月八日 晴天。午前七時陸溪口を發す。風順にして舟疾。九時半右岸赤壁の下を過ぐ。断崖四十尺、江に臨て削るが如し。周瑜曹操を敗るの処即是也。古來江漢の間伝て赤壁と称するもの五処、曰漢陽、漢川、黃州、嘉魚、江夏、此処所謂嘉魚の赤壁也。諸を史に按ずるに、曹操荊州、江陵の諸郡を并せ水軍八十万を治して東下す。孫權周郎の謀を用ひ精兵三万を以て魏軍を赤壁に逆撃し、大に之を破る云々。之を地理に照らすも吳魏交戦の赤壁は嘉魚に在る事疑無きなり。蓋し蘇東坡の赤壁賦中黃州を以て孟徳の周郎に苦めらるるの所と為せしは、偶々其地名の同じきが為に仮りて以て文章の觀

膽を壮ならしめしに過ぎざるのみ。七絶一首を得たり、

雲樹茫茫浪接天，江城戰罷二千年，漁翁不記干戈跡，蓑笠釣魚赤壁邊。

午後二時半左岸新堤を過ぐ。人家六七百市廛頗る繁盛なり。船舶の碇泊するもの約三百隻。市中に水開有り。清流滔々来て江に注ぐ。舟子曰く、官湖の水を疏するなりと。陸溪口より此に至る六十里、是より以西江鳳漸く急に船疾きこと矢の如し。四時半左舷臨湘の諸山逶迤として天際に横ふを見る。七時羅山に達す。人煙三百許、左岸に位置し、市廛頗る熱鬧なり。船舶の下碇するもの三百隻。是日夕陽臨湘の山を望み、詩有り、行程一百十里、

舟行若射心逾閑，百里長程瞬息間，此去巴陵知不遠，夕陽認得臨湘山。

十二月九日 雨天。七時半開船。八時三十分左舷臨湘磯の高塔を望む。十時半坡頭、羊陵兩磯の間を過ぐ。羊陵磯上廟宇有り。頗る雅觀なり。山下人家四十余戸。此より水道兩分中に一沙洲を抱く。東南の水路に就て行く。午後三時道人磯、白鹿磯の間を過ぐ。右舷に在るものを白鹿磯と為す。江上飛岩五個有り。道人磯辺民家十余戸を見る。五時歇風港に泊す。此処小河口有り。河の上流一小市を為す。此より以西水道二条に分る。右する者は本流にして四川に通じ、左する者は岳州府を経て洞庭湖に入り湖南省に赴く者なり。本道左岸の突角を荊河口と為す。輪船の寄港地なり。歇風港の前面飛岩の巨大なるもの数個江上に散在す。是日行程六十五里。夜来の雨終日霽し。夜七絶一首を得、

江城月落催寒碯，千里孤舟万古心，別有鄉愁消不得，巴陵夜雨一燈深。

十二月十日 晴天。詰朝歇風港を發す。行く八里許、左舷一山有り。江に臨て峙つ。山上竹木叢生、頂上に廟宇有り。此処一条の水路左方の沙岬を横断して長江の本流に通ず。船舶を行るべし。是よりして上る。右岸岡巒断続相連る。午前十時城陵磯に達す。此地昨年英国の要求により各国の為に開きし互市場なり。人煙三百五十許、右岸に位置す。下流に沿ふて岡陵起伏、最も高き処四千尺。外国居留地は北紅山頭より西南、華民保障の城壁に至る迄江に瀕して長約四千呎。税関長英人馬姓並に属員二名来て開弁事務を督す。岳陽関及び工程局有り。道台は張某なり。内外商民の来て土地を買収せるもの未だ甚だ多からず。日本人にては大坂商船会社並に外務省の予約地有るのみ。此他英商怡和洋行、露商順豐洋行、招商局の三会社にして余地尚頗る多し。現に道路の区画を定め其工事に着手せり。居留地の前面陸地に近き所水涵るの時十尺乃至二十尺、最深の処三十尺以上に達すべし。此辺一帯の河流幅隕一千二百乃至一千八百米実。此よりしを上洞庭湖畔の岳州府に至る、十五清里に過ぎず。上陸、工程局に至り税関長並に知県張震声、工程委員吳鳳昌等に面す。吳の帶道にて居留地を巡視し、船に帰る。居留地章程左の如し。

岳州城陵通商埠租界地章程十條

- 一 岳州城陵通商埠界自紅山頭起至劉公廟止為北段自劉公廟起至華民保障止為中段以月蟾洲為南段三段均為通商租界
- 二 通商埠内地基分開上中下三等每畝每年租銀一百元中等每畝每年租銀八十元下等五十元並每畝每年應完錢糧三元不另繳別項所有各商應繳之租銀錢糧由岳州關稅務司按期向租戶照數代收送交監督收訖給回該官收銀之印單糧申惟本年內之租銀並次年之錢糧每逢西歷正月內一律完清
- 三 通商埠内各國商業工芸皆可照章租地建造屋宇棧房但洋商租地必須稟明領事官華商租地必須稟明岳州關稅務司先備租地准價並備自稟明之日起至西歷年底止應完之錢糧由工程局請領准單送請稅務司領事官照會監督將銀收訖印發租契洋商之租契發參本照請領事官上冊面押一給租戶一存領事署一存監督衙門華商只印發租契一本由稅務司轉給租戶至於租地不得逾給畝每畝定規七千二百六十方英尺倘必須大地應照章稟明而行
- 四 凡租契當転租之時即由承租之華洋商呈請稅務局領事官照送監督蓋印施行
- 五 租契以三十年為期期滿換契仍訂三十年為限當換契時租銀不加錢糧可與各國領事官酌加如到限滿並期滿未換契或過一年租銀錢糧未繳清則該号之租契即行註銷產業帰中国

- 六 買地擲房及遷移墳墓等事皆由岳州關監督作主外人不得干預
- 七 通商埠內不准搭蓋草屋並下等板屋恐易引火致害別人但凡蓋造房屋必先請巡捕街總保甲核准方可興工至於火藥炸藥一切有害人身家財產之物概不准收藏夾帶運送倘敢有違一經查出各照自國律例懲辦
- 八 各国商民在通商埠內僑寓中国地方官自應按約保護所有巡捕街事宜由監督会同稅務司設立管理惟約東商民章程由監督照請各国領事官酌定
- 九 通商埠內工程由監督会同稅務司弁理至於各商在本埠碼頭報關上下之貨應照已完正稅百兩者捐收二成以為建造碼頭修理道路之費
- 十 通商埠內若有特動之工程当按租戶派捐一切事宜歸三処会商弁理一監督与稅務司二各国領事官三衆租戶公舉一人

岳州關監督 張
稅務司 馬 公訂

光緒二十五年十月十一日

回顧すれば、去明治二十八年日清戰事將に酣ならんとするの際、予は大本營の当路者に一篇の意見書を上り戦争の終局を論じ、且つ戦後清国に対するの經路方策に関し条陳する所有り。就中原經營の根本を立つる為め岳州府を開かしめ、先つ支那十八省中に在りて最も有望なる湖南省の風氣を開発し、努て其の人心を収攬し、以て他年有事の秋に当り我用為らしむ可きを以てせしも、終に用ひられずして已みたり。而今此地を過ぎ此の現状を目撃し、端無く当年を回想し多少の感無くんばあらず。午後三時城陵磯を發し行く六里、左舷の丘上七層の高塔有り。遠望の目標たり。又行く九里、岳州府の城角に達す。城の西北隅二三の丘陵有り起伏す、高七十五尺許。此を過ぎ左折して洞庭湖に入る。巨浸汪洋煙波天に接し、幾個の島嶼其間に点在す。西方に当り筆架の状を為す者と為す。城の西南は直に湖に瀕す。所謂岳陽樓は西門の上に在り。亭榭樓台頗る雅觀を極む。薄暮船を岳陽樓下に泊す。月色如秋。是日行程二十五里。夜船頭小詩二首を得、

君山高挿半天雲、隱々疎鐘隔水聞、鉄笛無声仙女遠、洞庭湖上月黄昏。

巴陵城角古時閑、半面枕湖半面山、風韻千年銷不得、岳陽樓上暮雲閑。

十二月十一日 晴。詰朝岳陽樓に上る。樓高三層葺くに黃瓦を以てす。羽流此に居る。樓上呂祖を祀る。壁上古今人の題詠多し。范文正公の岳陽記を樓内の板壁に刻み、清人張照の書する所、洞庭万頃眼下に開き澎湃天を涵し、所謂衝遠山吞長江口虚言に非ず。巴陵の勝状収て襟帶の下に在り。此樓の雄觀范公の文尽せり矣。短古一篇を賦し壁に題して去る。

湘中秋去氣如秋、扁舟東來汗漫遊、最是巴陵形勝地、江山好处暫淹留、明鏡一面洞庭水、人在岳陽第一樓。

城内を縦貫し、南門を出で、舟に帰る。朝来順風是日將に洞庭に泛んで湘瀟に向はんとす。舟子を促す。詰に称す。洞庭週廻八百清里。

岳州府城は洞庭湖口の東岸に在り。東、西、南、北の四門を開く。四面繞らすに小丘を以てす。周廻三千米突。城内市廛蕭条煙戶僅かに八九百。南門外最も繁盛して人家二千許。城の内外を通じて戸数三千余に過ぎず。南門外の丘上に七層の塔並に長沙会館有り。

地誌に曰く、岳州山川を表裏にし江湖三派の会に当り荊鄂二州の衝を綯べ、江の東西、湖の南北、最も要害と為す。故に湖南之を得ば以て荊鄂を規取するに足り、淮南之を得ば以て湖南を包挙するに足ると。只だ此の数語能く岳州の形勢を尽せりと謂ふべし。

正午船を發し湖の東岸に沿て行く。山陵斷続相連る。左方に聳る者を八仙台とす。君山は西方の湖辺に在り。山甚だ高からず、一字を引くが如し。一名洞庭山又た湘山と名く。湘君の遊ぶ所盛夏水漲れ

ば山水中に在り。冬期水涸るれば則陸地に在り。只だ江流一線を見るのみ。史に称す、泰皇江に浮て湘山の祠に至る。大風に遇ふ、渡るを得ず。湘君は何の神かと問ひ、怒て其山を舩にすと、即是也。風順にして船脚甚速、午後七時半湖中の錨泊地合龍塘に達す。行程六十里。現に洞庭水涸れ、沙洲所在に露はし幾条の水道其間を通じ、帆舟来往織るが如し。夜に入りて月色高潔、詩有り、

孤舟千里客心遠、漁笛声沈北渚雲、回首君山茫不見、微風澹月吊湘君。

雁声断续渡雲津、鄉思無端繞海垠、青草湖頭一輪月、篷窓独有不眠人。

十二月十二日 穩晴。午前八時半合龍塘を發す。晡時左舷磊石山を望む。五時琴棋望に達す。茅屋四十許、參差として左岸に連る。上岸夕陽に歩して帰る。南西北三面茫洋として際涯無く、只だ東方に一線の陸地を望むのみ。此辺一帶夏秋水漲るの候皆水中に没すと云ふ。是日行程六十里。小詩一首有り、岡西門氏の韻に次す。

洞庭湖上去來船、片々入波又入煙、我亦無心塵外客、岫雲倦鳥伴閑眠。

夜に入りて月明如霜、江上琵琶を弾ずる者を聞く。人をして江州司馬の感有らしむ。此処船舶の碇泊するもの百余隻。小汽船三隻有り、皆漢口湖南の間を往來する者。

十二月十三日 晴天。午前六時琴棋望を發す。風逆にして船進まず。舟子推挽甚だ苦む。午後五時白魚塔下に至り泊す。行程三十里。塔に上り洞庭を瞰下す。浩に蕩に偉觀言狀す可からず。塔七層より成る。嘉慶七年の造る所量むに花崗石を以てす。堅牢比無し。日暮船に帰る。此地汨羅湘に注ぐの処。現今水口状を變じ汨羅の故道一線を留るのみ。所謂屈原没水の所茲を距る稍や遠しと云ふ。夜懷古二首を得たり、

寂々江天夜色沈、離騷讀罷淚霑襟、玲瓏一片汨羅水、留照千秋臣子心。

月落湘江古渡頭、蕭條風物使人愁、千秋有恨楚臣淚、化為汨羅一流水。

十二月十四日 陰天。午前七時白魚塔を發す。昨來舟湘水に入る。河幅広狭奇しからず。概二百乃至四五百米突。夏期は之に倍す。湘中に入りてより時令暮春の如く、河の兩岸青草愛すべし。一詩有り、

經來短駅又長亭、地勢南傾山水靈、途遠朔風吹不到、湘江百里草青青。

行く四十五里、廬陵潭を過ぐ。人家七八十。此処資水西北より來り、湘江に会す。河幅百米突許。此よりして上る。常德を経て沅江に合し、貴州界に至るべし。廬陵潭は資、湘合流点の左岸に在り。白魚塔より此に至る十五里。左折して湘水を行く。水色瑩徹深二三百米突。河底は細沙にして、兩岸稍や高し。処々に淺灘有り。冬期は小汽船を行る可からず。現に漢口より長沙、湘潭の間に往來するの汽船、琴棋望を以て終点とす。廬陵潭より上流の河幅約四百米突。午後一時左舷烏龍嘴を過ぐ。民屋三四十、丘陵の間に点在す。水浜に七層の塔有り。構造白魚塔に同じ。行く三十里湘陰県に達す。春秋羣蠻の地、今長沙府に屬す。県城は湘水の右岸に在り。周廻一千四百米突。人煙城の内外を通じ二千四百百戸。潤屋頗る多く、城内の繁盛岳州の上に在り。南門外の江浜に伏波、洞庭の二大廟有り。价を遣はして食料品を購ひ、三時順風に乘じて船を出す。清湘如凍。兩岸の風光甚だ秀。偶感詩一首を得たり、

一路江山風景真、地靈应有非常人、何時手掬清湘水、欲洗幽燕万斛塵。

五時後河口を過ぐ。左岸に人家七十許。七時浮魚湾を過ぐ。茅屋數十左岸に在り。又行く少許橋口塘を過ぐ。水多き時此よりして常德府に至るべし。九時二十分左岸形関を過ぐ。泊船二百隻、人家亦た少なからず。夜中其数を知るに由無し。十二時靖港に泊す。是日行程百七十五里。

十二月十五日 半晴。午前三時順風に駕し靖港を發す。十一時長沙省城の小西門外に泊す。行程七十里。直に文廷式に東して來着を報ず。午後上陸南門を入り、南大街を過ぎ、古玩舗を巡覽し、小西門を出で船に帰る。文廷式の家人來問。白岩龍平、荒井甲子之助留る所の書信を交付す。白岩等は昨日此地を發し漢口に下れりと云ふ。五時南門外の碧湘街に文廷式を訪ふ。朝來他出、未だ帰らず。其子

某及び族人劉某出で迎ふ。待て日暮に至る。文帰来、酒肴を備へ歎待す。寛談九時に及んで辞し帰る。文氏人を派し送りて船に来る。夜一詩を得、

山明水秀小仙郷、如此風光無四方、岳麓峯頭半輪月、扁舟一夜泊瀟湘。

十二月十六日 陰。午前十一時長沙城の小西門外を發し、湘江を廻り湘潭に向ふ。兩岸山陵起伏点々相連る。江の幅頃三百乃至四百米突、深六尺より八尺に至る。水色瑩澈毛髮鑑す可し。行四十五里、右岸に包爺廟有り。瓦屋四十許。又十五里、右岸に昭山有り。嶄然秀拔。山頂茂林の中廟宇を見る。結構壯麗。湘中名山の一なり。長沙より此に至る水道南北に延き、殆ど曲折無し。此処一水有り、西北より来りて湘に入る。是より水流少しく西折、右岸人家四十余戸、湖聖廟と名く。湘潭に到る三十里、沿岸一帯山墟水涯村落点綴宛然郷園の趣有り。山上処々松樹を生じ、所在樹林少なからず。又行く二三里、伊家湾を過ぐ。人家二百許、右岸に位置す。是より西南愈よ進で風景愈秀。右岸に沿て山陵屏列、少しくも間斷無し。七時湘潭県に達し、永州碼頭に泊す。行程九十里。途上詩有り、

君不見瀟湘之水如匹練、流從桂林山裡来、挾山水巒皆秀拔、一幅画面々開、恐是神仙之所宅、清淨不着一點埃、髣髴恰似故園景、兩三墟落翠屏隈、扁舟不停天如水、欸乃聲裡夕陽隤。

十二月十七日 積陰、欲雨。朝上陸。西南関外沿江の市街を巡視し、湘潭県城の西門瞻嶽門を入り、南門を出で船に帰る。午後南門（通濟門）を入り、北門（熙春門）を出で城外を一週し船に帰る。夜風雨。

湘潭県

湘潭県は長沙府に屬し、省城の南九十里湘江の左岸に在り、城週廻三千五百米突、五門を開く。東に在るもの二門觀湘、文星と曰ひ、西を瞻嶽と名け、南を通濟、北を熙春と曰ふ。県庁は城内の南北に通ずる大街に在り。城中人煙二千許、商況甚だ盛ならず。只だ西南門外江の上遊に沿ひ一大市街有り。長約三千米突、戸数五千内外にして潤屋櫛比買売殷盛にして、雑踏織るが如し。大小船舶の街下に碇泊するもの二千余隻。城の西北は平地にして村落処々に点在す。東南は直に湘江に臨み水を隔てて丘陵相連る。県城より江西省の石炭産地なる萍郷県に至る。水路二百四十里。目下盛宣懷監督の下に在りて、萍郷より橘州（一名株州又た涑口とも謂ふ）迄百八十里間の運煤鐵道を修造中なり。涑口より湘潭を経て湖北省漢口迄は船運に依りて石炭を輸送する計画なるが如し。湘潭より涑口に至る水路僅かに六十里に過ぎずと云ふ。

十二月十八日 風雨。午前湘潭を發し湘水を下り、長沙に向ふ。風大にして船進まず。県城を距る少許の文昌閣下に泊し、風の歇むを待つ。一詩有り、

年暮他郷万恨長、遊跡三句水一方、道絶関山望不到、半篷風雨下瀟湘。

十二月十九日 風雨迷濛。午前八時開船。午後昭山の下を過ぎ五時包爺廟下に泊す。行程四十五里。上陸、廟中に至り一覽す。

十二月二十日 風雨。船を發する能はず。午後四時風勢少く衰ふ。即ち纜を解て下る。薄暮李家坪に至り泊す。行程僅に四五里のみ。

十二月二十一日 陰。詰朝船を發す。午前十一時長沙に達し、小西門外に泊す。行程四十里。直に名刺を文廷式に送り帰着を報ず。午後三時文氏輪子を以て我一行を迎ふ。即時上陸。碧湘街の公館に至る。夜盛饌を備へて饗応す。談話三更に及んで轎に乗り船に帰る。是日当地の紳士王先謙に致書し並に同文会規則を送り会見を求む、他出して在らず。王氏は翰林出身にして前任江蘇學政國子監祭酒たり。前年以來保守党の牛耳を執り、所謂新党の士此人の爲に排斥驅逐せられ、屏息して手足を伸ばす能はず。将来湖南の風氣を聞き施設する所有らんと欲せば先づ、此人を説き我囊中の物と爲すに非ずんば殆んど手を下す能はず。予の此行先づ此人を見んと欲する所以の者は、實に之が爲なり。王氏に致せし全文左の如し。

王益吾大宗師閣下僕日東之処士少小誦聖賢之書窃慕貴国名教之隆人物之盛負泛海輒遊于吳楚燕趙

之間十五年于茲矣曾在江南之日仄聞湘中有王益吾先生者學術經濟為一代之泰斗心私仰慕常恨無緣識荆月初遂決計買舟于漢口經巴陵浮洞庭順風一路安抵省垣即擬登龍門接豐采以抒十年之積悵竊恐唐突晉謁或失札于長者故此謹修短牘予為先容以待命之至僕發漢口之日慮異裝或受人之指目有碍于先生特改服色而同行有緒方岡二友鄙人現在漢口總弁東亞同文會事務專依漢報唱言宗旨力圖中東兩國聯絡月前南洋謁劉峴師鄂省見張香師以申同文會之旨二公許為美善顧閣下三湘重望省之内外事無大小一呼可弁僕此行實為東方時局所求於閣下也竊觀于方今之時勢俄英法德環境而居鷹瞵鵷視要挾多端禍心不測是識亞洲全局之危機而興廢之所分干係決非少小也當是之時能支持此危局輟禍為福者則中東兩國志士仁人之責也若高麗若越南暹羅不足言也是故我國須及早解穢嫌猜去畛域上下一致通力合作制大勢之機先奠將來之局也唇齒輔車之情同文同種誼至此始可謂得其全矣我同文會之興職此之由茲敬贈同文會章程三本並往日所作東方時局論序一篇以請教正書不盡意草率不宜。

十二月二十二日 積陰。午前文氏出所之轎に乘じ城内に至り、督糧道洋務局総弁蔡乃煌を訪ひ、談話時を移し、去て北門内に王先謙を敲く。未だ旅行より帰らずと云ふ。転じて青石橋の一品齋帽店に至り王一清を訪ひ、共に出て古玩舗を觀る。午後三時文學士送る所の轎に坐し、其の公館に至る。蔣恭鏞並に其子光濬及び劉某先つ在り。蔣は当地の有力家にして官民の間に勢力有り。是日冬至の節に當るを以て文廷式、其弟廷直と余輩を留て饗応す。八時轎に乘て船に歸る。文氏の語る所に捫れば清曆本月五日軍機處より密電有り、劉坤一をして努て南部七省を籌防し、兼て兵餉軍器を接濟せしめ並に軍機大臣より各省の督撫に訓諭し自今中外交渉の事有るに遇ば道理に率由して之を弁理し決して自ら枉屈す可からず、和の一字但に之を口に出す可からざるのみならず、並に且つ之を心に存す可からず、我に戰ふの心有りて始て和を言ふべし云々。先年膠州灣事件以來各國の要挾多端にして、底止する所無きを以て頓に此の決斷に出で國家の存亡を賭して折衝禦侮の生面を開ける者の如し。今日に処するの策之を措て他に良法無きなり。夜王先謙の返書至る。其全文左の如し。

北平先生道右奉手書知滋者辱臨敝邑來訪風土通合氣類聞諸道路以先謙為可與言欲進而教之盛飾崇褒誦之悚汗如先謙之鄙陋豈能有當尊指之萬一不虞口者之過聽也賜誦大著東方時局論東亞同文會章程意在融畛域聯輔申申同文之情覺將來之局非深識遠見履安思危之君子其奚及之竊以為西方諸國環境偏處狼顧鷹視奢謀至深今日在東云東非如尊論兩國上下一致通力合作別無固圉良策此不易之至言也貴國與中國因甲午朝鮮之事故啟兵戎和好之後氣詎猶昔聯合之愾朝官疆吏多以為言似與貴國人情尚不相遠但邦交之固權在朝廷草莽之臣心知其意而未便身預其事此則與貴國情形不無稍異者也貴國歷代以來權歸方鎮自西人構衅強藩退住勢一尊封建之區俄為郡縣殆運會之所開不尽由於人事改制之後殫精工芸併心一力遂分西國利權之重而開東方風氣之先積富成強操之有要此我中土所急宜步趨則倣者先謙雖身處田野不能百忘矣先謙自督學江南身嬰末疾乞休歸里已十四年忽々六旬精力衰耗近因困苦杜門卻軌雖親知不相過從惟生平耽嗜文芸一息未死猶思有所述作以詔方來曾為貴國源流考一書根柢中國史志參稽貴邦圖籍頗有斐然之觀惟明治以來蒐詩不悉遲未授梓閣下東方巨擘博極羣書尚乞將來有以惠我高軒之過敬以疾辭願託神交附於海外文字契好之末何如手復敬請大安 王先謙頓首

十二月二十三日 雨。午後王一清來訪。蔣恭鏞より湖南通誌及羅澤南集各一部を贈り来る。午後三時文氏より送る所の轎に乘じ風雨を侵して碧湘街の公館に至る。李樞傑（号華棠）先つ在り、少焉、本地の名士皮錫瑞（号麓雲）、袁杰（号吉雲）、黃福恒（号伯華）等來會。卓を囲て會飲す。皮氏は學問博通、新党中の出色たり。黃は長江水師提督黃翼升の姪にして家道甚だ富む。夜に入りて辭し歸る。李氏の言ふ所に捫れば、長沙城内外に在る〇〇會員は四股に別れ、其數八千に近く、首領其人無しと雖ども會中の事理に通ずる者通力合作能く統一を保ち紛擾を致さしめずと云ふ。是日蔡道台並に蔣、皮外數氏に同文會規則を送る。長沙、善化二県令差役を派して我船に乗り保護の事を言ふ、之を辭す。十二月二十四日 雨。是日本地を發し漢口に帰らんとす。北風甚勁船を開く能はず。午後文廷式來り別る。李樞傑、張煊、鄭淑彝、周炳炎、吳慶琪等來り行を送る。晴時文廷式より牛肉野菜を贈り来る。

糧道蔡乃煌名刺を送り送行の意を表す。査河局の員弁二人来り拝す。是日明末の烈士蔡江門の真蹟一幅を購ふ。華勢勁拔其人を想見るに足る。夜に入りて風雨益す猛、祁寒骨を砭す。

長沙府

建置沿革

禹貢荊州の域、周に星沙と曰ひ、春秋戦国の時楚の黔野中の地。昔熊繹此に封ぜらる故に熊湘と曰ふ。秦漢に長沙と曰ひ、三国の初蜀漢に属し、後呉に属し、晋に湘州と曰ひ、隋唐に潭州と曰ひ、宋に武安と曰ひ、元に天臨と称し、明に長沙府と爲し、清朝之に由り湖南省の首府と爲す。一州十一県を領す。即ち長沙、善化、湘潭、湘陰、寧郷、瀏陽、益陽、醴陵、湘郷、攸、安化の十一県及び茶陵州是なり

形勢事情

府城東は江西省袁州府宜春県に界し、南は衡州府衡山県に接し、西は辰州府沅陵県に界し、北は岳州府巴陵県に界し、湖南全省の首府にして洞庭を控へ湘水に臨み形勢雄大、屹として南方の巨鎮たり。湘江の一水湖南水道の幹線にして洞庭を以て総匯と爲し、大小幾多の河流諸方より来り、之に会し洞庭に注ぎ長江に通ず。両広、貴州、江西、湖北の各省と水運の便を有し、土沃民富、天下有数の大都会たり。

城周廻二十八里大小七門を開き、西は湘水に瀕し、南は山陵を控へ、北は金盆嶺を以て門戸と爲し、重兵を屯して之を扼し、有名なる嶽麓山は西、湘水を隔てて省城と相対す。距離二千五百米突許、山高三百尺、山麓東北に延長する。約四千米突、湘水幅頓四百米突、河底細沙にして水質清冽甚だ飲料に適す。深減水の時五六尺、船舶の停泊地は西北門外にして帆樫林立の概有り。南門外江に沿て丘陵起伏高六十尺乃至八十五尺。本城は脆弱点全く此に在り。

城内外戸数六万、人口三十五万。商業の最も殷盛なるは小西門外の坡子街、並に南門内の八角亭及び青石橋等の諸街にして、富商軒を並べ雑踏織るが如し。衙門の主なる者は巡撫、布政使、按察使、学政、糧道、府署、県衙等にして、長沙、善化二県と附廓にして城内に在り。産物は米、茶、石炭、鉄、材木、桐油、安質母尼等なり。

政況

湖南は他の各省に比すれば風俗醇朴にして勇悍の風有り。從來極めて外人及び外国の事物を悦ばず。十余年前湖南郷約なる者を協定し、外国の勢力をして境内に侵入せしめざる事を誓ひ、以て今日に至れり。道咸長毛の乱、曾国藩、左宗棠、楊岳斌、彭玉麟等の俊傑民間より起りて兵符を握り縦横転戦、遂に大乱を戡定し以て中興の業を奠めしより、省内の人物鬱然として輩出し、文武の要路に官仕し獻替する所少なからず。爾来三十有余年、国内に於ける湖南の藩閥は牢乎として動かす可からず。今や元勳の諸老多くは凋謝し尽し、存する所幾くも無しと雖ども、当年の情力は尚能く湖南の勢威を今日に支持して、以て天下に雄視するに足れり。近数年前に在りては湖南全省は殆ど治外の域に立ち、中央政府の命令も往々にして行はれず。隠然自立の勢を成し、外人をして窺かに其の向背を疑はしむるに至れり。光緒初年より此地に於ける在籍紳士の勢力頗る強大にして、地方官の如きも先づ其の歡心を得ざれば治を為す事能はざるの傾有り。從來本省の俗外国の事物を厭忌排斥するの極、自ら海外の形勢事情に於て通曉する所無く識見一方に局して頑固の弊に陥り幾ど警醒の道無きに苦みしが、甲午乙未の役興りてより頓かに全国の局面を一変し、之に繼ぐに膠州湾の占領、旅順、大連、広澳は租制を以てし、辺警紛至強鄰逼迫大局の形勢を再変し、挙国震動存廢の機一髪に繋がり、上下狼狽俄かに自強の計を為さんとするの時に方り、湖南人士の頭夢も此の震動の余響に攪破せられ、勃然奮興の勢を示すに至れり。嚮きに陳寶箴の湖南巡撫の任に在るや、銳意奮発施設する所少なからず。時務学堂を省城に開き、俊才の学生を集て維新の学を講究し、傍ら南学会を創立して人才を糾合し、己れ自ら議長となりて紳士学生を一堂に召集し、専ら新政新法を講

論し汲々として尽す所有り。此他商務、礦業、運輸、交通、新聞等諸般の事業順次に挙弁して余力を遣さず。天下目を側てて其の爲す所を見る。他省の志士往々走りて之に投ずる者有り。而じて南学会の主旨とする所は湖南の風氣を開発し大に其の元氣を鼓舞して天下熱力の起点と爲り、一省より二省に及ばし而じて三省而じて四省終に湖南の動力を以て天下を刷新せんとするに在り。此時に方りて在官者の事に与かれるは陳宝箴を以て主と爲し、学政江標以下数人在籍の紳士にては王先謙（前江南学政国子監祭酒、現任嶺南書院山長）を以て首席とし、葉德輝、張祖同等之に次ぎ、時務学堂には広東人梁啓超を聘して教頭とし、南学会は熊希齡、陳三立（陳巡撫の子）、唐才常、錢維驥、譚嗣同、畢永年等之を協し、皮錫瑞の如き戴修礼の如き頗る其間に斡旋する所有り。去年の春、熊希齡等の一派老輩王先謙等と意見相衝突し互いに戈矛を生じ、其結果として梁啓超罷められ、南学会中の少壮者亦た老先輩の疎外する所と爲り、漸く老壮両立の勢を成すに至れり。此の軋轢の原因は老壮両者学意の同じからざるより起り、延て主義の上の異同を生じ、遂に破綻を来せしものにして、語を換て之を言へば新旧両分子の衝突なり。此時に方りて葉德輝、張祖同の徒王先謙に附和し、京官中の有力家徐樹錚、黃秉鈞等と声息を通じ、巡撫陳宝箴の施政を攻訐し節外枝を生じ、陳撫をして奈何とする無きの地に陥らしめ、尚且つ徐等をして陳撫を弾劾せしめたり。此に至りて湖南垂成の業功を一簣に欠ぎ分裂壊乱して殆んど收拾す可からざるに至らんとするの際、忽ち去年九月の政変に遭遇し、陳宝箴、江標等相尋で職を奪はれ、所謂天下新党の士斬、捕、遭逃、相接して四散滅裂し、纔かに聞くの春花一陳、狂風の為に捲き去らるゝの觀有り。此時に及んで湖南新党の団体も分崩離散し、復た其の隻影を留めず。是に至りて王先謙等の勢力省の内外を傾け既設事業の過半を破壊し、諸事新政以前の旧態に復し以て今日に至れり。目下湖南の情況は靜穩無事にして新政時代の元氣も自然銷沈に帰し、所謂新党中の少壮者は四方に散乱し、僅かに存する者は屏息晦跡して少くも動かず。省内大小の事王先謙、葉德輝、張祖同、孔憲教等の主持する所と爲り、専ら訓政に府の方針に遵擬して諸般の事務を料理しつゝあり。王先謙は政変の前後より少数なる新党の爲に厭忌せらるゝと雖ども省城の内外に在りて声望独り高く、兒童走卒も其名を知らざる者無く、皆呼ぶに老師を以てす。現に電鈔と称する小新聞紙を發行し自ら之を主管せり。目今長沙省城に在りて紳士中の有力者は王先謙、湯聘珍（前任代理山東巡撫）、孔憲教（書院山長）、張祖同、葉德輝の五人にして、巡撫以下の地方官は皆此の諸人と氣脈を通じ或は其の鼻息を窺ふの形跡有り。新党の情況に至りては別に記するに足る者無し。其の稍や氣概才識有る者は多く四方に難散し、纔かに皮錫瑞、錢維驥等の数人有るのみ。此外不平党に哥老会有り。其組織は省城の内外を四股に分ち、総数八千人。首領人無く、只だ二三の少壮者にて之を統率しつつあるも、會員中の多数は無頼の徒にして、一も談ずるに足る者無し。長沙の政況並に新旧党派の現状大要如此。之を要するに湖南方興の氣運、戊戌の変に挫折すと雖ども未だ全く失望の底に墮落せる者に非ず。苟も之を培養するに其道を以てし、之を教訓するに其宜きを得ば、之を掲げて天下を警醒する、決して致し難きの業に非ず。顧ふに、支那本部十八省中に在りて風俗人心の醇朴堅固なる湖南の右に出る者無し。総て之を言へば此地は實に清國元氣の根本にして原動力の伏在する所。広東、広西、河南、福建若くは山東、四川の如き将来有望の地たるや疑無しと雖ども、湖南の品位は實に高く此の数省の上に在り。故に早きに及んで我の勢力を此の内地に移植し、努めて其の紳士大夫と交結し、以て上下の人心を収攬し、他年時局の変、之をして楽んで我用を爲さしむ可きなり。目下の情形に就て之を觀れば、我若し進んで湖南の事業に着手せんと欲せば、眼中党派の新旧を置かず公平無私、只だ日清提携、若くは東方大局論を以て之に對し、務て新旧党の軋轢を調和し、全省を打て一団と爲すを要す。而じて其第一着手は先つ王先謙等の一派を我範圍に入れ、之をして吾が爲す所を妨げざらしむるのみならず、進んで我事業を助けしむるに在り。旧党已に我が囊中の物と爲らば、新党其他の団体に至りては黙契已に久し。之を操縦する事決して至難に非ざるなり。以上湖南

の情況並に之に対する鄙見の大略なり。

十二月二十五日 風雨。長沙碇泊。午後文廷直来り別る。内河砲船哨官歐陽祥順来り、告て曰く、統領小官砲船をして砲船を以て公等を湘陰に護送せしむと。余之を辞せども可かず。

十二月二十六日 陰。午前九時錨を抜き長沙を發す。砲船一隻護送して随ひ来る。風大にして舟行甚だ艱む。午後二時半三叉磯に達し船を泊す。行程十五里。洞庭より長沙に至るの間鹿角、黄茅灘、三叉磯の三淺灘有り。冬期小汽船の内地に入る能はざるは此の淺処有るが為なり。夜半雷雨。

十二月二十七日 積陰。朔風氷の如し。午後二時半船を出す。二十里右岸夏泥溝を過ぐ。人家七十許。水辺に廟宇有り、頗る宏大なり。東方遙に鵝羊山を望む。嶄然天平に聳へ神秀可愛三叉磯よりして下る。兩岸山巒相属し、松樹粗生、墟落隱見其間に点在す。碧水青山風致情淡、宛然鄉園の趣有り。古人の所謂湖南情絶地なるもの虚言に非ざるなり。瀟湘の勝境蓋し此間を以て第一とす。七時丁字湾に泊す。行程四十里。

十二月二十八日 寒雨迷濛。午前九時丁字湾を發す。此地人家七八十、江の右岸に在り。峨々として村の背後に峙つ者を堂山と為す。滿山花剛石を出す、頗る夥し。此よりして下る。山延び水緩く風景如畫。左岸は概ね平地にして、山の愛すべき者渾て右岸に在り。二十里新港を過ぐ。瓦屋百余戸左岸に位置す。此処小河あり、西より来りて湘水に注ぐ。又行く十五里、銅官を過ぐ。瓦屋一千四五百、山に抱り河に沿て居る。多く陶器を産す。一水東南より来り此に注ぐ。船舶の碇泊するもの多し。亦是れ沿岸の一大市集なり。行く少許、左岸に靖湾市有り。人家二千許。此地亦上下船舶の碇泊処にして、一水西来、湘に入る。瓦屋鱗次、頗る殷盛の概有り。湘水沿岸市鎮の大なるもの此の兩地を以て最と為す。銅官には山上に陶窑有り。其状連珠の如し。遠く之を望めば形堡壘状に似たり。靖港に泊す。行程三十六里。夜に入りて雨益々大。小詩一首を得、

征衣敝尽髮鬢髻、情味此間好似僧、鳥兎勿々年欲暮、瀟湘夜雨坐孤燈。

十二月二十九日 晴。午前八時半開船。十五里橋口を過ぐ。左岸に人家七八十戸有り。又行く十里、青泥望左岸に在り。戸数百許。又十里右岸に樟樹港を過ぐ。瓦屋五十余戸。靖港以下兩岸山を得ず、風景見る可き者無し。昨来江水亦た少く濁る。三十里豪河口に至る。人家三十許。此処江流兩分す。右方の水路を取て下る。長沙より送り来る所の砲船此地に於て別を告げて帰る。船長歐陽守備我船に來り、一礼して去る。因て水兵に金若干を与へて酒資と為す。黄昏湘陰県に達し、城外に泊す。行程七十五里。

十二月三十日 風雨。船を出す能はず。湘陰城外伏波廟下に泊す。

十二月三十一日 風雪。曉に船窓を推せば湘陰の諸山皆白頭矣。是日明治三十二年極月尽日たり。身世飄蓬客中又た客と為り瀟湘船を泊し、風雪一篷燈を挑て歳を守る。往を追ひ来て思ひ感慨四集、自ら禁ずる能はず、嗟乎。我江湖に漂泊する茲に二十年、踪跡萍の如く定住有る無し。悠々たる往事已に道ふに足らず。将来の計又た安くにか出んと欲す。世事茫々、時局の艱亦極矣。願くは半生の心血を尽して事に茲に従はんのみ。詩有り、

関山道絶恨綿々、兀坐篷窓独不眠、聽尽空江半夜雨、他郷又復送殘年。

其二

江城寒拆夜三更、湘水蕭々舟自横、又是今年今夕尽、滿天風雪遠遊情。

明治三十三年

正月元日 新晴如拭。清国湖南省湘陰県の舟次に於て新年を迎ふ。早起盥嗽、船頭に立ち東天の一隅に向ひ遙拝し、新禮を賀す。詩一首を得たり、

居諸倏忽去難留、三十七年与水流、節入新春人若故、天涯万里一孤舟。

晌午風起り船を發する能はず。尚湘陰城外に碇泊す。

正月二日 午前七時湘陰県を発す。天色暗澹、飛雪江を蔽ふ。行く三十里蘆陵潭に泊す。途上七絶一首を得、

長帆経来又短亭、悠々身世伴浮萍、满天風雪揭篷望、一段詩思在洞庭。

正月三日 晴。午前八時芦陵潭を発す。行く三十里右岸に柴田を過ぐ。又二十里白魚磯、三十里琴棋望に到り泊す。行程八十里。昨夜深更小詩一首を得、

雪声燈影夜如何、客路春回鄉思多、汨々湘江天一角、閒情幾被惱愁魔。

百川を口あけて吸ふ洞庭湖

正月四日 積陰。風大にして船を發する能はず、琴棋望に留る。

正月五日 雪。琴棋望滯留。篷窓無事。悶殊に甚し。南溟君賈長沙を吊するの詩成る。予亦た一首を賦す、

長沙謫去姓名香、憂国文章万古光、先哲遺風君識取、湘山鬱々湘江長。

正月六日 早朝開船。磊石山下を過ぎ、行く三十里。湖上強風に遇ひ船を沙岸に泊す。

正月七日 風益す烈。尚洞庭湖上に泊し風の収まるを待つ。詩有り。

吳山楚水客心悠、千里帰程奈阻留、風吼濤号天地黒、洞庭湖上一孤舟。

午後飛雪紛乱。浪湧き風狂ひ、光景凄然。

正月八日 天陰、風大。船を出す能はず。正午風歇む。始て纜を解く。午後一時合龍塘に至り小泊。二時半鹿角を過ぐ。人家百余戸、右岸丘陵の上に在り。此処一列の山陵北より南に延く。琴棋湾より此に到る六十里、夕陽君山を天辺に望む。始て前程の巴陵に近きを知る。喜で一詩を賦す、

倦遊累月載詩還、衣上酒痕和雨斑、日暮洞庭何所見、天辺眉黛是君山。

五時半高山望に達し泊す。茅屋両三戸。鹿角より此に至る三十里。是日行程六十里。

正月九日 健晴。詰朝高山望を發す。風順にして舟行頗る疾く、九時岳州城外に達す。回顧すれば上月下浣湘潭を發してより連日風雪の為に阻まれ、帰程遅々。行路難の嘆有らしめんが、今日始て此の快晴を得、累日の鬱悶を排却するを得たり。是日清曉遙に岳陽樓を望み詩有り、

水光山色両悠々、千里帰心一葉舟、曉霧初分何所見、雲端描出岳陽樓。

十二時岳州を發し、午後一時城陵磯を過ぐ。東南臨湘の大雲山を望む。盤旋七十余峯高半天半に峙ち、積雲皚然極て佳暱たり。午後八時新堤に達す。行程百六十里。

正月十日 晴。午前四時新堤発。九時石頭口の赤壁を過ぐ。十二時左岸に宝塔洲を過ぐ。人家百余戸、厘金局有り。対岸を陸溪口と為す。三時半壠口に達す。左岸に茅屋二三十戸有り。是日行程九十里。午後英国砲船ウードラーク号の上游に航行するを見る。夜小詩一首を得、

虎擲龍拏志未灰、尚余青鬢在蒿萊、中原事業待人急、畢竟阿誰天下才。

正月十一日 快晴。午前二時半壠江發午後一時擁洲を過ぎ、夜に入りて東江脳を経過す。此夜月明晝の如く江靜かにして波たたず。柔櫓に月を載せて下る。詩二首を得たり、

寂々長天金雁飛、遠村犬吠行人稀、半篷客夢交鄉夢、一夜空江載月帰。

斯生久慕白雲鄉、未許塵縁学楚狂、遊尽名山猶有憾、一篷清夢落瀟湘。

十一時金口を過ぎ、流を逐ふて下る。是日午前三時漢陽城に泊す。行程二百九十里。

3. 明治 33 年 1 月から 12 月までの日記

この年の日記は1年を通しての一綴りとなっている。が、1月12日までは湖南紀行と重なっていて簡単な記述になっている。

12日に漢口に戻ってから5月8日まではそこに滞在した。その間のことを2点のみ取り出すと、お金と漢報発行の問題である。まず、お金の件。海軍囑託費は、2月と4月に届いた額はひと月100円で

ある。ということは、130 円に値上がりしたはずがまたもとの額に戻ったことになるが、これについてはその後の変化を見るしかない。東亜同文会については、2 月、3 月、5 月と支部会費 250 円が届き、4 月は支部会費は 150 円、漢報補助費としては 100 円が届いている。名目はともかく漢口支部あてにひと月に 250 円が支給されることになっていたのであろうか。また、支部長費の名目を改めて漢報館主月給として毎月 80 円、さらに交際費 40 円、印刷費 100 円等々で合計 300 円が支給されることになったとする（5, 2）。漢報に対する東亜同文会の保護が手厚いことが実感される場所である。そこで、漢報発行の実情はどうかというと、日本人が発行する新聞の記事に「今回の皇嗣冊立問題に付き論難攻撃を為す者あり」、中国の治安を害するものだとして湖広総督張之洞から外務省宛に照会があり、外務大臣の漢口領事宛電報に「少く論説に注意を与へん事を望む」とあった（2, 16）。さらに、江夏県令が漢報館の通信員、配達員を拘束する事件が起き（3, 5）、長沙布政使が漢報および上海の各新聞紙の発売を禁止する事件も起こった（3, 30）。詳細は不明として残すしかないが、『東亜同文会第十四回報告』中の「会報」には、この時期の状況を「皇太子冊立事件後現政府は維新党の撲滅策を執りし結果、累を此新聞に迄で及ばし一時発売禁止を命ぜられ」と説明している。この説明に従うなら、宗方が主宰する漢報が維新党の動きを支持するような記事を載せたとして地方当局によって問題視され、干渉に乗り出す例がいくつか起こったことを示しているのである。ここでいう皇太子（皇嗣）冊立問題とは何か。宗方の海軍宛ての 3 篇の報告（第四十八号、五十号、五十一号）および 1 月 27 日の日記を総合すると、前年の旧暦 12 月下旬に出された上諭では、光緒帝は「病の為に政務に堪へず、因て皇嗣を定めて以て^皇穆宗〔光緒帝の前の皇帝・同治帝〕の子と為し、自ら位を譲りて引退」することとし、本年の元旦の大礼は皇嗣溥儀が光緒帝に代って取り行うこととなったとしたが、それを知って「天下騒然、長江以南人心恟々、大乱の機將に動かんとするを見て、皇太后も廢立を断行する能はず、隱忍して以て」沙汰やみにした事件を指している。西太后としては、戊戌政変で軟禁状態に置いた光緒帝を病氣にかかっているとしてやめさせ新たな皇帝に代えようとしたが、周囲の反発を招いてその考えを取り下げるしかなかったのである。そして、その時に漢報の記事がこの騒動を批判したことで取締りの対象にされたというのであろう。そして、漢口から上海に移動した後のいまだ東亜同文会から漢報補助費が送られてきていた 9 月に、宗方は漢報続刊をあきらめる決断をし「漢報停刊或は張之洞に売与の權」を漢口に残る岡幸七郎らに委任して（9, 3）から日本に戻り、その後、岡からの手紙で、漢報の權利を全て張之洞に 3500 円で売ったことを伝えてくる（10, 7）という結末になった。維新党については、すぐあとにふれる。

時間が前後したが、漢口から 5 月 11 日に上海に戻ると、すぐさま汪康年、姚文藻、文廷式、唐才常らとの交流が再開した。しかしどのような内容の交流であったかは日記には記すことがほぼない中で、珍しく言及しているのは 5 月 27 日に汪康年に語ったという次の一節である。「汪問ふ、他日拳兵の何の名義を仮らん。予曰く、君側の奸を除き積年の秕政を改め、内は以て百姓を安堵せしめ、外は以て國權を伸張せしむるを以て名義とし……」。また、同 29 日には汪の招待の宴席に集まったメンバーとして四川の王子石、浙江の孫蘭人、高子衡、広東の陳梅堂、尤列等がいた。宗方はその出席者中の王、尤、高 3 名について若干のコメントをしているが、そのうち尤については「孫逸仙の党にして、髪を断ち洋装を為す。亦た一種の人物なり」と書いている。考え方を異にしつつも現政権批判では一致する様々な人たちがテーブルを囲む様子を彷彿させるところである。

そんな折、天津からの電報で、義和団が北京、天津付近に侵入し、鉄道などを破壊していることを知り（5, 29）、直ちにそれに関する情報を集めて海軍への報告を作成するとともに、現地に状況視察に向かう。義和団事件の発生である。6 月 14 日に乗船して 16 日芝罘經由で天津に向い、17 日大沽に着くと列国の戦艦が所狭しと並んでいるのを見て「覚へず人をして快呼せしむ」と記し、八カ国連合軍がすでに行動を開始していることを知って 18 日にかけて大沽の状況を見て回り、21 日には上海にもどっている。以後宗方は上海に留まり、各地からの電報、あるいは現地の新聞情報を利用しつつ、連日義和団に

関連する動きを日記に記し、かつ海軍宛の報告にしたためている。総じてこの事件についての宗方の関心は、義和団そのもの、あるいは清朝側の動きよりも、清朝高官でありながら清朝の採っている方針に批判的な張之洞や劉坤一らの動きにあることは明らかで、日記中に張らに関する多くの情報を見出すことができる。

そして、それまでにない濃度で義和団事件に関する報告を海軍宛てに送っている間にも、唐才常、汪康年らとひんぱんに会っていて、その内容はほぼ日記には書いていないけれども、義和団事件の混乱に乗じて、湖南・湖北・安徽・江西などで会党の力を結集して武装蜂起をして南方に新しい国を創立し、その際張之洞や劉坤一らの協力も得られるはずだと考えて、彼らへの働きかけを行っているのである。宗方の日記からもそれを確認でき、例えば6月21日には、汪康年を訪ねて「張之洞に遊説の結果を問ひ」とあり、宗方自身7月16日に張に手紙を書いて「決心断行を促せり」としている。こうしてあわただしく日々を過ごしている折、宗方の日記には記されていないが、唐才常らは7月1日に上海の張園で維新派と総称される中国の改革を願う人々60名余を集めて「中国国会」を開き、満州人の政府が清国の統治権を有するとは認めないと決議した。同時に上述した武装蜂起を自立会の名において実施する準備を継続し、宗方も何度となく相談に乗っていたようである。しかし、途中までは耳を傾けていたはずの張之洞は、唐らの計画に危険を覚えて弾圧する側に回り、8月21日に漢口で唐ら30名を逮捕し直ちに処刑するという挙に出たのである。唐ら逮捕の知らせを22日に上海で得た宗方は、汪康年とともに救済に動こうとしたが、後の祭りだった。そんな時、29日に孫文が訪ねてきて、30日にも会い、9月1日には日本に向う孫文を見送っている。『孫中山年譜長編』によれば、上海に来る前に内田良平らと話した際、内田は日本から敢死隊40人を上海、南京、武昌に派遣して李鴻章、劉坤一、張之洞を謀殺してはどうか、そのうち1人でも殺すことができれば長江流域に必ず動乱が起き、それに乗じて革命することができると提案したが、孫文はそんな無謀なことをしたら我々革命党は滅んでしまうとして断乎反対したとし、孫文としては、今回上海に上陸したらゆっくり華南の形勢を視察し、機会を見て劉や張に会って彼らの考えを聞いて今後の方向を決めたいとの意向であった。しかし、唐才常逮捕事件の直後で警戒が高まっている時であり、もともと計画は実行できないまま3泊したのみで日本にもどったのだという。したがって宗方は孫文に対して、義和団事件発生後唐才常弾圧に至るまでの諸情勢の変化について、自分の理解の限りを紹介したはずである。

9月8日に上海を離れて帰国する際、漢口でこれ以上漢報を発行する状況にはないと判断したことについては上述した。さて、日本に滞在中、11月からの3カ月の嘱託費として400円が支払われ、それまでの300円から再びアップした。その後11月7日に上海に着き、汪康年としきりに会っており、19日に漢口に着くとそのまま同地で新年を迎えることになる。

ここで、明治33年中に書いた海軍への報告の枚数と日付を日記から拾うと次の通りである。すでに32年中の報告について若干の説明を上述べたのと同じ要領で書くこととし、『宗方小太郎文書』には収録されていないが、上海市社会科学院歴史研究所図書室には所蔵されているものについては、そのタイトルを付すこととする。

*1月15日—第四十六号、*第四十七号、1月29日—第四十八号、2月5日—*第四十九号「皇嗣冊立」。2月13日—「安原に発信」とあるのは、第五十号を書き送ったことだと思われる。3月13日—第五十一、五十二、五十三、五十四号。3月26日—「安原に報告」とあるのは、*第五十五号を書き送ったことか。4月3日—*第五十六号「山東の義和団」、*第五十七号「立嗣余響、北京政府部内の露国党」、*第五十八号「河南、山西の鉞山開掘」、*第五十九号「芦漢鉄道、李秉衡」。4月14日—「安原に発信」とあるのは、*第六十号「義和団、四川遡航の英艦他」であることが、歴史研究所所蔵資料で確認できる。4月23日—「安原に発信」は第六十一号を送ったことか。6月1日—第六十二号、6月2日—第六十三号、6月6日—第六十四、六十五号、6月8日—*第六十六号「義和団事件」、*第六十七号「四川

「逆航の英艦」, 6月11日—第六十八号, 6月12日—第六十九号およびその附録, 6月29日—第七十号, *七十一号, 7月2日—第七十二号, 7月14日—第七十三, *七十四号, 7月17日—*第七十五号「北清事件, 盛京省の不穩他」, 7月25日—第七十六号。そのあと, 日記からは確認できないが, おそらくは7月26日に*第七十七, *七十八号を書き送ったと思われる。歴史研究所が第七十七号報告「劉坤一, 張之洞等の態度と南方の形勢, 日本の出兵に対する南京官吏の誤解他」を所蔵しているからである。7月27日—*第七十九, *八十号, 7月28日—*第八十一, *八十二号, 7月30日—*第八十三号, 8月10日—第八十四, 八十五号, 9月1日—「軍令部に報告」とあるのは, 第八十六, 八十七号を書き送ったことを意味しているのであろう。9月7日—第八十八, 八十九, 九十号, 11月30日—第九十一号, 12月20日—第九十二号, 12月23日—第九十三号。

明治三十三年庚子正月起 宗方

湖南, 漢口, 上海, 芝罘, 天津, 芝罘, 上海, 漢口, 上海, 熊本, 上海, 漢口

正月元日 新晴如拭。清国湖南省湘陰県の舟次に於て新年を迎ふ。

正月二日 雪。三十里, 芦陵潭に泊す。

正月三日 晴。八十里, 琴棋望に泊す。

正月四日 陰。琴棋望滞在。

正月五日 雪。昨来風に阻てられ尚琴棋望に留る。

正月六日 晴。三十里, 洞庭湖上風に阻てられ人家無きの地に泊す。

正月七日 晴。風大にして船を発する能はず。

正月八日 陰。六十里, 高山望に泊す。

正月九日 晴。岳陽を経て長江に出で, 新堤に泊す。行程百六十里。

正月十日 晴。九十里, 壩口に泊す。

正月十一日 晴。二百九十里, 漢口に帰着す。

正月十二日 晴。午前八時上陸。漢報館に帰る。留守中各地よりの来信は山田珠一, 岡純一, 畢永年, 松平福綱, 田野橋次, 葉室諶純, 楊子荃, 文廷式, 勝木恒喜, 瀬上怒治, 大内暢三, 橋元祐蔵, 井手, 牛島, 上田, 桑原政, 清藤幸七郎, 鳥居赫雄, 汪甘卿, 吉岡源之介, 鄒殿書, 岡次郎, 茂木銅之, 田邊安之助, 安原金次, 白岩龍平, 井手三郎, 中西正樹, 村山正隆, 澤村繁太郎, 楠孝吉, 岡山惇一, 寶妻壽作, 平山周, 牧卷次郎, 田村小六, 岡村敬蔵, 多田亀毛, 竹下又平, 成田鍊, 毛利篤, 小林新六, 船津辰一郎, 井上雅二, 末永節, 宮崎寅蔵, 工藤常三郎, 安藤虎男, 高橋雄二郎, 井口忠次郎, 青木喬, 片山敏彦, 木村万作, 高木正雄, 川島浪速, 藤森茂一郎, 澤村雅夫, 上田小三郎, 牛島貫吾, 山根虎之助, 松本亀太郎, 上山良吉, 金子新太郎, 中路新吾, 佐々友房, 内藤虎次郎, 篠原祐喜, 前田彪, 宇都宮太郎及び亀雄, 留守宅の七十一通なり。夜東肥洋行に至り入浴し, 十時帰る。

正月十三日 晴。午前緒方等と領事館に至り領事を訪ひ, 午後帰る。三輪高三郎の帰朝を一品香に餞す。中野, 原, 外二三名来訪。五時文廷式湖南より来着, 我館に留る。夜領事より案内有り。文廷式来れるが為に之を辞す。夜緒方来談。浦敬一, 廣岡安太二氏の招魂碑文を作り, 長崎西田龍太に送り刻せしむ。浦は伊犁に赴き, 廣岡は貴州に入り十余年踪跡を知らざるもの。

正月十四日 晴。午前文廷式を広恒信に饗す。外に文の知人景賢を招く。夜景氏より月華樓に招飲す。八時散ず。

正月十五日 晴。午前沈子培来訪。金島, 橋亦来談。文廷式日本に遊ばんとし予の添書を要求す。即ち

西郷侯、樺山伯、犬養、佐々等諸氏に致すの書翰を作り之に与ふ。正午瀬川領事より文廷式及び予等を饗す。三時辞帰。晚瀬川来訪。七時文廷式の上海行を瑞和輪船に送り、帰途郵便局諸人を訪ひ、帰る。是日東京に第四十六、七、二号報告及び雜件数則を郵送す。外に熊本留守宅に致書し帰漢を報じ、又た長崎西田に浦等の為に撰びし碑文を訂正して之を送る。此の招魂碑は当年の旧友十余人相謀り、之を上海の墓地に建立する者にして、諸友に代りて予其の碑文を撰べるものなり。

正月十六日 陰天。洪調紳なる者安慶楊子荃の点書を持し来り訪ふ。李泉溪、余祖鈞来訪。渡辺正雄、井手三郎に致書し、新聞用紙及び輪画の事を依頼す。夜商船会社東肥洋行を訪ふ。

正月十七日 飛雪紛々。夜来悪寒頭痛殊に甚し。柳原又熊来訪。松本正順来訪。善隣訳局の用務を帯び本日来着せる者なり。中食後褥に就く。

正月十八日 晴。正午に至りて心気頗る佳、床を出で客を見る。木野村成徳、加藤重慶領事来訪。藤原外一名来訪。夜神保軍医来診。

正月十九日 陰。神気頗爽。朝来事を視る。午後橘三郎、原田良哲、菅真海、松本正純等来訪。松本其管する所の訳書局に於て釘装せる訳書数種を贈る。是日原某の湖南行に托し、王先謙に日本維新史一部を贈る。

正月二十日 雨。熊本徳久知事、内田岳父、河口介男、田中清司、毛利篤、山田珠一等諸氏に年賀状を發す。宇野七郎、板井、安達、岡本、門池、平山、柴田等には山田、毛利へ同封にて分配を依頼せり。午後金島来訪。晚橋本齋次郎突然来り敲く。福州より陸路江西省を貫き九江に出で只今此地に着せりと云ふ。之を留めて食事と共にす。佐々干城、岡田晋太郎の年賀状到る。

正月二十一日 晴。京都土屋貞安、東京小原駿吉、台湾内田英治、東京西田良知、大原信等の信到る。橘三郎、堀部直人、李泉溪、曹某来訪。河野宏亦来訪。四川成田安輝、堺与三吉の信到る。藤原銀次郎又た来訪。夜橋本齋次郎、金島文四郎、橘三郎、川野宏等を招き雑煮を食ふ。橋本談話四更に及で寝に就く。

正月二十二日 陰。柳原又熊、木野村成徳来訪。正午諸子と会食す。是日同文会本部に湖南行の報告を發送す。外に西田良知、弟亀雄、川野廉に発信す。午後瀬川領事来訪。晚橋本等と東肥の招邀に赴く。

正月二十三日 雨。午後橋本齋次郎の陸路江西省を経て福州に帰るを餞す。橘、金島を招き会飲す。午後四時橋本を安慶輪船に送る。前原、神坂等来訪。

正月二十四日 雨天。上海井手三郎の信到る。

正月二十五日 雪。午後関帝廟に赴き、古玩舗を覽る。帰途東肥に晚餐し、十時帰る。

正月二十六日 雪。頭痛。是日より漢報休刊。

正月二十七日 大雪。上海井手、文廷式の信到る。之に復す。是日東京同文会に十一月より一月迄の決算報告を為し、且つ本年度の予算を提出せり。本国並に支那、朝鮮等各地の知人四十五人に致書し年賀に答ふ。午後農商務留学石塚某及び外務留學生中畑榮来訪。南京佐々木四方志、山田純三郎、曾根原千代三、宇野海作等の信到る。上海秦長三郎の信到る。夜東肥を訪ふ。是日清曆十二月二十五日の北京電報に接す。大要左の如し。

皇帝病未だ癒へず、端郡王載漪の子大阿哥溥儀を立て皇嗣と為し、以て穆宗毅皇帝の継嗣たらしむ。溥儀年尚少なるを以て安德、万善の両殿に在て読書せしめ崇綺を派して師傅と為し、並に徐桐を派して常川照料せしむ云々。是皆皇太後の宿謀にして皇帝に逼りて讓位せしめんとする者。其実に廃立に同じ。

正月二十八日 快晴。九江橋本齋次郎、蘇州海津駒吉の信到る。午後橘三郎、高田某、原田、須川、瀬川領事来訪。

正月二十九日 雪。東京同文会に清帝讓位の報告を出す。外に東京安原に同一の報告（第四十八号）、

熊本山田に通信を発す。熊本留守宅に発信す。東京田鍋、京都根津、上海渡邊、熊本留守宅の信到る。之に復す外に海津に返書す。夜商船会社金嶋を訪ふ。

正月三十日 陰。午後緒方二三、高田、橘、根岸等來訪。緒方は本日宜昌より帰來せるもの也。是日清曆十二月尽日たり。

正月三十一日 微雪。是日清曆正月元日たり。武漢の諸知人に賀年の名片を分送す。午後高田來訪。

二月一日 雨。午後柳原來訪。共に出で領事館に至り、居留民會議に臨む。四時散ず。大坂福島生來り。土宜数点を贈る。

二月二日 陰。午前橘三郎來訪。

二月三日 陰。午後東肥を訪ふ。是日大島製鉄所技監隱岐嘉雄等來着。大治の鉄鋼買入れの爲なり。福州前田、上海渡邊正雄、安慶楊子荃、大坂井口忠次郎の信到る。

二月四日 陰天。午後瀬川領事、藤原銀次郎來訪。午後より新聞の改良に従事す。終に夜を徹す。

二月五日 半晴。是日東京安原に第四十九号報告を出し、外に熊本佐々干城、上海小室三吉、御嶮雅文、杭州澤澤暹、香港平山周、沙市松平福綱、四川成田安輝、堺与三吉、福州前田彪、宜昌松田満雄、南京佐々木四方志、山田良政、安慶楊子荃等に復書し、北京中島雄、徳丸策三に発信す。又た別に東京田鍋安之助に致書す。

二月六日 陰。午前尹韓來訪。是日鳥居赫雄、井手三郎、岡純一、土屋貞安、葉室謙純等に復書す。午後佐藤、緒方、李泉溪、金子華、林翊等來訪。

二月七日 晴天。午前武昌に渡り本願寺原田の処にて中食し、去て自強学堂に至り柳原、木野村列を見る。四時帰る。近衛公爵、鳥居、西田龍太、同文会本部、福島安正、清藤、林安繁等の信到る。夜緒方、金島、高田、橘列來訪。緒方明日帰郷の便に托し内人に純金戒指一個並に金五十円を送る。

二月八日 晴天。郵便局より軍令部よりの書留信並に同文会よりの書留を領取す。軍令部よりは二月より四月に至る手当金三百円、同文会よりは月額二百五十円を送り來れり。朝瀬川領事來訪。南昌府橋本齋次郎より發せる電報を示す。報に曰く、橋本等の一行暴民の爲に苦められ、武内少佐重傷を負へり、因て神保軍医の來診を乞ふ云々。即ち瀬川と商量し神保を南昌に送るの手数を為し、橋本には直に復電を発し、又た知人一同より慰問の電報を發せり。夜東肥を訪ふ。柳原來り宿す。西田龍太に返信す。

二月九日 晴。石塚來訪。是日緒方帰郷の便に托し途中上海にて渡辺正雄に輪画代六円を返納す。外に井手三郎に致書す。四時緒方、高田の帰郷を大通輪船に送る。帰れば則ち江湖書院山長梁鼎芬星海、商務報館主任朱克柔二人相待てり。余と岡とを広恒信に招待し洋饌を饗し、漢報と連絡事件に付き商量する所有り。七時帰る。

二月十日 陰天。午前外務留學生池部政次來訪。福州より陸路を経て來る者なり。豊島福州領事の依頼状を携へ來る。之を留めて中食を饗す。橘三郎、尹仲韓來訪。六時瀬川領事を江裕輪船に送る。南昌にて邦人武内少佐被害事件に付き特に出張する者也。

二月十一日 快晴。紀元節。午前諸氏と共に領事館に至り御真影を拝し、去て郊外を散歩し帰る。晚商船会社前原巖太郎の招邀に赴く。東亜同文会より暗号書を送り來る。

二月十二日 晴。上海井手三郎の信到る。井手及び東京同文会に発信す。金島文四郎來訪。中畑榮來訪。晚東肥に至り入浴す。

二月十三日 陰。午後東京安原、上海秦長三郎に発信す。長崎佐々澄治の信到る。領事館古家より南昌府橋本齋次郎の電文を転交し來る。曰く、昨夕進賢より南昌へ到る。神保軍医亦來着、武内少佐性命安全云々。夜領事館を訪ふ。

二月十四日 陰天。橘三郎來訪。牛莊深水十八の信到る。是日武昌張之洞の腹心南湖書院山長梁鼎芬並に商務報主任朱克柔に一篇の論文を送り、東方の形勢を論じて将来の変局に及び張総督の警醒を促せ

り。

二月十五日 陰。東京福島安正、長崎佐々澄治に復書し、熊本内藤儀十郎に発信す。橘三郎来訪。

二月十六日 陰。楊開甲来訪。本日其父と共に安慶より来着せるもの也。金五元を借りて去る。池部生来訪。東京安原、同文会に発信す。領事館古家来り、外務大臣の電報を示し、支那に在りて日本人の刊行する新聞紙上今回の皇朝冊立問題に付き論難攻撃を為す者有り、湖広総督張之洞より支那の治安に害有りと為し電報にて照会し来りしを以て、少く論説に注意を与へん事を望む云々の語有り。夜東肥を訪ふ。

二月十七日 晴。夜来風邪の気味あり。朝農務学堂提調王鳳瀛来訪、張之洞の意を伝へ新聞紀事論説に付き商量する所有り。談話時を移して去る。午後楊子荃、其子及び弟子を携へ来訪。武昌大原武慶より酒、菓子、茶等を贈り来る。

二月十八日 晴天。心気不佳。武昌梁鼎芬、朱克柔の返信到る。

二月十九日 晴。朝石塚生来訪。武昌大原武慶の信到る。東京田鍋、白岩、亀雄、上海渡邊、熊本田中清司、東京田野橋治等の信到る。田鍋に復書し、上海牧巻次郎に致書、其の病を問ふ。夜橘を招き会食す。

二月二十日 晴。石塚生来訪。熊本島田、松江等に発信す。

二月二十一日 快晴、春暖頃に催す。午前江を渡りて武昌に至り自強学堂に古山を訪ひ、中食後武備学堂に中野を敲き、大原武慶の嚴君に面し、去て農務学堂に峰村、中西等を訪ひ小談、帰る。過日南昌事件の爲め出張せし神保軍医帰来、當時の事情を悉すを得たり。南昌橋本大尉より遭難の情況を詳報し来る。湖南衡州の陳貞瑞なる者書を致して予に面晤を求む。即ち之を諾す。

二月二十二日 快晴。氣候晩春の如し。午後城外に散歩す。晚金島来訪、之を留て食事を共にす。

二月二十三日 晴。午後長沙王先謙の門人易琛及び衡州の人陳貞瑞来訪。夜雨。

二月二十四日 晴。朝関有節来訪。田鍋安之助、田結柳三郎、安原等の信到る。午後橘来訪。夜東肥に至り入浴す。

二月二十五日 晴天。東京支那公使李盛鐸、文廷式、上海姚文藻、井手三郎等に致すの信を作り投郵す。午前関来訪。之を伴て漢陽大別山に上り、四時帰る。夜東肥に至り会食す。

二月二十六日 雨。午前湖南人二名及び関有節来訪。午後橘と湘泰輪船に湖南人易琛を訪ひ、橘を紹介し安質母呢買入れの事を商量す。是日館内の会計事務を篠原に依托し、金五百五十円を渡す。

二月二十七日 雨。

二月二十八日 雨。湖南王先謙より唐の魏鄭公諫録一部を贈り来る。即ち其亡弟先恭の遺著にして、先謙の補遺せるもの也。先謙は湖南第一等の名紳士にして官国子監祭酒、前任江南学政、現に岳麓書院山長たり。午後橘、楊開甲等来訪。是日先考の三回忌辰たり。朝来吃素謹慎自ら戒む。満天の風雨客意凄然往を思ひ来を察し、風樹の感殊に切なり。回顧すれば弱冠遯迹匆匆々に二十年、先考在世の時定省怡々膝下の歡を尽す能はず。況んや又た其の臨終の期に及ぶ能はず。不孝の罪天地能く容るる無し。然れども先考在ます時已に我志を諒とし区々の心跡、特に垂知を辱ふす。亦た以て少く自ら癒むるに足れり。

三月一日 陰。午前原田、橘来訪。紫東道人楊教裕来訪。四川成都の人儒を棄て道林に入てより茲に三十年、武当山に隠れて道を修む。寛談時を移して去る。或は曰ふ、此人川陝一帶の哥老会首領に係はると。晚諸子と東肥の招邀に赴く。

三月二日 雨。午前井戸川辰三来着。熊本留守宅の信及び亀雄の信来る。河南光州梁肇川の書到る。直に之に復す。午後張之洞聘する所の農學士吉田永二郎、美代清彦来訪。富士製紙会社員關彪及び石塚某、井戸川等来訪。

三月三日 陰。上海井手、渡邊等に発信す。夜橘、柳原来訪。柳原留宿。

三月四日 快晴。午後古家、橘、堀部、康、藤原等来訪。夜東肥を訪ふ。

三月五日 晴。午前九時岡幸七郎の四川行を漢陽の馬家湖に送る。岡は陸路河南、陝西二省を経て四川重慶に出でんとする者なり。晌午岡に別れ、帰途漢陽第一の巨刹帰元寺を一覧す。僧侶二百余人有り。十二時漢水を下りて帰る。武昌柳原より特使報じて曰く、昨夜江夏県令漢報館の通信員二名、配達人二名を拘留せり云々。因て中食後直に領事館に至り、道台の照会の事を商量して帰る。上海井手三郎、東京安原金次、熊本山田珠一の信到る。本願寺の僧二人来り別を告ぐ。近日中井戸川と四川に赴くと云ふ。瀬川本日南京より帰漢。橋本齋次郎より一信有り。熊本米原繁蔵の信到る。夜井戸川、橘来訪。同文会より三月分の支部費二百五十元を送り来る。牛島生来訪。

三月六日 陰。朝井戸川来訪。午前領事館に至り王鳳瀛に会し、昨日江夏県令の処分につき商量す。領事の処にて中食し帰る。中畑、池部来訪。横浜孫文より支那地図五冊を送り来る。夜井戸川辰三の招邀に赴く。南京山田良政、岡野増次郎の信到る。湖南人林、田二生来訪。十時井戸川、石塚、本願寺二人、原田等の四川行を昌和輪船に送る。十一時帰る。

三月七日 陰。午後鄭生来訪。出て領事館に至り、江夏県事件を商量す。上海井手三郎に発信す。瀬川領事来訪。夜中地生来訪。

三月八日 晴。少しく頭痛を覚ふ。佐藤来訪。午後中智、浅井両生の為に農省務省への保証人と為る。江夏県令に対する事件につき第三回の照会を為す。両湖書院梁星海に致書す。上海井手三郎に致書。夜東肥を訪ふ。

三月九日 陰。朝技師小川資源以下三人来訪。福州より陸路江西省を踏査し来れる者なり。杭州深沢運、上海牧巻次郎の信到る。午後池辺生を招き中食を饗す。其の本日より福州に帰るを以て也。南京岡野増次郎の将来の方針及び支那の将来に関する質問に答ふるの書を作り、池部に托す。外に南京佐々木四方志、山田良政に致書す。橘三郎来訪。夜池部、関を船に送り、帰途三井に藤原、堀部等を訪ひ、帰る。岩崎博隆、小川技師来訪。南京上田生に致書。其来漢を止む。

三月十日 晴。尹仲韓来訪。午後領事館に至り瀬川を訪ひ、留りて晚餐の饗を受く。小川、木野村、岩崎等来会。十時辞帰。帰途大智門内大火、人声喧雜、光景惨然。十一時帰る。

三月十一日 晴。午前木野村政徳来訪。之を留て中食を共にす。午後柳原又熊、原田良哲、金島文四郎、岩崎博隆、林錫珪、服部等来訪。上海井手三郎に発信す。夜小川等を訪ふ、在らず。

三月十二日 晴、夜更雷雨。小川技師、尹仲韓、范燧、製図師今藏熊太郎等来訪。尹は本月より主筆房事務を辞すと云ふ。東京田鍋、朝鮮葉室、東京安原の信到る。今藏を留めて宿せしむ。晩領事を訪ふ。帰りにて報告を作り四更に及ぶ。

三月十三日 晴天。午前鄭姓来訪。午後四川人辛九丹来訪。二時中畑栄、錢碩人維驥来訪。錢は湖南人にして新党中の志有る者也。小川資源より、別を告ぐ。本日より上海に赴き浙江を経て福州に陸行すと云ふ。東京安原に五十一、五十二、五十三、五十四の報告を送る。外に田鍋安之助、米原繁蔵、孫逸仙等に致書す。夜小川、岩崎等を大井川に送る。

三月十四日 晴天、風大。橋原孫三来訪、本日着せりと云ふ。夜橋原を訪ふ。深更新馬頭火あり。

三月十五日 大雪。昨日に比すれば寒暖計三十度の差を見る（昨日七十度、本日四十度）。午後今藏武昌より来る。夜橋原の招邀に一品香に赴く。

三月十六日 大雪。陸軍工兵大尉平尾次郎、歩兵大尉久米徳太郎等、福嶋安正、宇都宮太郎の添書を携へ来訪。今回張之洞に聘せられし者なり。

三月十七日 大雪。製図師今藏生病に托して帰国せんとす。其の不信を責め留らしむ。

三月十八日 陰。今藏生の件に付き人を武昌に遣はし其の雇主たる鄭氏を招く。是日武昌大原武慶より案内あり、予今藏生の事の為に行くを得ず。篠原をして之を辞せしむ。領事を訪ふ、在らず。上海井手、南京上田の信到る。上海井手、熊本留守宅に発信、並に上海小田切に托し、小川資源に地図代一

円を返却す。東京辻武雄、弟亀雄、緒方二三の信到る。辻よりは其自著清韓地誌を贈り来る。康岐山来訪。午後橋来談。夜鄭、張兩人来訪。亀雄に発信。

三月十九日 晴天。朝領事館に至り領事と今蔵生を説諭す。下賤の人、道理を解せず、遂に其の帰国の心を翻さしむる能はず。午後鄭、張二人又来り、今蔵の暫留を望むや切なり。因て又た領事館に至り領事と商量人を派し今蔵を拉して領事館に来らしめ強て留らしむ。晚中野、原田、原及び市之川鉾山会社長岡崎高厚来訪。松本正純亦来訪。夜原田了哲を広恒信に伴ひ洋饌を吃す。八時天竜川丸に原田、松本等の帰国を送り、商船会社を訪ひ、十一時帰る。尹仲韓来訪。中井洋行より新聞用紙五万枚の送状到る。上海関有鄰、大坂緒方二三、李泉溪等の信到る。

三月二十日 陰天。朝領事館に至り領事と一会して帰る。午後鄭煥亭等来訪。楊開甲亦来見。夜牛島、浅井、中知、福島来談。

三月二十一日 晴天。午後領事館に至り今蔵の事を商量し帰る。金島、橘、李等来訪。南京岡野増次郎の信到る。夜東肥を訪ふ。

三月二十二日 陰、朝微雨。尹仲韓及び湘人林述唐、姚小秦、伍煥亭等来訪。夜東肥を訪ふ。

三月二十三日 陰天。午前原福太郎、鄭某、今蔵等来訪。午後鄭と領事館に至り今蔵の事を決す。夜牛島並に東本願寺僧寺本来訪。寺本は四川より西藏に入らんとし、巴塘の西金沙江畔にて土人の阻碍する所と為り、具に辛苦を嘗め、遂に志を果さずして帰来せる者なり。蓋亦方外中の快男子也。現に巴塘に仏国宣教師一名あり。枯れ地に在る二十年、二回住屋を焼かれ土番の為に苦められたる者、幾回なるを知らず。今尚一人の信徒無しと云ふ。打箭炉には仏、英、米の宣教師あり。裏塘一帶に在る喇嘛寺の屋瓦は金板を用ひ光朱陸離日を奪ふ。鄙夫賦役の徒に至る迄皆純金の臂環値一千金に当るべき者を穿てりと云ふ。此の金は金沙江一帶に産出する沙金を淘洗して製出せる者にして、其富源測る可からざる者あり。鉄道局総弁鄭孝胥の信並に上海山崎桂、東京福島安正の信到る。山崎は新に重慶領事に任ぜられ近日大元丸にて来漢の事を報ぜり。

三月二十四日 晴天。午前常熟人潘任毅遠、湖州人沈綏松等、荒井、片山、井手の添書を携へ来訪。午時本願寺僧寺本を招き中食を饗す。午後鄭及び楊子荃来訪。堀部外一人来見。午後六時瀬川の招邀に赴く。

三月二十五日 雨天。午後峰村、中西、康、岡崎、原、橘等来訪。風邪の気味あり。

三月二十六日 晴。東京安原に報告及び出師表石刻一包、福岡大内暢三に出師表石刻一包並に信、熊本徳久、谷口へ東坡の石刻各一对宛を郵送し、東京亀雄に金拾円を送る。同文会本部及び上海渡辺の信到る。同文会費三月より八月迄六ヶ月分金三円を送る。是日心気不舒。晚三井藤原銀次郎の招邀に赴く。同席大日方工学士、橘等なり。

三月二十七日 晴。心気不佳。午前岡崎、原、橘等来訪。午後大瀧来訪。是日東京福島安正、辻武雄に返書す。

三月二十八日 晴天。上海井手、四川重慶岡に発信す。晚東肥を訪ふ。

三月二十九日 晴。午後城外に散し、帰途領事館を訪ひ瀬川の処にて晚餐し、十時帰館。上海井手に致書、字母鑄形を注文す。湖南姚小秦より扇面を送り、予に国風を書せん事を索む。古歌を書し之に贈る。

三月三十日 晴天。午後橋来訪。晴時長沙文廷式宅より使丁到り布政使錫良漢報及び上海各新聞紙の発売を禁止せしを告ぐ。

三月三十一日 雨天。是日より漢報用紙を日本製桃色洋紙に改め、紙面の体裁を改良す。領事館に至り、長沙にて新聞禁止の件に付き公使の手を経て総理衙門に照会の事を商量して帰る。

四月一日 晴。長沙文廷謨並に洋務局総弁蔡乃煌に致書。文には東亞三国地誌一部を贈り、且つ其の使者に金四元を与ふ。別に長沙王先謙に信並に国家学一部を送る。根岸、古山来訪。夜東肥を訪ふ。

四月二日 陰天。午前栃原来訪。午後水野辰二郎、林泰次来訪。蘇州姚文藻、武昌朱克柔、南京寺本、上海久吉洋行の信到る。夜大坂商船会社を訪ふ。

四月三日 晴。神武天皇祭。午前栃原来訪。是日東京に第五十六、五十七、五十八、五十九号の報告四種を發す。東京同文会、上海久吉洋行に發信す。晚東肥を訪ふ。

四月四日 晴。午前藤原、池田子之吉来訪。池田は昨日来着せしも御嶺雅文の添書を携へ来れり。御嶺に復書す。正午山崎桂を大元丸に迎ふ。山崎は重慶領事代理として赴任する者也。重慶行の井上某亦来着。錢維驥、吳慶桂、張、姚等来訪。清藤幸及び軍令部の信到る。夜商船会社重嶋の招邀に一品香に赴く。会する者山崎、瀬川、橘、岡崎、松本、古家、外重慶領事館書記生富田、警部内田等也。

四月五日 陰。午前山崎桂外二名来訪。共に出て晴川閣、大別山、伯牙台を遊覽し、帰途大元丸山崎の処にて中食を吃し、別を叙して帰る。大元は今夕若くは明朝出帆すと云ふ。雨。松本来訪、之を留て晩食を饗す。夜井上俊三来訪。談話深更に及で去る。

四月六日 雨。午後四川人辛天成九丹来訪。晴時岡崎、原、橘来訪。

四月七日 晴天。午前佐藤来訪。午時瀬川の湖南行を送る。午後東肥に至り小談、帰る。是日同文会支部費金額百五十円及漢報補助費百元送來。上海小川資源の信到る。田鍋安之助の信到る。

四月八日 陰天。日曜日。朝武昌に渡り自強学堂に柳原、根岸、古山等を訪ひ、中食後柳原と農務学堂に吉田美代等を訪ひ、転じて武備学堂に大原、木野村、中野、平尾、久米等諸人を訪ひ、四時帰る。夜三井、東肥を訪ふ。高橋謙の信到る。

四月九日 微雨。東京同文会及び亀雄の信到る。姚小秦来訪。東京田鍋、亀雄等に發信す。上海井手の信到る。之に復す。午後四川哥老会四万人の首領朱雲貴なる者と館内に於て会見す。其徒姚淮茂、黎桂銓亦到る。朱年齒四十五六才、両牙唇外に斗出し、額上に刀痕有り。目光炯々、容貌鬼の如し。胆氣余有りと雖ども學識に乏しく竟に大局を料理するの器に非ず。

四月十日 雨。午前石飛詔外一名来訪。午後橘三郎来訪。夜岡崎、橘原来談。

四月十一日 雨。午後武昌大原武慶の信到る。藤原銀次郎来訪。夜東肥を訪ふ。

四月十二日 晴。午後橘原、橘を招き会食す。夜領事館を訪ふ。

四月十三日 雨。午後湖南人錢維驥、張瑞運来訪。商船会社員二名来訪。上海池辺正治、林平馬等の信到る。夜東肥を訪ふ。

四月十四日 雨。東京辻武雄、熊本佐々干城、上海林平馬に致書す。外に東京安原、田鍋に發信す。上海井手三郎の信及び鑄字器来着。宜昌井上俊三の信到る。又た門司三菱高田政久に致書す。四川井上、井戸川に發信す。晚東肥の招邀に赴く。熊本留守宅、東京田鍋、原田良哲等の信到る。

四月十五日 雨天。日曜日。緒方二三の信到る。武昌朱強甫の信到る。夜少く頭痛を覺ふ。

四月十六日 雨天。熊本留守宅、河口介男、緒方二三に發信す。

四月十七日 雨。午前武昌楊子荃の長子楊開甲の結婚式に臨み、午後五時帰る。東京岡次郎の信到る。

四月十八日 雨。上海文廷式、井手三郎等の信到る。文は近日東京より上海に帰來せりと云ふ。文廷式に復書し、外に浅井寅喜の致書、其の嚴君の死を吊す。中畑栄、楊開甲来訪。夜東肥を訪ふ。

四月十九日 陰天。午後神保外一人来訪。

四月二十日 晴天。晚領事館を訪ふ。帰途道暗ふして泥濘に阻てられ辛ふして帰館するを得たり。雨。

四月二十一日 陰。午前岡崎、原来訪。午後大原、久米、平尾、神保四大尉及び木野村、柳原諸氏来り。方友升の兵營參觀を誘ふ。即ち小蒸汽より漢水を遡り武聖廟の上流にて起岸。武功營に到る。方氏外出して在らず。官李姓の案内にて兵舎を巡視し、茶話時を移し、帰途一品香に至り中食し諸氏と別れ、東肥に至り洗澡し、十時帰館。安慶河野久太郎の信到る。商船会社前原より来二十三日一品香にて晩餐の案内あり。

四月二十二日 晴天。安慶河野久太郎、東京岡次郎に復書す。前原嚴太郎、橘三郎来訪。

四月二十三日 半晴。東京安原に発信す。鳥居赫雄、辻武雄、瀬上、同文会並に亀雄の信到る。晩商船会社杉山幸平の招邀に一品香に赴く。武漢居留の士、会する者四十余人。夜微雨。

四月二十四日 陰。宇土篠原由誠、奥村傳、二氏に発信し、亀雄送籍の事を依頼す。亀雄に致書す。岡崎高厚、橘三郎、杉山幸平等前後來訪。武昌大原、木野村等より演習明後日に延期せしを報じ来る。夜杉山を大井川丸に送り、帰途東肥に至り、十一時帰る。

四月二十五日 晴天。午後橘來訪。共に出て領事館に至り、外務書記官西村賤夫を訪ひ小談。帰寓橘を留て鰻飯を食ふ。夜帝国博物学芸委員安村喜當、井上雅二の添書を携へ來り訪ふ。本人は陸路洛陽、長安、成都を経て重慶に出で、到处古物の調査研究を為すの目的なり。

四月二十六日 晴天。是日張之洞兵を洪山附近に關し、甲乙兩軍の對抗運動を演せんとし、余輩に案内あり。午前三時篠原と館を出で東肥に至り岡崎、橘原列を誘ひ、四時舟子を促して武昌に度り残月を踏て洪山南麓の岳飛廟の接待処に到る。汪鳳瀛諸事を照料す。某茶を吃し時の到るを待ち、汪氏の帶道にて洪山の閩兵台に上り觀望す。甲軍は西方募旗山に野營し、乙軍は武省城外の梅子山一帯に屯集す。甲軍の兵種は護軍、督撫標、漢防、城守、宜防等の歩騎、砲工、大小輜重、医藥隊の各種約二千五百人、王得勝之に將たり。乙軍は武愷、武防、武功等の歩騎、砲工、医藥、輜重の各種、略甲軍と其数を同ふし、呉元愷之に將たり。午七時半運動開始。午後三時に至りて終結す。其の歩伐の不斉、運動の遲鈍見るに足る者無し。是日総督張之洞自ら出て兩軍を統督す。四時帰る。

四月二十七日 晴天。堀部直人、安村喜當來訪。午後井手三郎の信到る。西村外務書記官、松本警部、古谷書記生來訪。晩西村賤夫を安慶輪船に送る。岡崎高厚、橘原孫藏來訪。

四月二十八日 晴天。堀部直人の上海行に托し上海中井洋行に紙代百五十七円及び井手に鑄字器代十三円を托送す。井手、井上雅二等に致書す。外に堀部の為に御幡雅文に紹介状を發す。安慶晴氣大尉、河野久郎の信到る。晩堀部の招邀に一品香に赴く。四川の志士王校寅伯なる者井戸川辰三の紹介状を携へ來訪。土宜数点を贈る。東京田鍋及び同文会の信二通、亀雄の信並に軍令部より五、六、七、三ヶ月分手当三百円送り来る。

四月二十九日 晴天。大原武慶に発信。安村喜當の為に宜昌松田滿雄に添書す。三輪高三郎より奈良濱一樽を送り来る。午時成都人王寅伯を泰安棧に訪ふ、在らず。帰途安村喜當を星記に訪ひ並に王一清と小談、帰る。三輪高三郎來訪。四川廖鏡清、南京佐々木四方志、山田良政の信到る。帝国軍艦赤城、午後三時來着。室田主計長、早川大軍医來訪。五時赤城を訪問し、上原艦長以下士官一同に面会し、談話時を移て帰る。夜李泉溪來訪。

四月三十日 晴。午後領事館に至る。四時帰る。王校來り別を告ぐ。本夕此地を發し、上海に下ると云ふ。書籍一部を餞す。金島文四郎來訪。夜東肥を訪ひ入浴して帰る。

五月一日 晴天。午前原來訪。出て商会社三井を訪ひ小談、帰る。柳原、橘及び赤城艦長上原中佐等來訪。鄭煥亭來訪。梁啓超、秦等の信到る。南京佐々木四方志に発信す。夜橘、原、服部來訪。九時前原の帰国を大通輪船に送る。

五月二日 晴天。劉学詢より遊歴日本査考、商務日紀二部を送り来る。同文会の信到る。支部長費の名目を改て漢報館主月給とし、毎月八十円と交際費四十円、印刷費百円、事務員手当三十円、部員四川出張費毎月五十円、合計三百円。康岐山、王一清等來訪。

五月三日 晴。上海秦長三郎に紙代百六十五円を送る。中畑來訪。晩東肥を訪ふ。

五月四日 晴天。午後軍艦赤城の招邀に赴く。立食の饗有り。余興として水兵、狂言を演ず。宴未だ開けざるの前、上原艦長特に我輩の為に戦闘操練を行はしむ。五時辭帰。赤城は明日此地を發し上海に下るものなり。

五月五日 雨。終日在家。

五月六日 雨。日曜日。

五月七日 晴。東京安原に戦史材料を郵寄す。外に辻武雄、同文会に発信。辻より東亜三国地誌十部送り来る。熊本緒方二三、武昌大原の信到る。同文会より五月分経費二百五十円送来。中野、木野村、栃原、金島前後来訪。晩東肥を訪ふ。

五月八日 晴天。予本夕を以て天龍川丸に搭じ上海に下らんとす。朝来行李を整頓す。晩東肥の招邀に赴く。七時半天龍川丸に乗ず。岡崎高厚、橘三郎、古谷栄一、栃原孫藏、中畑栄、小森、神坂、篠原、牛島、高、等来送。八時開船。

五月九日 晴。午前九時九江を過ぐ。余長江を上下する二十二回たり。五時安慶を過ぐ。

五月十日 晴。天明蕪湖を出で、十二時南京を過ぐ。帝国軍艦赤城の満艦飾を為し碇泊せるを望む。是日皇太子殿下大婚の吉期たり。船頭遙かに東天に向けて奉賀の意を表す。四時鎮江を過ぐ。金山寺の宝塔新に成り一段の雅麗たり。是夜月色皎潔。

五月十一日 健晴。十一時上海に達す。豊陽館に投ず。中食後山根を敲き、去て唐才常、沈克誠、甲斐靖、渡邊正雄、井手、井上、小田桐を歴訪し、井手と共に汪康年を訪ふ。文廷式在焉。談話時を移し、文廷式、井手と出て姚文藻の病を訪ひ、井手を拉して帰る。勝木、牛島、井手友喜及び新たに熊本より来れる松島敬三、坂田長平、西本省三、内藤熊喜等来訪。

五月十二日 晴天。東京今藏なる者に致書し、地学協会との関係に付き最終の通告を為す。篠原の為替入信を發す。山根、勝木、甲斐、文廷式等来訪。午後井上雅二、堀部直人來訪。晩井手三郎、小田桐勇輔、山根虎之助、甲斐靖等来訪。

五月十三日 晴天。午前領事館に至り天野恭太郎を訪ふ。在北京時代の知人なり。相見ざる七年、近來米国より此地に転任せるもの也。松村及び小田切を問ひ、晌午帰る。留守中橋元祐藏、秦長三郎等来訪せりと云ふ。午後山根、甲斐、井手、勝木等来訪。夜市街を散歩す。

五月十四日 晴天。午前井手、井上等を訪ひ、中食後布施に至り、甲午の秋大本営に於て至尊に拝謁せし時の衣服を着し撮影し、井手と共に姚文藻、文廷式を訪ひ茗話。去て汪康年を敲き、井手、井上、小田桐等と忠兵衛の処に至り鰻飯を食ひ、三人を拉して寓に帰る。山根、甲斐靖等来訪。本日留守中汪康年、唐才常、沈克誠、李駿等来訪せりと云ふ。

五月十五日 晴天。午前李駿松亭来訪、本日より広東に赴くと云ふ。午後海津駒吉來訪。晩英租界に散歩す。井手来談。

五月十六日 晴天。午前井手、甲斐、勝木来訪。中食後井手と出て郵船埠頭に至り根津一を迎ふ。緒方二三、御嶺雅文亦本便より来着。東和に至り根津を問ひ、談時を移て帰る。是日松平正直、亀井英三郎、木内商工局長、井上書記官一行十一人、仏国行の途次来着、之を領事館に訪ひ小談、帰る。夜友を英界に訪ふ。不在中領事館員松村貞雄、天野恭太郎、白須直、成田鍊之助等来訪せりと云ふ。白須は昨日英国より此地に転任せる者なり。

五月十七日 晴天。井手、緒方等と松平正直、木内、亀井等の仏国行を送る。午前十一時白須直を領事館に訪ふ。十二時根津一の約に東和洋行に赴き、南京同文書院創立の事を協議し、中食後辞帰。午後姚文藻来訪、今晚七時兆貴里胡卿卿の家に招邀す。五時姚と緒方を誘ひ馬車にて同文会に至り、七時井手、緒方と共に姚氏の約に赴く。文廷式兄弟と外二人来会。姚氏校書数人を招き琵琶を弾ぜしむ。一人有り、最も好手。我をして坐に江州司馬の感有らしむ。十一時散ず。篠原漢口よりの信、山下稻三郎澳門よりの信到る。正金銀行西巻豊佐久より明晩四馬路新清和里金小宝書寓に招待し来る。

五月十八日 雨天。文廷式より明晩七時石路普慶里謝斐君の家に招邀の請帖至る。午前甲斐靖、井上雅二、多田亀毛、吾妻兵二、汪康年等来訪。午後井手三郎来談。共に出て根津一を訪ひ小説、帰る。六時緒方と出て井手を誘ひ、正金銀行西巻の約に金小宝の書寓に赴く。来会者は西巻を主人とし、成田、葉の兩人、来客は郵船会社林、三井某、台湾紳士林輯堂、葛某、小田切万寿之助、土井、井手、緒方及び予なり。十一時散ず。

五月十九日 微雨。午前渡辺正雄来訪。姚文藻との交渉事件に付き商量する所有り。多田、宮坂及び姚文藻来訪。午後出て根津を訪ひ、去て同文会に至り井手を誘ひ、緒方同道文廷式の招邀に普慶里謝斐君の家に赴く。校書数人席に増す。一人梅花と号する者容色無双と称す。徐琴仙校書琵琶江南第一たり。溥陽の遺韻人をして断腸せしむ。近來清国土風の壞年一年より甚しく宴集必ず校書の舊処に於てし、綺羅粉粧歎笑永夕陽豪奢已に其極に達す。時務を談じ、国事を議す。皆此間に於てす、可慨哉。

十一時散ず。御嶠雅文、土井伊八、甲斐、勝木等来訪。留守中赤城艦長上原伸次郎来訪せりと云ふ。

五月二十日 晴天。正金銀行西巻豊佐久より晚餐の案内有り。午前井手を誘ひ徳明を伴ひ縮緬一足を購ふ。値十六元三角。同文会に帰り中食し、井手と出て文廷式、姚文藻を訪ひ、談話時を移し、去て辜人傑を敲き小談。出でて、湖南人黄易（湘郷人）を泰安棧に訪ふ、在らず。又た去て赤城艦を訪問し、上原艦長以下士官一同に面し、五時帰る。緒方と更に出て正金銀行西巻の招邀に赴く。来客は上原艦長、根津、稻村、緒方及び余なり。十二時辞帰。是日黄易留守中に来訪せりと云ふ。

五月二十一日 晴天。軍令部、高橋謙、田鍋、篠原、河口介男、留守宅の信到る。篠原に復書す。江西の鄒凌瀚来訪。午後出て同文会の宴に赴く。会する者上原艦長、根津一、稻村新六、文廷式、文廷華、姚文藻、汪康年、山根、佐原、緒方、井手、井上、小田桐及び予の十四人なり。十時散ず。十一時帰る。北京中島雄の信到る。

五月二十二日 晴天。午後姚文藻より西郊の辛家花園に招邀す。晚旧研究所生徒一同より一品香に請待の案内あり。夜八時より鄒凌瀚主と為り、三馬路金小宝の家に招飲す。宮坂九郎来訪。午前文廷式、佐原、汪康年及び浙人高子衡等来訪。談話時を移て去る。午後根津、井手と馬車に乗じ、辛家花園、姚賦秋の約に赴く。園は辛仲卿の開く所、亭榭池沼、配置宜を得、雅潔愛す可し。辛氏は金陵の富貴なり。其の宝蔵する所の古今の書画骨董を出し示す。五時宴席に就く。膳羞美を尽し山海雜陳豪奢驚くべし。旧研究所生徒土井等の催しに係はる杏花楼宴会の時間に迫るを以て、六時辛園を辞す。是日会する者姚氏を主人とし、文廷式、汪康年、胡奇梅、辛仲卿及び根津、井手及び余の八人なり。

七時杏花楼に到る。会する者土井、勝木、甲斐、大澤、秦、渡邊、緒方、井手、根津及び余の十人なり。八時宴半ばにして独り杏花楼を辞し、鄒殿書の招邀に公陽里金小宝の家に赴く。文廷式以下清人三四人来会。十時辞帰。是日午後より宴会に臨む三回、応酬の煩に堪へず。十一時緒方の漢口行を天龍川丸に送る。

五月二十三日 晴天。福島安正、山中新の信到る。午前稻村新六武昌に赴くの下士野村岩蔵、木下健太兩人を伴ひ来訪。松浦与三郎来訪。常熱の学校に日本語教師を入る事に付き商量する所有り。湖南人黄易来訪、談話半日にして去る。小田桐勇輔来訪。吾妻兵次来訪。根津一來訪。赤城機関長松澤敬讓来訪。之を留て晩食を共にす。談話八時に及で去る。夜英界に散歩し、帰途井手を訪ふ、病に臥す。井上、小田桐と閑談。十一時に及で辞帰。英国軍艦ウードラーク、ウードコツクの二隻無事重慶に着せりととの報あり。

五月二十四日 晴天。広東高橋謙、安慶晴氣に復書す。小田切領事より中食の案内あり。山根、館森来訪。午後一時出て小田切の招邀に領事館に赴く。来客は根津、稻村、予の三人なり。三時辞帰。黄易、川野宏前後来訪。夜市街に散歩す。留守中狄坪来訪せりと云ふ。

五月二十五日 晴。午前上車、出て土井伊八、秦長三郎等を訪ひ、転て井手の病を問ひ、中食後文廷式を敲き寛談。帰途鄒凌瀚を天保棧に訪ひ小談。去て根津一を訪ひ、晩食後帰寓。東京安原金次、今藏熊太郎、白岩龍平、蘇州荒井益の信到る。甲斐、井上、小田桐来訪。

五月二十六日 陰天。大坂島居、東京白岩、蘇州荒井、漢口篠原、岡崎、東京今藏等に発信す。朝宮坂九郎、杉山孝平の帰国を送り、小田桐と楊樹浦に至り、稻村新六を訪ひ、十一時帰る。小田桐を留て中食を共にす。夜牛島、岡野、勝木、白須直等来訪。白須直更辞帰。大雨。

五月二十七日 陰天。日曜日。午前牛島、吉田順蔵、汪康年来訪。汪問ふ、他日拳兵の何の名義を仮ら

ん。予曰く、君側の奸を除き積年の秕政を改め、内は以て百姓を安堵せしめ、外は以て国権を伸張せしむるを以て名義とし、猛然蹶起、中原の重地を略して天下に号令し、一たび大乱の機を挑発せば愛親覺羅氏の社稷は自然にして倒れんのみ。是れ明太祖天下を取るの故智を襲ふなり云云。成田鍊之助、岡野増次郎来訪。夜洋涇浜に至り排口を觀る

五月二十八日 細雨霏々。午前小島範一郎来訪。横浜孫逸仙に致書。東京大内、大坂島居に写真を郵送す。漢口瀨川浅之進、四川井戸川辰三に発信す。勝木、甲斐来訪。

五月二十九日 雨。汪康年より本日十二時大馬路状元樓に招邀す。午前根津を訪ひ、去て状元樓汪康年の約に赴く。来会者は四川成都人王子石、浙江紹興人孫蘭人、広東順德人尤列令季、広東陳梅堂、浙江杭州人高子衡等なり。王氏は閱歴頗る広く、稍や談ずるに足れり。尤氏は孫逸仙の党にして、髪を斷ち洋装を為す。亦た一種の人物なり。高氏は杭州第一の資産家にして温厚の君子なり。午後三時席散す。辭して東亜同文会に至り、井手の病を問ひ、晚食後吉田順藏を洋涇浜に訪ひ小談。去て正金銀行に西巻豊佐久を敲き、十時帰る。平山周来訪せりと云ふ。入浴後出て平山を六三亭に訪ひ、談話一時に及で帰る。平山は本夕来着。明日香港に向けて出発すと云ふ。

本日午前八時天津發電報に曰く、義和団、北京、天津附近に侵入し、芦溝橋一帶の鐵道、橋梁、停車場を破壊し、又た北京、天津間の鐵道、電信を壊ち、昨夜より北京、天津間汽車不通と為り、各国公使は各其の国海軍の陸戦隊を天津及び北京に送り、居留民を保護せんとす。匪徒は又た芦漢鐵道工事の監督技師たる白耳義人の内地に在る者を襲撃せり。又た保定府にては某国宣教師、害を被むれるとの説有り。

五月三十日 晴天。午前野村、木下等を友永に訪ひ、武昌大原列に致すの書信を托し帰る。平山周、小田桐勇輔、辜人傑、師驥等来訪。午後井上雅二来訪。四時出て平山の香港行を東和洋行に送り、小島範一郎を一訪し、去て小田切領事を訪ひ、帰寓。晚秦長三郎来訪。夜野村、木下等の漢口行を友永に送る。

五月三十一日 晴天。上海正金銀行に托し、金七百円を長崎正金銀行に送り、長崎正金より更に熊本第九銀行に為替取組之留守宅に向け匯送の手續を為す。東京海軍軍令部岡次郎、福州橋本才次郎、南京佐々木四方志、安慶河野久太郎、漢口緒方、篠原等の信到る。岡幸七郎重慶に安着の電報有り。福州橋本才次郎、東京岡次郎、国友重章（同文会）、亀雄及び西田良知に致すの書信を作り、外に熊本留守宅に寄書し、金六百八十一円〇三錢匯送の事を報ず。晚橋元祐藏、中西某、勝木恒喜、甲斐靖、遠藤留吉、佐原某、成田鍊之助等来訪。談話深更に及で去る。

六月一日 晴天。是日陰曆端陽にして屈平汨羅に投ぜし紀念日たり。午前小島範一郎来り、辭別。明日より朝鮮に向けて出発すと云ふ。是日軍令部に六十二号報告を郵送す。午後井手を訪ひ、夜十時根津を東和洋行に敲き、其の南京行を元和輪船に送り帰る。

六月二日 雨天。是日小島の為に朝鮮伊集院領事、国分象太郎、成田定に紹介状を發す。軍令部に北京義和団の件に付き六十三号報告を發す。熊本山田珠一に発信す。昨日不在中広東人尤列及び赤城艦長上原伸次郎来訪せりと云ふ。夜白須直を領事館に訪ひ、談話時を移て帰る。

六月三日 晴天。午前井手三郎来訪。中食後共に出で、唐才常、狄平等を訪ふ、在らず。去て文廷式、姚文藻、汪康年等を歴訪す。或は在り、或は在らず。井手の処に至り暢談、深更に及で帰る。

六月四日 微雨、午後霽。狄葆賢来訪。晚江辺に散歩し帰る。深水十八、成田鍊之助来訪。深水は本日來着、牛莊に赴く者也。之を留て小飲す。

六月五日 晴。朝井手三郎来り、南京行を告げ、孔方兄を借りて去る。午前汪康年進士来談。午後深水、勝木来訪。六時正金銀行西巻氏の招邀に赴く。会する者は御嶺、井手、土井、深水、予及び主人西巻及び成田外一人なり。十時席散す。辭して井手の南京行を吉和輪船に送る。

六月六日 晴天。午後文廷式、姚文藻等を訪ひ、談時を移て帰る。東京同文会の信到る。軍令部に第

六十四号、六十五号報告を發す。深水十八來訪。東京同文会、白岩龍平に發信す。

六月七日 晴天。漢口篠原邦威、武昌大原、久米、平尾等に發信す。館森、井上雅二、吾妻及び本日重慶より來着の中村善次郎來訪。四川井戸川辰三の信到る。別に又た井戸川及び四川井上俊三の信を篠原より転致し来る。深水十八來訪、今晚より牛莊に赴くと云ふ。六時御噂雅文の招邀に四馬路杏花樓に赴く。九時散す。帰途深水を常盤に送る。船の都合により明晩に延べたりと云ふ。

六月八日 晴天。是日六十六、七、二號報告を軍令部に寄す。深水十八來訪。是日夕刻より同文会に移転せんとす、事を以て果さず。井上、甲斐等來訪。晚中島雄を東和洋行に訪ふ。昨日北京より來着し、本夕上船、帰朝する者。相見ざる十一年、意氣旧に依て壮なり。此人北京使署に官する二十三年、著述三百卷の多に達し、制度掌故に精通す。亦た吏中の奇才なり。十一時別れ帰る。蘇州荒井に致書す。篠崎都加佐來訪。

六月九日 陰天。是日より同文会に移転す。汪康年來訪。午後出て姚文藻を訪ひ小談、帰る。赤城艦長上原伸次郎來訪。狄葆賢來訪。

六月十日 雨天。日曜日。晚狄葆賢、唐才常の招邀に一品香に赴く。來客は汪康年、文廷式、沈某、葉瀾及び小田桐、佐原及び予なり。十時散す。

六月十一日 陰天。予明晩を以て此地を發し北支那に向ひ、義和團の変状を視察せんと欲す。熊本留守宅及び東京同文会、四川井戸川、漢口篠原、熊本山田珠一等に發信、北遊を報じ、軍令部に第六十八号報告を發す。午前文廷式を訪ひ、去て大東公司に渡辺を敲き、百六十元暫借の相談を為し、小田切領事、白須直等を訪ひ、帰寓。佐原、川野宏、汪康年來訪。汪氏は北清に同行の約有りしも張之洞に交渉せしむる事有り、急に武昌に赴き帰滬の後北上する事と為れり。午後篠崎都加佐來訪。晚香月梅外銀百六十元を送り来る。佐原來訪。

六月十二日 稻村新六の信到る。東京軍令部に第六十九号報告、並に北方の局面潰裂の時清帝を擁して湖北武昌に遷都し新政府を組織して大改革を断行し、皇太后を幽閉、同様の地に置いて政治の容喙せしめず、滿漢出身の大臣にして固陋頑劣新政に礙有る者を日本及び英米等の国其の政治を監督補助し、以て扶植保全の実を挙げ可きを論ぜる一篇の意見を送る。東京同文会に發信。午後佐原來訪。夜雨。

六月十三日 晴天。広東高橋謙に發信。義和團猖獗の状を報じ、並に我北遊の主意を告知す。余是夜玄海丸に乗じ北清に向はんとす。朝來行装を理し、船票を購ふ。上海より天津に至る、上等五十三円八十錢なり。清藤幸七郎來訪。昨夜來着。本日香港に赴くと云ふ。赤城艦長上原伸二郎來訪。是日熊本留守宅、蘇州荒井の信到る。正午清藤の招邀に豐陽館に赴く。帰途正金銀行、文廷式を歴訪し、帰寓。東京海軍々令部より正金銀行へ電報為替にて金四百円送來。直に領収書を發し、正金に托し此の金員を更に天津正金銀行に為替す。東京田鍋、白岩の信到る。伏氏來り送る。夜八時半同文会を出で玄海丸に上る。井上雅二、小田桐勇輔、岡野、井手、牛島、中西、文廷式、佐原、成田、清藤、勝木、山根、渡部、甲斐等來り送る。山根送別の詩一首を贈る。

六月十四日 晴。午前六時開船。中食後暈船の氣味有り、床に上て臥す。晩食を用ひず。乾餅一枚を食ふ。

六月十五日 晴。船暈依然。朝粥を用ひ、昼、晩、ライスカレー一盃を食す。氷川清話二冊を読て之を畢る。

六月十六日 晴。未明船窓を推て望む残月一痕、沈濤千里山東の諸山高下相屬し、嬋妍笑を含て故人を迎ふる者の如し。回顧すれば、甲午多事の日我服を變じて此間を潜行し、生死の際に出入する幾回なるを知らず。丁酉の冬独逸人膠州湾に扼る。予警を聞き東装道に就き往て其の状を視る。今又た燕京の変に接し、孤舟此地を過ぐ。低徊俯仰慨然たる者久之。午前九時船芝罘に達す。上陸、領事館に至り太田八十馬を訪ひ、其の寓処に至りて暢談し、高橋の処にて中食を共にし、去て領事田結氏を訪ひ小談。午後一時半領事館の短艇にて玄海丸に帰る。領事等來り送る。太田八十馬、秦長三郎、高木某

と同船、天津に赴く。東京安原、上海井上に発信す。三時開船。是日望山東諸山 有詩曰、千里波濤駕海鯨、蓬窓喜見崆峒橫、回頭甲午多難日、寂々空山幾独行。

芝罘にて聞く所に拠れば、北方の義和団益々猖獗を逞ふし、本月八日日本公使館書記生杉山彬永定門外に殺されたりと云ふ。又た天津、芝罘の間の電信は昨夜より不通と為れり。

六月十七日 晴天。午前九時二十分大沽に達す。列国の戦艦海を蓋ふて泊し、煤煙天に張り氣勢雄壯。覺へず人をして快呼せしむ。其の船数二十三隻たり。即ち日本三隻、水雷艇一隻（愛宕は白河内に在り）、英国六隻、独逸四隻、仏国五隻、伊国二隻、澳国一隻、米国二隻、清国一隻、露国二隻と水雷艇二隻たり。玄海丸の大沽口に進まんとするや日本軍艦笠置号より信号にて進行を止め、人を派して告て曰く、本日午前七時日、英、露、仏、独、米、伊、澳八国の連合軍約一千五六百人（此中日本兵四百人）大沽砲台の清兵を攻撃して之を占領せり。列国は支那の官兵を以て義和団と其の動作を同ふする者と認定したればなり。午前長門丸芝罘に向て出口す。東京安原に概略を報知す。午後肥後丸入口。五時独逸の士官、水兵等小蒸汽船にて今朝の戦に斃れし我佐世保海兵団副長海軍中佐服部雄吉の屍体を護送し来り、玄海丸に其の転送を求む。是日海波狂湧、船体動揺特に甚し。副長屍は軍艦旗を用て之を裹む。今朝の役、連合軍の死傷約二十五名、独逸の某艦長重傷を負ひ、副長は戦死せりと云ふ。独逸士官の語る所に拠れば、今朝午前零時四十分塘沽停車場前停泊の日、露、独、英、仏五国の「ポート」に向て陸上の支那兵突然猛烈なる砲撃を為せしを以て塘沽停車場の各国守兵之を逐ひ、進で大沽の北砲台を占領す。聞然一兵無し。即ち砲台の大砲を利用して南砲台を射撃し、忽ち之を奪ふ。此役、敵の死傷頗る多かりしと云ふ。陸上詳細の状況は未だ之を知る能はず。北京、天津の動靜尤も関心に堪へたり。列国已に清兵と戦を交ゆ。局面之が為に決裂し、大勢遂に收拾す可からず。是実に満清存亡の大關鍵なり。

聶士成曾て義和団を撃て五百人を殺傷し、西太后の為に譴責せらる。聶上奏して曰く、団匪討つ能はずんば外人を討つ可ならん乎と。太后曰く、外人も亦討つ可からずと。

聶怒りて声台に帰る。其の向背頗る慮る可き者有りと云ふ。

船大沽口外に泊す。夜に入りて波浪益す。高く揺蕩最甚し。

六月十八日 晴天。午前七時大沽方面に方りて砲声大に起る。約二十分間にして止む。本日の詳報に拠れば、昨十七日午前零時四十分塘沽に於て戦闘開始、午前七時に至て止む。大沽の南北大砲の占領、日本陸戦隊先登第一たり。此役服部中佐戦死し、下士卒四名斃れ重軽傷者各一名を出せり。露国兵の死傷七十人、他国の分詳かならず。連合軍は援兵の到着を待ち、天津に向て前進せんとす。本日に露国旅順の兵一連隊三千人、英国香港より一千人來着の筈。露の哥薩克兵は明日到着すべしと云ふ。又た独逸も膠州湾より兵を送らんとす。其の員数及び到着の時日は未定なり。日本吉野艦亦た本日を以て此地到着の予定なりと云ふ。（大沽攻、午前各国の艦長会議を露艦内に開き、其結果大沽砲台に照会し、十七日午前二時迄に砲台守兵の撤去を請求せしが、砲台よりは何の回答を為さず、突然午前一時より砲撃を始めたり。列国は午前二時迄に退去せざれば断然砲撃すべしと照会せし由）。塘沽天津の汽車、電線共に不通にして北京天津間亦同じ。天津より鉄道を修理しつつ北京に向ひし外兵約一千二百人は中途より天津に折回せりと云ふ（或は北京に向ひし兵は八百五十人と）。北京各国公使館は現に重田の中に在り。義和団の暴狀益々加はり官兵は之を傍觀せり。団匪の数三十万人、端親王之が首領たるものの如し。北京政府の意向も外人攘斥に決定せしもの、如し。露国兵の北京、天津間に在るもの已に二千人の数に上れり。本日郵船会社の肥後丸は負傷者を載せて佐世保に向へり。此の便船に托し東京安原、熊本留守宅に発信す。別に広東高橋謙、漢口藤原邦威に北方の事變を報ずるの書を作り、更に安原に、第二の変局を待て列国の機先を制し南清経営の準備を為し、清国を七連邦に区分し、連邦政府を中原の湖北に置き、我日本は宜く此の新政府を操縦して命令の下に動かしむるの必要を説き、今より第二の運動に移るの用意を為さん事を注意せり（此の三封の書状は芝罘若くは上

海にて投郵す)。北方の局面全く決裂せしを以て南方に於て第二の変局に應ずるの準備を為さんと欲し、本日午後二時原船玄海丸にて大沽を發し南旋の途に就く。

六月十九日 朝午前九時船芝罘に達す。大沽より此に到る船航程十八時間たり。直に上陸、領事館に至り田結領事を訪、北方の形勢を話し、十一時船に帰る。

○領事の談に拠れば、日本より陸兵一千人近日中北方に調遣せらる可しと云ふ。此地亦た近日來匿名掲帖を為す者有り。人心頗る恟々に外国人等は大に警戒する所有り。

○芝罘碇泊の軍艦は清国の海琛、海天二隻と英艦一隻なり。

○領事の談に拠れば列国が大沽砲台守兵の撤去を請求せしは数日前より支那兵頻りに大沽砲台に集中し、形勢不穩にして万一此の門口を扼せらるれば天津、北京は死地に陥り、連絡阻絶如何とも為す可からざるを慮りてなり。

○義和団匪の天津に入り込みしもの二千人、堂々隊伍を組で城に入る。官兵之を護す。団匪の服装は赤帶を約し、又た紅色の套褲帶を用ゆ。

午後四時開船。東京東亜同文会への報告書を作り、別に九州日々新聞社への通信及び留守宅へ上海に帰るを報ずるの信を作り、上海着の時之を投郵せんとす。八時十五分船威海衛の前を過ぐ。暮靄の間劉公島を望む。此の翠巒に対せざる正に六年、当日を追想し、慨然久之。

六月二十日 陰天。船黒水洋を過ぐ。四顧茫々、一物の目を遮る者無し。

六月二十一日 陰天。午後七時船上海に達す。日本各地及び広東、漢口に致すの信を發し、上車同文会に到る。漢口篠原、岡、四川井上、東京安原、武昌楊、東京同文会、田野、亀雄、大坂鳥居赫雄、福州橋本才次郎、横浜孫文の信書に接す。汪康年を訪ひ、張之洞に遊説の結果を問ひ、去て文廷式に抵り小談。十時帰寓。

六月二十二日 雨。熱甚。東京佐伯閣の信到る。水谷彬、勝木恒喜、秦長三郎、佐原等來訪。午後汪康年來訪。晩出て小田切を訪ひ、去て松村、白須等を敲き、長門丸に土井伊八を送りて帰る。是日武聖廟に紫林和尚、悟玄和尚を訪ふ。二人湖南人、方外に隠るる者也。是日電報有り。天津の勢大に迫り、居留地に向て砲撃を開始し、米國領事館之が為に壊たれたりと云ふ。

六月二十三日 晴。詰朝悟玄和尚、畢永年及び汪康年來訪。午後文廷式、黃易來訪。一時井手と根津一を東和に訪ふ。十二時出口の玄海丸にて已に帰国せりと云ふ。渡辺、香月、山根等に面し帰る。晡時紫林、悟玄和尚來訪。汪康年亦來訪。夜成田鍊之助來談。

六月二十四日 雨天。畢永年、甲斐靖來訪。天津へ向ひし各國の連合軍支那兵の為に撃退され、露兵百五十人死傷を出せりと云ふ。黃易の信到る。

六月二十五日 晴。午後汪康年、文廷式を訪ひ、去て軍艦赤城を訪問し、帰途吉田順藏を訪ひ小談、帰る。漢口岡、篠原に發信、広東官崎、平山、清藤に致書、其輕拳を戒む。

劉坤一、家族を湖南に移し、金陵の人心動揺せり。欽差大臣李秉衡本日南京に着せしとの電報有り。政府或は列国と開戦に決し、予め江南及び長江一帯を嚴戒せんとする者の如し。

○近日北京政府重要部に交迭有り。其新任人員左の如し。

軍機処 札親王、王文韶、剛毅、榮祿、趙舒翹、錢應溥

總理衙門端親王、崇礼、王文韶、溥興、那桐、□□

李秉衡首と為り兩江、兩湖の督撫、安徽、湖南、江西等の巡撫を連ね、義和団匪を痛剿せん事を上奏せり。山東巡撫袁世凱亦た剿匪の奏を上れりと云ふ。清江浦の武衛先鋒二營一千人北上を命ぜられ、又た張之洞は呉元凱をして、劉坤一は陳鳳樓をして各若干兵を率ひ北京に至り王事に勤めしめんとす。又た劉坤一は劉光才をして南京下関に在りて新に兵十營を募らしむ。

湖北の荊州、湖南の沅州、西府屬匪乱の報有り。

義和団の総指揮は端親王にして、順天府尹王佑培暗に之を助け、首領は鄭子丹、李來中等なり(李

は陝西人なり)。

北京政府は袁世凱に帯兵上京を命じ、若し自ら来る能はずんば部下の將領をして代往せしむ。

六月二十六日 晴天。

煙台電報に曰く、各国の兵、二十三日午後天津に進入せり。

又曰く、在北京の各国公使、支那兵に護衛せられて京を出て行く所を知らず。又曰く、南京に到着せし李秉衡は劉坤一、張之洞、黃少春の三人をして長江の防備を戒厳せしむ。北京政府は両江總督李鴻章、長江水師提督李秉衡の至急上京を命じたり。

芝罘電報に曰く、各国の連合軍二十四日天津を発し北京に向ふ。兩江總督劉坤一は陳瑜慶を、張之洞は道員陶森甲を派し上海に來り盛宣懷に會同し、各国領事及び道台余晋珊以下中外各官四十二人と今晚洋務局に在りて時事を會議し、長江各港租界保護の事を協商す。

六月二十七日 晴。海軍々令部の電報及び武昌大原、久米、平尾等の信到る。午前狄葆賢を訪ふ。中西重太郎在焉。昨夜來着、仏國を経て英國に赴く者也。井手と豐陽館にて中食し、白岩龍平を迎へ帰寓。白岩、中西來訪。

張之洞、荊州の荊防營三千を北京に送れり。

李鴻章本日香港を発し北上の途に就けりとの電報有り。

王之春は新に湘軍拾營、皖軍十營を招募したり。

本日二十一日兩江總督劉坤一、湖広總督張之洞、安徽巡撫王之春、李秉衡、江蘇巡撫鹿傳霖、湖南巡撫俞廉三、湖北巡撫于蔭霖、江西巡撫松壽等連名上奏、義和團匪の暴狀を条陳し、決して國家の義民に非ざるを弁じ、皇太后皇帝宗社の重きを念ひ、速に定見を持し妄言を信ずる無く、明かに論旨を降し匪黨を討滅し各国公使を安慰し、決して列國に向け和を失するの意無きを明言し、且つ之に告ぐるに李鴻章の着京を待て各国と妥商すべきを以てし、並に米國公使に調停を請ひ、各国使臣に皇太后皇上の真意を伝へ、自國の兵力を以て鎮定の功を奏すべきを誓ひ、一面には各公使に托し、各其の本国政府に向て失体を謝し、且つ日本書記生の殺されたる者には優に撫恤を加へ、將來決して如此の失事無きを誓言して保護の実効を挙げ、同時に各省に明諭して洋商、教士を保護せしむべし。宗社安危の關する所聞髪を容れず、若再び數日を経過せば大局決裂、悔ゆとも及ぶ無し。

焦思悚惶の至りに堪へず。臣劉坤一、張之洞、王之春、鹿傳霖、于蔭霖、俞廉三等謹で奏す。

六月二十八日 晴。宮坂九郎、山根等來訪。

是日電報有り。天津を距る八哩の処、鐵道又た毀たし。團匪と連合軍との衝突あり。又曰く、山東濰縣の教会堂(米國)焚かれ教士逃走せり。

南京消息云、鎮江不穩の兆有り。南京より三千の兵を送れり。

塘沽天津間汽車漸く全通したりとの報あり。又た支那兵天津攻撃中日本人の死傷は各一名なりしと云ふ。

六月二十九日 晴天。東京海軍々令部に第七十号、七十一号報告を発し、同文會近衛公及び田鍋に同一報告を出し、外に熊本留守宅、安原金次に発信す。上原赤城艦長來訪。文廷式來訪。夜湧泉路一帶に散歩す。

六月三十日 晴。伊集院次長に発信す。午後姚文藻來訪。晚白岩を訪ふ、在らず。山根の処に至り小談、歸る。是日北京政府の上諭に接す。其の列國に対する決心の度を見るに足る。其文に曰く、

五月二十四日奉上諭、近日京城内外拳民仇教与洋人為敵教堂教民連日焚殺蔓延太甚剿撫而難洋兵麇集津沽中外岌岌已成將來如何收拾難逆料各省督撫均受國厚恩誼同休戚事局至此當無不竭力圖報者應各就本省情形通盤籌盡於選將練兵籌餉三大端如何保守疆土不使外人逞志如何接濟京師不使朝廷坐困事事均求妥濟沿海沿江各省彼族覬覦已久尤關緊要若再遲疑觀望坐誤事機必至國勢日蹙大局何堪設想是在各省督撫互相觀勉聯絡一氣共挽危局時勢緊迫企盼之至將此由大百里加緊通諭知之。

七月一日 晴天。午前汪康年，文廷式を訪ふ，在らず。姚文藻を訪ひ小談，帰寓。午後白岩を訪ひ，四時帰寓。夜領事及び松村を訪ふ。

東曆六月二十五日上諭，中外大開戰鬪直隸天津地方義和團會同官軍助戰援勝業經降旨嘉獎此等義民所在皆有各省督撫如能招集成團籍隸外海必能得力如何弁法迅速覆奏沿江沿海尤宜急弁將此六百里加緊通諭知之欽此。

六月二十七日直隸總督裕祿電告，劉坤一曰，千萬危急飛電乞援洋兵八國其數三四万四五日即不支矣。

◎張之洞の決心

一，李秉衡，劉坤一等等と連名して義和團討伐の上奏を為せしは，實に張の首唱に係はる事。

一，北京政府の招きに応ぜず，専ら籌餉（軍事費を集むる事）の任に当らんとの言を以て湖北の地を動かさざる事。

一，北京より湖北の軍隊を徴したるも，地方の不穩を名として敢て部下の兵を動かさざる事。

一，地方保護を名として新兵六營を募集したる事。

一，湖南にて已に訓練せる兵勇を湖北省城に召集せし事。

一，兵器製造所を督して兵器の製造を急ぎ，一面には独逸商と約し，モーゼル五連發銃五千挺を購入せんとする事。

一，劉坤一と結託して南方の経営に汲々たる事。

又た張之洞は六月二十五日，人を日，英，米の領事館に遣はし，謂て曰く，地方鎮撫の任，居留民保護の責は張之洞死力を竭して自ら之に当るべければ，決して騷擾を要せず云云の意を以てし，特に日本領事館に告て曰く，近來端郡王剛毅の輩，朝廷の上に在て權勢を擅にし，其の所為真に言語を絶す。今日各国と邊端を開くに至りしも全く彼等の盲動に因る。事已に是に至りては，張之洞自らも亦た現政府を以て中国政府と認むる事能はず。是に因て北京政府の命令は一々奉ぜざるの決心なり。現に劉坤一との連絡已に成る。南方自衛の道に於て已に協商する所有り。若し将来北方の局面決裂するに至るが如くんば南方は分立して自治を図らんと欲す云云。

右の意見は劉坤一，李鴻章も皆同一なり。

是日軍令部長に北京政府，列国と決戦の体度を取り，又た張之洞，劉坤一等は政府の命令を奉ぜず，南方に自立を画する者の如し云云の電報を發す。

電報に曰く，在北京の独逸公使六月十八日總理衙門に赴くの途中団匪の為に殺されたり。衙門は其の屍体を内に運びしに，団匪忽ち来て總理衙門を焚けり。英，白，澳三国を除くの外，各国公使館は皆焚却されたり。

七月二日 陰天。軍令部に七十二号報告を發し，漢口岡，瀨川に発信す。午後郊外に散歩す。

七月三日 雨。午後姚文藻來訪。午後文廷式來訪。南京山田良政，上田賢三等來着。晚唐才常，狄葆賢の招邀に一品香に赴く。会する者，稻村，甲斐，井手，井上，張通典，陶森甲，丁叔雅，吳某，龍沢厚以下湖南，広東，安徽地方の人十余人。十時散ず。天津正金銀行焚かれ，日本人死する者一人，傷者一人。仏国領事亦此役に死す。袁世凱の軍，山東膠州の独逸人を攻撃せんと企て居るとの電報有り。

七月四日 晴天。山田良政，荒井甲子之助，山根等來訪。是日芝罘電報に接し，北方の形勢益す非なるを知る。東京伊集院軍令部次長の信到る。

芦台轟士成の兵約三万人天津附近に逼る。日，露の兵之を迎撃す。天津塘間の鐵道又た復た破壊せらる。北京の各国公使館，白，澳，英三国を除く外皆焼かれ，各公使及び居留民皆英國使館に集り，困迫万状。各国の衛兵約四百に過ぎず。今日の状況にては北京の囲を解き各国人を救ひ出すの望み幾ど絶へたる者の如し。湖南布政司使錫良は五千人の兵を率て北上せんとし，蘇撫鹿傳霖も

三百の兵を以て北京に向はんとする者の如し。湖南沅州、宝慶、常德の三地に乱事有りとの報有り。支那皇帝は端王の為に殺され太后も亦た存亡知る可からずとの云ふ。

七月五日 雨天。牧巻次郎来訪。晚成田鍊を正金銀行に訪ふ。

七月六日 雨天。東京中村静嘉に発信、雜事数件を報ず。午前山田良政を全安棧に訪ひ、正午帰る。

七月七日 晴。晚中村某来訪。夜松村副領事を領事館に訪ふ。上原艦長在焉。十一時辞帰。漢口岡幸七郎の信到る。狄葆賢来訪。

七月八日 晴。張園に散歩す。午後文廷式を訪ふ、在らず。夜牧巻次郎を訪ふ。是日午後成田鍊来訪。栄禄より劉坤一に宛てたる電文の大意左の如し。

本と当さに列国と和を議すべし。而して事忽ち此に到る、救済す可からず。

又曰く、朝廷大小の政柄、端王独擘剛毅之に副たり。皇帝、太后奈何ともす可からず。慶親王、王文韶二人、端王の爲す所を悦ばずと雖ども、今復た術の施す可き無し。時局此に到る、收拾す可からず云云。

山東巡撫袁世凱が劉坤一に送りし電文に曰く、

北直の形勢万分危急。若し如此にして尚半月に亘らば、山東必ず大に乱れ到底鎮圧の見込無し云云。

七月九日 小雨。漢口岡より東京安原金次、工藤常三郎、亀雄及び山内崑、別府真吉等の信を転致し来る。夜白岩龍平を訪ふ。

七月十日 晴。午後秦長三郎を訪ひ、第三回分漢報用紙代百五十一円を払ひ、去て山根、唐才常等を歴訪し、晩秦の招邀に東和洋行に赴く。

七月十一日 晴。是日郵船入る。佐々友房、田鍋安之助、石田仁太郎、中路新吾、深尾某、笹川潔等来着。佐々氏の寓三井に至り小談、帰寓。田鍋と談じ、晩三井洋行小室三吉の招邀に赴く。会する者は本日來着の諸氏及び予と井手也。小田切亦来訪。是日午後白岩等来訪。

○蘇州巡撫鹿傳霖は 日兵五千を率ひ運河より北上せり。

○塩阜の頭目徐老虎号宝山は劉坤一に降服せり。劉は之に四品官を与へ水師船板船五十隻の指揮監督に任じたり。徐は部下三万を有せりと云ふ。

両広総督李鴻章は愈々朝命辞し難く、今明日中任地を発し当上海に來り、小勾留の後進京する事に決せり。

本日聞く所に拠れば、友人陸軍大尉太田八十馬天津にて戦歿せりと云ふ。予が太田と上海に別れたるは去る三十一年夏にして、予は漢口に赴き太田は芝罘に向ひ、相見ざる二年。今茲六月十六日午前予北遊の途次芝罘に上陸し、太田と会し、図らず此れと船を同ふして天津に赴く事となり、十七日玄海丸大沽に達すれば、連合軍正に砲台の守兵と開戦し天津の通路全く絶へ上陸を得ず。且つ時局已に決裂し、予の計画せる義和団を説て我が範圍に入らしむるの一事全く画餅に帰し、南方の経営寸時も忽かせにす可からざる者有るを以て、十八日午後太田は軍艦笠置に転乗し、予は玄海丸にて南旋の途に就かんとし、太田と他日中原に再会せん事を約して別る。何ぞ料らん、此の別れ永訣となり、終天相見るの期無く、君が音容尚心目の間に彷彿として、君已に此の世の人にならず。哀悼の情、何ぞ堪へん。熊本留守宅及び香港平山周の信到る。

太田八十馬天亮と号す。予と同県同市の人。資性真率一点の滓渣無く、心襟玲瓏最も称す可し。氣有り勇有り、武夫中の上乘なる者。

六月初一 奉皇太后懿旨神機營虎神營義和團民各賞銀十兩甘軍賞銀四兩着再賞銀六兩務當同心戰力建此殊勲一欽此。

五月三十日 奉上諭義和團民紛集京師及天津一帶未便無所統帶着派莊親王載勳、協弁大学士剛毅、

統帶并派左營總兵英年署右翼總兵載瀛會同弁理即補条領撫着派為翼長諸団來努力王家同仇敵愾總期來志成城始終勿懈是為至要欽此。

上諭戸部札放糧米二百万石交剛毅等分給義和団民食用欽此。

津沽援軍
聶士成の軍 十二營
馬玉崑の軍 七營
宋慶の軍 九營
拳匪の一団 道台譚文煥率之
陳軍 三營

端郡王の系統

道光帝 — 惇親王 — 端郡王 — 皇太子溥儀
— 恭親王
— 醇親王 — 今帝
西太后那拉氏 太后の妹は醇親王の妃にして今帝の生母なり

七月十二日 陰天。午前大杉，村山等來訪。漢口岡幸七郎の信到る。

○張之洞より北京に送るべき兵は武防營二百五十人，武功營及新募兵共に一千五百人。提督銜統領方友升之を率ひ陸路信陽州を経て北京に進むべく，出發の期は本月十五六日頃なるべし。

○湖南布政使錫良は勦字營五營を率て不日北上すべし。

○浙江巡撫は鎮海，寧波，杭州の兵十一營を民船一百余隻に積み北上せしめたり。

乍浦南灣砲台營，上虞護郡右旅，瑞字右營，瑞字左營。

○蘇州巡撫は五千人を率て北上。

午後佐々友房氏列五人來訪。馬車を同ふして愚園に遊び，帰途張園にて茗を啜り，六時帰る。雷雨。

七月十三日 晴。午前姚文藻，石田仁太郎，中路新吾等來訪。午後西田，笹，深尾，中路等を訪ひ，去て大東を敲き柳原又熊を訪ひ，転じて領事館に大杉を訪ひ，帰途白岩の処に小談，帰る。成田鍊之助來訪。漢口岡の信到る。

七月十四日 晴天。軍令部に七十三，四号報告を送り，甲斐寛中の為に小山秋作に添書す。午前柳原又熊等の帰国を長門丸に送り，柳原に留守宅への送金二百八十四円〇錢を托し，外に蜜錢二匣を托送す。古山，吉田兩人亦た本便より帰国せり。松澤敬讓，狄葆賢等來訪。午後佐々氏を三井に訪ふ。

本日山東巡撫袁世凱より当地盛宣懷に宛てたる電報に曰く，本月八日北京を發し，本日袁の処に達せし使者の報に拠れば，本月六七日の交董福祥の軍城壁上に大砲を排列し，英公使館に集合せる。各国公使及び居留民を攻撃し，牆壁を破りて入り，列国の官民將卒老弱男女を虐殺し尽し，一人の存する者無しと云ふ。

董軍の跋扈甚しく，勅命と雖ども之を奉ぜず。初め董の使館の砲撃を行はんとするや慶親王，榮祿，百万之を止むれども聴かず，終に此の大慘事を演出するに至れり。該電又曰く，現下の形勢皇帝太后も亦た至危至險の境遇に立てる者の如し。

又湖南來電云，衡州地方の天主堂暴徒の為に毀壞せられ，伊国人主教一人，教士三名均しく殺害に遭ふ。尚教士三名有り，下落を知らず云云。

又芝罘來電云，張家口，岫巖州，新民庁，奉天府，遼陽州一帯地方暴徒蜂起し，勢猖獗なり。大連灣に在るの鐵道工夫一万六千人皆逃れ去り，各処の鐵道工事は一概停止し，金州駐札の露兵は防禦

の準備に汲々。

七月十五日 雨天。午前唐才常を訪ひ、帰途汪康年、文廷式を訪ふ、在らず。晚郊外を散歩す。

七月十六日 晴。湖広総督張之洞に致書し之に激勵するに、東南各省の総撫を聯ね、火速兵を率て北上し討賊勤王の事を以てし、其の持重觀望の將來の爲に碍有るを説き、決心斷行を促せり。香月、渡辺列より一品香に晩餐の案内有り。

○湖南巡撫俞廉三、湖北巡撫于蔭霖は政府の爲す所を是認し、張之洞等と反対の行動に出でんとする者の如し。

○西太后は日、露、英三国に対し講和を申込まんとする者の如し。

○北京政府は南方の督撫に電告するに、洋人を撃攘す可きを以てし、若し命に違はずんば死地に置くべしと恐嚇せり。

○北京政府は西安遷都の準備に汲々たり。已に車輛其他を集めつつあり、董福祥の軍両宮を護送する筈なり。

○聶士成の軍初拳匪を討ち、後拳匪と合して洋人を天津に攻めつつ有りしが、拳匪の爲に其の妾を擄せられしを怨み、三千の兵を拳匪と天津に戦ひ、練軍拳匪を助けて聶軍を撃散し、聶士成逃れて行く所を知らず、又た上京の途に在りし二千の聶軍は洋兵と楊村に衝突して大敗を取れり。

○広東來信云、広西の藤県、容県の両地土匪滋擾、又た新州、横州地方不穩の報あり。広西の土匪、広東の広寧に寇せんとする者の如し。李鴻章は増兵の費用として賭博場を公開して百二十万両を得、又た家屋税を付課して十二万両を得、二十營の兵を（或曰四十營）養はんとし、此中半数は安徽人を用ひ半数は広東人を用ゆる計画にて、安徽に兵士募集の爲め候補道袁大化なる者を出発せしめたり。又た別に一堂の親兵を募集せん筈なり。又た広東の居民に戸五十錢つづを義捐せしめ、団練を組織し警察の任務を取らしむる計画なり。

広東小越平陸の信到る。文廷式來訪、本夕上船、湖南、江西に赴くと云ふ。唐才常亦來訪。七時文廷式を送り、一品香に渡辺、香月の招邀に赴く。來会者は御膳、田鍋、成田、白岩、勝木、大津、秦、甲斐及予なり。十一時帰る。汪康年來訪、午前一時辞帰。

御史楊崇伊、端王の密旨を受け前日蘇州より此地に來り、李鴻章の來着を待て協商する所有らんとす。

七月十七日 陰天。上原艦長來訪。午後佐々氏を訪ふ。牧、宮坂、山根、川野久等來訪。岡野増次郎の信到る。軍令部に七十五号報告を發す。

七月十八日 晴。熱氣如焙、寒暖計九十二度。昨夜來下痢、腹痛、心氣頗る不舒。晚佐々、深尾、笹川、石田、中路、西巻、小室、上原、成田両艦長及び御膳、白岩、山根、牧、川野、成田、香月、井上、小田桐、山田、中村等を四馬路杏花楼に饗す。九時席散す。軍令部中村靜嘉の信到る。

七月十九日 晚篠崎医生を訪ひ、藥を取て帰る。

黒龍江將軍壽長齊に、哈爾濱より兵を率て露軍を「アラゴベチェンスク」に攻撃せりとの報有り。

湖南長沙の孔憲教、寧郷の周漢等、団練兵五千人を率て漢口の外国人を攻めんとするとの報に接せり。

聶士成戦死後、其の旧部の兵は馬玉崑の節制に帰したり。

七月二十日 晴天。午前汪康年、姚文藻を訪ふ。午後宮坂、山田等來訪。晚井手三郎の帰国を長門丸に送る。

七月二十一日 晴。中村靜嘉に発信す。是日午前十時李鴻章上海に來着す。随員二十三人、親兵二百名、斜橋の洋務局に寓す。各国領事の李鴻章に対する感情頗る冷淡にして、一人の往て訪ふ者無し。

晚佐々氏を三井に訪ふ。

七月二十二日 晴。暑氣殊に甚く、寒暖計九十三度。午後汪康年、姚文藻、唐才常等を訪ひ、去て東和

洋行に石田、中路等を訪ひ、六時帰る。

七月二十三日 晴。午前佐々氏を訪ふ。午後田鍋と白岩を敲く。晚白岩の処にて会食し、八時領事館に至り松村、深沢等を訪ひ、去て田鍋、山田良政、中村□善等の南京行を天龍川丸に送り、十一時帰る。

七月二十四日 晴。午前深尾、笹川、石田、中路等来訪。之を誘て姚文藻を訪ひ小談、帰る。

○昨日杭州来信云、衢州府属の土匪甚熾、江山县城已に占領せらる云云。

○閩浙總督許应騫は、総兵曹志忠をして洋操旗兵一千人及び新募兵一千人を率て北上せしめんとす。

○团匪河南、山東に蔓延し、江蘇の北境に及ぶ。徐州教会堂已に本月十八日に於て焚かる。

○江西袁州協鎮王国権、劉坤一の命により五營の兵を招募し、金陵へ送らんとす。

○江西巡撫より北上せしめたるは威武新軍四營なり。

○長江一帶の支那官民は日本が大兵を北清に送るの意を誤解し、大に怨恨を懷けり。

○劉、張兩總督は、各国にして愈よ分割の態度を取るが如き有らば全力を尽して之に抗拒せんと決心なり。彼等が砲台を修め兵力を厚ふするは、實に此れが為なり。

○李鴻章の北上に対し各国領事等の感情を害せしは、全く李を以て西太后の代表者と認定したればなり。

五時佐々友房氏来訪。馬車を共にして張園に遊び、茗談暮に及で帰る。

劫余残生豈求全、樸々風塵二十年、鬢毛漸衰氣尚激、龍拏虎擲心欲然、燕山風雨撼天地、八道妖雲遶日辺、胷裡甲兵躍不已、夢斷鯨鯢夢痕羶、西風落日吳江上、笑指燕雲万里天、壽了宗周爾不久、整頓誰握此坤乾、河山歷々中原道、何人先著祖生鞭。

七月二十五日 晴天。午前白岩、秦、佐原、王昭等前後来訪。王氏は戊戌政変後我国に亡命し、今回北清事件の為に芝罘に航し、陸路直隸に入らんとして果さず、数日前此地に来れる者なり。本日の臨時便船にて軍令部に第七十六号報告を郵寄す。

江蘇砲台に三千の兵を増し、又た水雷布設の準備を為しつつ有り。

夜汪康年来訪。出て克堂を三井に訪ふ、在らず。

浙江省の江山県を陥れ常山を囲みしは無為会員なり。

米、露、伊三国領事、李鴻章を見る。李曰、我国力能く拳匪乱兵を平定するに足る故に、在京各国公使を送りて天津に到るの後、各国に向て暫く停戦を乞はんと欲す。若し然らずして各国兵を北京に進めば公使等の性命恐くは保ち難し云云。

本月六日在北京英公使よりの消息によれば、公使は依然攻撃を受けつつ有るも尚能く二週間を支ふべし。各国人の戦死四十人、負傷八十人を出せりと云ふ。

在北京の各国人数は合計一千四百人、其中各公使館員五百人と各国雑人五十人、税司雇男女四百人、使館の護衛兵英国七十五人、露七十五人、米七十二人、仏七十二人、独五十人、澳四十人、伊四十人、日本二十六人。

安徽巡撫王之春の募りし兵勇は、楚軍十營と湘勇武衛正前、正後、正左、正右、正中の五營なり。

張之洞電奏保彼長江□□出于不得已非臣本□身具北人亟人願□命朝廷常兵北上併力死戰

七月二十六日 微雨。中路来訪。晚汪康年の招邀に愚園に赴く。会者佐々友房、深尾、笹川、石田、中路、藤田、小田桐、井上、中路及予なり。十一時席散ず。演劇を一觀し、汪氏に分れ、佐々氏と馬車

を同ふして帰る。

李鴻章の意は各国公使を救出して天津に送り、之と和を議せんと欲す。彼は和議の時日本の有力なる助力を得て円満に局を結ばん事を希望し、償金及び土地の割譲は列国の求に應ずる能はずと謂ひ、各国出兵の費用も之を償ふに意無き者に似たり。

又た李氏は皇帝を擁立するの意無く、旧に依りて皇太后訓政の下に政府を改造せん事を期し、端王剛毅等の徒を一掃するは容易の業と為せども、政府改造の時に方り人材を天下に求むるは必要なるも、康梁の一派は太后の悦ばざる所なれば断じて登用する能はずと明言せり。

又た李氏の所見にては皇太后が果して端王剛毅を疎ぜざるや否、甚だ疑はし、或は今尚其の籠絡中に在るや知る可からずと謂へり。

以上李氏の意見に就て之を判すれば、各国公使を北京より救出し天津にて和を議し、戦費償はず土地割かず、以て此の難局を完結せんとする者の如し。是れ列国が断じて首肯せざる所、独り欧米各国のみならず、我日本と雖ども亦た断じて之を甘談せざるべし。況んや李の欲する所は義和団事件の元惡たる皇太后の訓政を繰り返へし、不能なる内閣を再造せんと欲す、是支那大局の禍なり。列国決して之を承認せず。我を以て之を見れば、宜く列国は此の機会に乘じ満州政府を事実の上に覆し、太后を斥け、満員の頑劣なる者を一掃し、政府の組織を根本より改造するに非ずんば数年ならずして故態又た崩れ、旧病の再発を見るは必然なれば、姑息弥縫の改革は毫も大局に益無きのみならず、却て深患を将来に貽す者なり。我日本は恰も朽敗せる一大老屋の近隣に家するが如し、危険はより甚しきは無し。故に自家の安穩を計らんと欲せば、時を以て此の老屋を打壊し、新材を覓めて之を改造し、以て其の危険を防がざる可からず。

李鴻章の明を以てすといえども、尚且つ皇太后の範囲を出る能はず。況んや劉坤一、張之洞の輩に於てをや。支那に具眼の人無き今日に至りて已に極まれり。已むこと無くば則全国を大混乱の域に驅り満天下の汚穢伏毒を一洗し干戈殺伐の間に新氣象を養成し、然る後国家を再造するの一法有るのみ。夫れ支那の保全なり、扶植なり。其事や甚だ善し。然れども、我日本の位置よりして支那を遇するには宜しく之をして太強ならしむ可からず。又た太弱ならしむ可からず。恩に感ぜざるは支那人の特色なり。我れ若し之を助けて太強ならしむ、其強や却て我に害あり。我之をして太弱ならしむ、其弱や即ち我に損有り。故に曰く、不強不弱の間に支那の存立を保たしめ、常に之をして我を畏れ、我を敬して背く事能はざらしむるは、我帝国の至計なり。是を以て支那を待つ道は七分の威力を以て之を押へ、三分の恩を施して之を撃ぐに在るなり。

剛毅は列国の軍隊北京に入るの後其の己れの身の保たざらん事を懼れ、自ら各国公使を送りて天津に至り、以て列国の歎心を活ひ己れの罪を亡ぼさんとするの意有る者の如し。其の心の用ゆる、狡なりと謂ふべし。

尚上海の英人等は李鴻章を目して露国の利益を計る者と断定し、又た其の北京行を以て列国の間に離間を試み、其の連合を分裂せしめんとするの狡謀を抱ける者と為し、極力之を排斥せり。蓋し此の一事は、我日本も亦宜く予め注意警戒を要するの価値有るを信ず。

各省の北上兵及び新募兵

北上

湖南 布政使錫良引率、湖南練軍勁字營六營、右は歩砲兩種にして數三千人

三十三年七月十六日武昌を経て陸路北京に向ふ

湖北 方友升統帶、十六より二十日迄北上の途に上る

武防、武功、襄陽騎兵一營、砲兵一營數五千人、新募兵若干

荊州駐防旗兵二千人副都統德祿率之

福建 曹志忠統率一千人の洋操旗兵と新兵一千人
浙江 乍浦南湾砲台營，上虞護軍右旅，瑞字左營，瑞字右營，合計十一營
江蘇 蘇撫鹿傳霖帶五千人
清江浦武衛先鋒一千人
江西 威武新軍四營
廣西 劉永福福軍一萬人，此中三千人を三隊に分ち先づ北上せしむ

新募
浙江 新軍二營
江蘇 湖南より一万人を募り清江浦に送れり
安徽 王之春湖南にて五千人を募る
湖北 湖南に募五千人，此中半数は北上せしめ，半数は湖北の補充と為す
護軍營の欠員を補充し，外に護軍二營を増設するの計画にて一千五百人を募りつつあり
又た武防一營北上せしを以て其補充として二百五十人を募集中
廣東 二十營と總督親兵一營募集の計画中
江西 □兵一千人□□□□ □大□□
吳淞口 盛字五營 英，独，□ 班姓率之

新募保護鐵道兵 一百人
新募練勇 二百人 戴子邁大令帶
新募晉字，安字兩營
盛字旗滬軍營の改名 一名巡捕營三哨百八十人 翁子文帶
上海の兵数 合計三千四百四十四人と水師兵六十四人
撫標滬軍營 中左右三哨四百五十人 遊擊龍鎮因帶駐南碼頭
督標奇兵營 五百人 遊擊羅姓帶札徽州會館
督標左營 二百六十四人，水師碇艇四隻十六人 參將廖楚材帶
製造局砲隊營 中左右三哨七百五十人

七月二十七日 晴天。午前佐々克堂を訪ひ，晌午帰る。第七十九号，八十号報告を軍令部に發す。外に熊本留守宅に一信及び縮緬一疋，内田岳父，河口，田中諸家に各一信を作り上田賢象に帰県に托す。漢口岡の信到る。岡に復書す。桑田豊三福州より來着。平原文三郎，橋本齊次郎の信到る。汪康年來訪。

二十七日北京政府は電報を以て李鴻章の北上遅れたるを嚴責せり。政府の李を招くは講和の爲に非ず。之をして北方の總軍を統督し，列國に當らしめんが爲なり。政府が各國公使を放たざるは之をして列國の連合軍を挾制する者なり。政府の意は各國公使を北京に留めつつ有る間は，連合軍決して北京を攻むる能はずと爲し，其の活殺の權を握りて列國を挾制せんとす。

七月二十八日 晴天。軍令部に八十一，八十二号報告を發す。朝出て三井に至り佐々氏を訪ひ，十二時佐々，深尾，笹川，成田鍊，上田，太田原等の帰國を送る。午後左の意味の電報を軍令部に發す。
(北京政府は列國と和を議するの意無し。李鴻章をして北支那の全軍を督し列國と戦はしめんとす)
岡田兼次郎來訪，昨日福州より來着せりと云ふ。前田彪の信到る。

福建省内邵武，汀州，建寧の三地不穩を報ず。先日の大洪水にて難民頗る多く，人心浮動の兆有り。

李鴻章は二十七日の電報に接し、憂慮措かず、近日漢中府知府（現に上海に在り）楊崇伊をして北京に至り、皇太后を見て諫争せしめんとす。

李秉衡兵を率て北上の途中、景州に於て天主教民多数を殺戮せりとの報有り。其の為す所、義和団と毫も異なる所無し。

劉坤一部下の官吏等日本の出兵を怨む事甚だ深し。其の理由は大沽砲台の占領、日本軍之が先登たり。天津城の攻撃、日本軍又た之が先登たり。而して其の勢力露国と相拮抗し、続々兵を發して清国に臨み、欧人の為す所と毫も異なる所無きのみならず、恰も列国軍の為に先導せるが如きの觀有り。是れ欧人と共に支那を敵とし、支那の境土を奪略せんとする者にはあらざる乎との疑惑は日に益す深きを加ふるの状有り。

七月二十九日 晴。午前汪康年、中路、石田等來訪。午後出て姚文藻を訪ふ。

浙江衢州府江山県の匪勢逐日猖狂、龍游、蘭溪の両県亦た危迫を告ぐ。

夜白岩、岡田兼等を訪ふ。

七月三十日 晴。軍令部に八十三号報告を發す。予今夕大井川丸に搭じ漢口に向はんとす。石田仁太郎、中路新吾と南京迄同船を約す。白岩、牧來訪。

西公使本月十九日北京發の信に拠れば、日本人は安藤大尉、児島、中村及水兵五人戦死し、樞原陳政重傷を被れりと云ふ。

汪康年、姚文藻等を訪ふ。九時大井川丸に乗ず。牧卷次郎、渡部、香月、桑田、井上、小林、井手友、牛島、小田桐、岡田兼等來り送る。

七月三十一日 晴。午前一時半開船、午後二時江陰を過ぐ。清国軍艦海天、海圻、海籌、海琛以下十隻と水雷艇二隻碇泊す。雷鳴大雨、如覆盆。予長江を上下す二十三回たり。

八月一日 晴。午前四時半船南京に達す。石田、中路二人上陸。

八月二日 晴。午後二時九江を過ぐ。

八月三日 晴。午前九時漢口に達す。直に上陸、東肥に至り緒方と小談、漢報館に帰る。八重山二番分隊長深柄大尉及び瀨川領事來訪。晚瀨川より案内あり、梶川八重山艦長と之に赴く。談話九時に至て帰る。金島、横山、小森來訪。

八月四日 晴。樞原孫藏來訪、今晚啓程帰国を告ぐ。湖南人黃福恒、趙書仁來訪。中島裁之來訪、帰国を報ず。南京田錦安之助、佐々木四方志、井上雅二、熊本留守宅に発信す。午後出て商船会社前原、金島及び東肥洋行を訪ふ。東肥にて晚食し、枋原、小山田、中島裁之、小森等の帰国を大井川丸に送る。李泉溪來訪。

八月五日 晴。熱氣如烘。午後道台衙門訳官來訪。武昌晴氣、久米両大尉及び美代、根岸外一人並に松村海軍大尉等來訪。夜松本、中畑來訪。

是日芝罘電報に接す。曰く、各国の聯合軍本日一日天津を發し、北京に向て進軍すと。又た本日北京政府より張之洞に電報有り。其大意に曰く、政府は在京各国公使の指定せる日時に於て委員を派し、各公使を護送して天津に到らしむべきに付き、聯合軍の北京進攻を中止せん事を列国軍隊に向て照会せり云云。

八月六日 晴。午前瀨川領事來訪。午後林述唐、沈克誠等を訪ふ。

襄陽、新堤、蒲圻、麻城、四股の哥老会員十万人、此中能く用ゆ可き者五万人有り。兵器は湖北各軍の兵卒多く会籍に属するを以て其の兵器を利用する筈なり。凱字軍は半年用を為す可きも、護軍は中営のみに過ぎず。黃忠浩持重動かず、吳元凱亦た張之洞に背くの勇無しと云ふ。

張之洞が湖南巡撫以下に与へし電報を見るに、実心地内に在る教士教民を保護し、衡州の首犯を捕へて死刑に処し、地方官の職責を失せし者を嚴罰に処し、以て仏、意両国に対し謝罪の意を表す可しと為せり。仏国領事より張之洞に照会せし意味は、湖南教案の処分は只だ地方の大吏は問ふ云云

の語有り。

前原巖太郎、菅沼某、李某來訪。楊子堃、李泉溪來訪。

八月七日 晴。午前武昌商務報館に至り、兩湖書院監督梁鼎芬、商務報主任朱克柔に會し、北清事件に付き議論を上下す。中食の饗應を受け、午後一時辭して農務學堂に至り美代等を訪ひ、三時提調官汪鳳瀛に會談し、去て武備學堂に太原、久米、平尾、晴氣の四大尉及び木野村等を訪ひ、晩食後辭帰。

本日梁鼎芬、汪鳳瀛等の談に捫れば、

目下張之洞、劉坤一、李鴻章、奎俊、端方（陝西巡撫代理）等の聯絡は頗る堅く、東南各省の平和を持続し、外國人を保護し、民亂を予防し、以て北方亂機の南漸を防ぐに努力せり。故に北京より遞伝する所の上諭も其の宗旨と合する者は之を奉じ、合せざる者は之を斟酌するのみ。

東南の兵を分て北上し、勤王討賊以て列國公使を救護するの一事即今の急務なれども、實際東南各省此の兵力無し。現に湖北省を以てするも僅々六千の數に過ぎず。如何ぞ能く之を分たんや。万一東南の兵備を半減するが如き有らば忽ち匪徒隙に乗じて窃發の恐有り。事情如此なるを以て到底北方に勢力を傾注する能はず云。

張、劉等の意は皇太后を奉じて政府を改造するに在りて、全く皇帝を無視せり。梁等の言に曰く、張、劉等の各督撫は皇太后、皇帝一日世に在れば一日之を翼戴し、決して背違す可からず。万一不幸にして両宮に不測有らば、已む事を得ず南方に自立の態度を取るべし。両宮にして在らば、南方自立の事名分の許さざる所なり。

北京宮中に兩派有るは事實なり。即ち端王、剛毅、徐桐、趙舒翹、啓秀の派と慶王、榮祿、王文韶の一派となり。而して兵權多く端王に偏す。是れ其の跋扈衰へざる所以なり。

各國聯合軍北京に入るの日、威力を用て政府を改造せしども、願くば頑固黨を一掃せん事を望む。而して此の改造の際日本が主として清國の利益を現在と將來とに扶持せん事を望む云云。

李秉衡の兵直隸にて教堂を焚き教民を殺せしは事實無根なり。又た袁世凱の兵董福祥の兵と德州に衝突せしも一場の浮説に過ぎず。

湖北省蕪州に小變有り、張之洞兵を送りて之を討つ。

朝廷の意は在北京の各使臣を送りて天津に至らしむるに在れども、各使臣途中の危険を慮りて之に応ぜず。

汪氏曰く、今回北清の民變は露、獨兩國及び鐵道技師、宣教師等之を激成せり。彼の露人の遼東に於ける支那人を待つに全く人理無し。獨逸人の山東に於けるも亦た然り。此の他芦漢鐵道の技師等亦た平日犬馬を以て支那人を遇せり。故に今度の事件は之が反動のみ。皇太后の義和團を討つに忍びずして暗に庇助する所以の者は、實に之が為なり。

四川井戸川辰三の信到る。商船会社前原より明日晚餐の案内有り。

八月八日 晴。午前深柄大尉、松村大尉及び昨日上海より來着せる高雄水雷長大尉原口房太郎等來訪。

天津に在る各國艦隊の長官會議に於て、獨逸人の首唱にて東南督撫が長江防備を嚴にし兵力を厚ふするを禁ぜん事を主張し、決議の後之を英國水師提督の上海に在るに托し、先つ劉坤一に此の意を伝へ、自今若し長江一帶に兵を増し砲台を築くが如き有らば、即ち列國に對し敵意を有する者と認定すべき旨を達したりと云ふ。

一説によれば、英提督シーモア氏と劉坤一との交渉にて長江一帶の保護は万事協商の上に手を下す事とし、決して英國より不法の事を為さずと約せりと云ふ。

午後緒方二三來訪。二時鐵道局総弁鄭孝胥を訪ふ。其の談話の要領左の如し。

張之洞は万一總督の職を擡はるるも管内の治安を維持するに人無きを以て名とし、決して任地を去らざる決心なり。

先月來の上諭に排外主義のものと平和主義の者ありて參差一ならざるは、端王軍機處出勤中に發せ

し者は排外主義にして、其の不在の時慶親王、榮祿等の手によりて発せられしものは平和主義なり。

兵権は多く端王の把持する所と為り、慶親王、榮祿は力足らずして端王に敵する能はず。

總理衙門大臣許景澄、袁昶両人は和議を主張せし廉を以て死刑に処せられたり。又た張蔭桓も新疆に於て死に処られたりと云ふ。

本日鉄道線路保護の爲め護軍一哨を信陽州に派遣せり。

林述唐、沈克誠來訪。

昨日、武昌愷字軍統領吳元凱をして帶兵北上入衙せしむべきの電命張之洞の許に達せり。

又劉坤一、張之洞は譴を被れりとの説あり。

張之洞は又た糧米五十万石を北京に送納すべき命を受けたり。

夜商船会社の宴に赴く。來客は領事及び軍艦八重山の士官一同と予と緒方なり。

八月九日 晴。河南梁肇川の友馮鑑庚來訪。王照氏僧服を着け來り訪ふ。夜林述唐來訪。瀬川領事來訪。是日漢陽福音堂壞たる。

八月十日 晴、熱氣如烘。午前王照來訪。軍令部に第八十四号、八十五号報告を發す。是夜八重山艦長梶川良吉、瀬川領事、王照、前原、緒方等を招き饗す。十一時散ず。

是日栢棍有り、五聖廟の教堂を擾む。

是日大通に暴動起り、市街を焚き、官署を毀てりと云ふ。

八月十一日 晴。朝軍艦八重山に梶川艦長を訪ふ。王照亦來会。士官室に至り、談話時を移し、辭して領事館に至り瀬川を訪ひ、三輪等の処にて中食し、去て郵便局に二橋を敲き小談。神保軍医に耳の診察を受けて帰る。夜東肥を訪ふ。

八月十二日 晴。菅沼、松田満雄來訪。松田を留て中食を饗す。

拳匪の頭目李來中、軍機章京上に在りて行走を命ぜらる。

湖北官府諸官吏の一系統は、張之洞、瞿廷韶（代理布政使）、道台岑春□等端王の爲す所を憎み、巡撫于蔭霖、代理按察使孟繼埏、塩道逢潤古、武昌府余肇康、江夏縣陳令等端王に附和し攘夷を主とし、而立せざるの勢あり。

南京田鍋より電報有り、予の帰期を問ふ。即ち明晩の元和より下申の事を覆電す。

八月十三日 晴。是夜元和輪船に乗り漢口を發し上海に下らんとす。朝來行李を戒む。唐才常、甲斐靖上海より來着、沈克誠と共に來訪。緒方二三、福邊某亦來訪。緒方、甲斐を留て中食を共にす。深柄大尉來訪。南京田鍋安之助の信到る。八時漢報館を出で、怡和洋行の元和輪船に至り官艙に坐す。緒方二三、外二名同船たり。甲斐、岡、篠原、神坂、三輪等來送。十時開船。船の買弁翁酔悞なる者孫文の党にして、予の旧知なり。接待具に到る。

八月十四日 晴。午前九江着。磁器二点を買ふ。

八月十五日 晴。南京にて王照氏船に上る。午後鎮江に達す。碇泊中緒方と骨董舗に過り康熙焼の茶壺一個を購ふ。価二元五角。

八月十六日 晴。正午船上海に達す。予長江を上下する二十四回たり。上陸、緒方と別れ同文会に到る。田鍋在焉。昨日南京より來着せりと云ふ。晚緒方を訪ふ。橘三郎亦來る。夜篠崎を訪ひ病處を診せしむ。

漢口を發し上海に到るの間途上所見如左。

漢口、英艦一隻、九江、蕪湖に各一隻、南京、鎮江に各一隻。又た南京に清艦三隻、鎮江に一隻、江陰は夜深ふして詳からず。

小姑山下游の馬当磯に兵勇多数を役し、砲台を築造せんとする者の如し。

南京城外下游の山上砲十一門を安置す。

南京、鎮江の中間右岸の山上砲十余門を備へたり。(之れは余の実見に非ず)

九江の砲台改造工事に着手せり。

鎮江焦山の頂に暗に砲台を築き砲五門を備へ(伝聞)又た象山の頂に新に砲二三門を安排せるを見る。

東京中村静嘉の公用文書、佐伯闇の公文、宮崎寅藏、平原文三郎、甲斐寛中、上田賢象等の信書を接手す。

八月十七日 晴天。午前牧巻次郎、佐原篤介、中路新吾等来訪。

各国の聯合軍は本月十五日北京城外に達せりと云ふ。直隸總督裕祿楊村に戦死し李秉衡負傷せり。

皇太后、端郡王以下本月十一日北京を出で、董軍三千に護衛せられ張家口を経て北路を迂廻し陝西の西安府に遷れりと云ふ。

東京中野静嘉、熊本留守宅に発信す。王照、唐法塵、西村天囚等来訪。晡時陶森甲を訪ひ、談話時を移て帰る。

八月十八日 晴天。是日西京丸出口、緒方二三等の帰国を送る。漢口岡、篠原に発信す。堺与三吉を旭館に訪ふ。陶森甲、王照、李泉溪等前後来訪。夜橘三郎、田鍋安之助を大井川丸に送る。亀雄の信到る。

八月十九日 半晴。篠崎を訪ひ、転じて領事館に白須直を訪ふ。汪康年、姚文藻を訪ふ、皆他行家に在らず。

清皇帝並に皇太后、端王以下百官率ひ本月十日北京を出で、道を宣化に取り、山西五台山行宮に至り駐駢。

江蘇巡撫鹿傳霖各省に電告して曰く、以後各省より解送する所の糧餉、軍械等は皆山西に運送し北京に輸す勿れ云々。

李秉衡は本月十日北倉の役に受傷し、十一日死去。又た張春發、陳澤霖両将通州の役に歿し、馬玉崑亦た重傷を受くと云ふ。(陳は前任江西按察使、現任武衛先鋒軍統領、張は副統領たり)。

夜平山周来訪、本日香港より来着せりと云ふ。

八月二十日 晴天。東京中村静嘉、宮崎寅藏に発信す。又た漢口篠原に発信す。午前牧、佐原来訪。午後篠崎に至り薬を取り、去て平山周を常盤に訪ひ、四時帰る。福州橋本齊次郎、平原文三郎に発信す。

英国印度兵の上海に上陸せしもの一千人、仏国水兵百三十人。尚次便にて仏国の安南兵二百五十人來着の筈なり。米国も亦た兵を南清に送らんとす。

八月二十一日 晴天。心気不舒。午後文廷式来訪、本日湖南より来着せりと云ふ。白岩龍平、佐原並に方、張二氏来訪。

兵部尚書徐用儀、總理衙門大臣聯元、戸部左侍郎立山等端王の参する所と為り殺され、又た宗室数人太后に従ひ山陝に走るを願はざるを以て殺さる。

榮祿亦た刑部の獄に収監せらる。

八月二十二日 晴。王照来訪。午後漢口電報に接す、云ふ、唐才常、甲斐靖以下三十人昨夜捕縛せらる。直に陶森甲に致書し救解の策を講ぜしむ。小田桐、中路等を約して文路に至り饅頭を食ふ。白岩を訪ふ、在らず。牧巻次郎を訪ひ小談、去て仁德里に唐才常の一派狄葆賢、趙從蕃等に会し唐等救出の事を協議す。陶森甲亦来会。去て小田切領事を訪ひ小談。帰途又た狄等を一訪して帰る。東京笹川潔の信到る。

八月二十三日 陰天。午前出て文廷式を訪ふ、在らず。去て汪康年、姚文藻を訪ふ、亦た在らず。趙從蕃来訪。東京佐伯闇の信到る。金三百円を軍艦に托送せるを報じ来る。

英国印度兵の上海に上陸せしは二千二百人也。仏国の安南兵 百人。

栄禄に死を賜ひたりとの電報李鴻章の許に達せり。

端郡王は日本軍隊の為に捕はれたりとの電報李鴻章の処に達せりと云ふ。

皇帝亦た日本軍営中に在りとの説あり。

八月二十四日 晴天。午前小越平陸福州より来着。午後篠崎を訪ふ。海軍少佐上村経吉来訪、本日の長門丸にて来着せりと云ふ。軍艦八重山中野直枝の信到る。軍令部よりの送金依托され、携へ来れるを報ず。文廷式来訪。去る二十一日夜漢口に於て捕縛されし唐才常等は直に斬首せられたりと云ふ。晚食後上村経吉を朝日館に訪ふ。帰途白岩を訪ひ、十時帰る。岡幸七郎の信到る。

八月二十五日 晴。亀雄並に佐伯間に発信す。午後篠崎に至り、去て上村少佐を訪ひ帰寓。王照来訪、本夕より北清に赴くと云ふ。因て芝罘田結領事、北京福島少将への添書を与ふ。御幡雅文、深柄大尉来訪。

八月二十六日 陰天。

皇帝、皇太后、山西大同府属の陽高県を過ぎ太原に向へりとの電報あり。

八月二十七日 雨。

仏国西貢兵八百人を上海に送る事に決し、近日中全数来着すべしと云ふ。

英国浙江の舟山に一千の印度兵を上陸せしめたりとの説有り。

八月二十八日 夜来大風。午後篠崎に抵る。南京田鍋、山田一行引き上げ来る。牧、勝木、西村、秦、塚等来訪。小越平陸を漢口部員に推薦するの書を東京同文会本部に発す。姚文藻来訪、本日蘇州より来着せりと云ふ。晚汪康年来訪、本日長江より帰来せる者也。漢口岡幸七郎の信到る。二十二日より三日に掛け張之洞の手に殺されたる者は唐才常、林述唐以下十九人なりと云ふ。

八月二十九日 晴天。同文会に報告を発す。外に漢口岡、瀬川に発信す。上村少佐来訪。軍令部よりの送金三百元を受取る。平山周来訪、孫文亦今日の便船にて来着せりと云ふ。中野熊五郎来訪。汪康年、佐原、渡辺等来訪。晚上村の招邀に赴く。会する者小越、稻村、白岩及び予なり。孫文、尤列、内田甲等と旭日館に会談す。軍令部及び熊本留守宅の信到る。

八月三十日 晴天。午前朝汪康年来訪。共に馬車に乗じ旭日館に孫文を訪ひ、中食後出て、小越平陸、上村経吉の帰国を旅順丸に送り帰る。文廷式来訪。

李鴻章、楊崇伊を北京に遣はし、俄に満州独に山東を与へ、以て北清問題の主人たらしめ大阿哥を皇帝の位に登し、俄独の力を仮りて日英を抑へんを画せるものの如し。

八月三十一日 晴天。正金銀行に百三十五円を預け、田鍋、白岩、宮坂、堺来訪。中路、平山周来訪。晚田鍋安之助を訪ふ。

九月一日 晴天。軍令部に報告並に安原金次、熊本留守宅に発信す。李泉溪来訪。午後出て孫文、内田甲、安永東、中路新吾、金島文四郎等の帰国を神戸丸に送る。容星橋亦た服を变じ、孫と同船日本に赴く。唐才常事件の嫌疑にて官府の為に物色せられつゝに有ればなり。漢口岡、篠原の信到る。

九月二日 東京同文会より九十二ヶ月分漢報補助費五百円を送り来る（額面五百円、実額四百七十一円）。

九月三日 晴天。午前正金銀行に至る。漢報費九十二ヶ月分五百円を受取り、此中為替相場の差にて三十円減じ、予の手当九月分八十円を控除残額三百九十一円を両と為し、二百八十両七八を漢報館に匯送す。漢報停刊或は張之洞に売与の権を岡、篠原に委任し、兩人をして適宜処分せしむ。

九月四日 雨。東京同文会柏原文太郎、十一月以降の補助費中より金四百円、漢口に送らん事を申送れり。漢口岡、篠原に発信す。晚田鍋、中村、佐原、文廷式来訪。

九月五日 雨天。田鍋来訪。晚領事館に松村を訪ひ、十時帰る。

九月六日 晴。午前劉兆□来訪。午後小田切領事を訪ひ小談。二時小蒸汽にて軍艦八重山に至り、遠藤司令官、梶川艦長、中野参謀以下数人を訪ひ、談話時を移して辞帰。六時牧巻次郎の招邀に赴く。九

時帰る。佐原、大原俊三、白須直来訪。本日独逸新着の陸兵四百五十人上陸。

九月七日 晴天。文廷式を訪ひ告別す。正金銀行に至り金七百十三円四十銭を為替す。漢口岡の信到る。井上俊三四川より来着。漢口岡、篠原、大坂鳥居に発信す。海軍々令部に第八十八号、八十九号、九十号報告を發す。汪康年来訪。夜篠崎都加佐より麦酒一打を贈り来る。趙從蕃来訪。文廷式、佐原、山田良政、中村、田鍋等来訪。

九月八日 晴。午前八時西京丸に乗り帰国の途に上る。小田切領事、白須直、深沢暹、井上、小田桐、吉田順藏、白岩龍平、牧卷次郎、堀、上田、井手友、牛嶋、中西、勝木、篠崎、田鍋安之助、中村□善、小林、岡野、秦、石塚、西巻等来り送る。九時半開船。是日陰曆八月望日たり。

九月九日 晴。海上。

九月十日 晴。午前六時船長崎に入る。検疫後九時上陸。土佐屋に投ず。日の出新聞社上田黒潮、長崎新報記者上野秀次郎、大坂朝日新聞社山本静也来訪、清国の近状を敲く。之に一二件を話す。西田龍太来訪。熊本井手、松倉、藤本、緒方等に発信す。晚西田を招き晚餐を共にす。正金銀行に托し金七百十三円二銭を熊本第九銀行に為替す。熊本留守宅に電報す。是日午後四時半弁髪を断つ。回顧すれば去る明治十九年十一月三日清装に變じてより北馬南船勿々十又五年。今也時勢一變、此の無用の物を要せず、断然割去愛惜の念無し。九州日の出社員井上俊三、石原等来訪。十時半汽船勢運丸に上る。十二時出港。月明如霜。

九月十一日 晴。午前六時三角際崎に達す。直に上陸、茶店に上りて朝食を用ひ小憩。八時十五分の汽車に乗り熊本に向ふ。九時半春日駅に達す。奥村伝と邂逅す。上車千反畑の宅に帰る。妻孥如慈、閨家安如。内田岳父来過せらる。緒方二三、毛利篤来訪。古川権九郎本日より上京すと聞き、出て之を訪ふ、已に出発して在らず。帰途津野、折原宅を一訪し帰る。晚山田珠一よりの招邀に静養軒に赴く。会する者緒方、松倉、高木、毛利、藤本、大畑等也。

九月十二日 晴。午前牛島、柳原、松倉、井芹、米原、河口、高木等来訪。

九月十三日 微雨。午前安達、柳原、狩野直記、井上俊三等来訪。午後狩野を訪ひ、其の東京行を送りて帰る。大江、鰐取坂、上林の各親類並に知事宅を訪ひ、去て支那店に至り松倉、藤本等に会し、晚食後帰る。是日第九銀行に金六百五十円を預く。

九月十四日 陰。朝師団長伊瀬地好成氏を訪ひ、談話時を移し、去て鎮西館に安達、平山、山田珠一等に会し、午時帰る。島田数雄来訪。岡本源次来訪、之を留めて小飲。夜高藤某来訪。齊藤国雄の信到る。雨。

九月十五日 陰。鳥居赫雄、井手三郎の信到る。木村万作来訪。中食後米原繁藏を訪ふ。午後支那店に至り松倉を訪ひ、迫時計店に人を遣はし時計を換ゆ。晚食後帰る。林田道利の信到る。井手三郎に発信す。

九月十六日 雨。午前谷口長雄、田中清司、津野一雄来訪。林田道利に返信を發す。夜山田珠一來訪。

九月十七日 晴天。午前九時半池田駅より上車、宇土に至り城山の先塋に展し、去て一里に至り篠原邦威の留守宅を訪ひ、其の大人の死を弔ひ香料を供し、奥村氏にて中食し、午後浅井寅喜を訪ひ、転じて法華寺先妣の墓に謁し、林田道利に抵り晚餐の饗を受け、五時川野廉に過ぎり小談。辞して谷口叔母を見舞、六時の汽車にて熊本に帰る。不在中池田源七、柳原又熊来訪せりと云ふ。

九月十八日 陰天。午前柳原、岳父来訪。午後中路新吾、門地熊彦来訪。夜河口介男、矢野諸房来訪。漢口篠原、長崎田鍋、東京安原金次、上村経吉、井手、上海岡野増次郎、東京亀雄の信到る。

九月十九日 晴天。上田小三郎来訪。東京中西正樹の信到る。佐野直喜、田鍋安之助、井手三郎等に覆書す。晚經濟協會の招待に応じ、塩屋町の同事務所に至り支那談を為す。会する者二十余人。十時帰る。

九月二十日 陰天。東京中西正樹に返書す。福岡田鍋安之助より其の大人の死を報じ来る。宇土奥村

伝、野々口永二郎来訪。午後大江の招邀に赴く。宇土林田道利に発信す。徳田弘策来訪。
九月二十一日 陰。午前支那店に至り、人に托し福岡田鍋安之助に香料として金貳円を送り其大人の逝去を吊す。東京中西正崎に発信す。中食後松倉と共に井手の中島村に訪ひ、午後四時帰る。松倉と公園の温泉に浴し、晩食後支那店に到り、九時帰宅。米原在り。篠原邦威、岡田兼次郎の信到る。

李秉衡旧七月十七日通州の張家湾に殉難す。

崇綺保定の蓮池書院に殉節す。

保定通守せしは榮祿、徐桐、崇綺の三人也。

直隸總督代廷雍

盛京將軍增祺、黒龍江將軍寿山

北廷は拳民、拳匪に區別し、拳匪を剿し拳奉民を解散すべきを命ぜり。

清江浦を過ぎし北上兵六万人、此中四万五千人已に京津間に列し聯軍と接□。鹿托の六千人は陝西に向ふ。

現に清江に在るもの七千五百人中、二千五百人属安徽、一千五百属江西、二千属浙江、一千五百属福建。

羅馬法王仏国に派し、清国に向て二千四百万円の賠償を要求す。

独逸は榮祿の全権議和大臣たるを認めず、其の部下の武衛中軍曾て匪徒と使館落としを以て也。

李鴻章露国の力を仮りて和局を料理し、其の報酬として満州を与へんとす。

留京弁事大臣は大学士榮祿、徐桐、崑岡、尚書崇綺、崇礼、裕德、敬信、侍部溥善阿克丹、那桐、府丞陳□□。

李□皇帝の復辟は保すべきも、端、剛を処分することは必ず可からず。

四川總督□夏提督をして一万人を率ひ西安に向せしむ。

南京よりは山西大同鎮總兵劉克才をして湘軍十營を率ひ入晋せしめ、又た長江水師提督黃少春も部下六營を以て北上。

李鴻章两江に於て新募の兵八千人、章高元之を率て揚州に屯す。時を以て北上せんとす。

九月二十二日 晴。午前松岡誠慎来訪。午後高木正雄来訪。篠原邦威に発信す。夜米原を訪ふ、在らず。今日午后新屋敷毛利篤及び井芹経平を訪ひ、転して錦橋畔に嶋田数雄を訪ふ、在らず。

九月二十三日 陰。朝谷口長雄を訪ふ。午前永原、津野、上野、山田、河口、原田等来訪。永原、津野、上野を留て中餐を饗す。午後井手、松倉、毛利、高木、清藤幸七郎来訪。清藤は台湾に赴くと云ふ。井手、松倉、毛利、高木等と晚餐を共にす。夜に入りて散ず。

九月二十四日 晴。午前支那店に至る。午後五時半岡崎唯雄、石坂某の招邀に静養軒に赴き、七時半帰る。途中岡本源次を鎮西館に訪ひ、八時帰宅。

九月二十五日 晴天。同文会近衛会長並に柏原文太郎に発信す。別に軍令部中村静嘉、安原金次に発信す。林田道利来訪。漢口岡幸七郎の信到る。中路新吾来別る、本夕より東上すと云ふ。上海井上、小田桐、中村、白岩、牧、渡辺、篠崎、白須、深沢等に発信す。

九月二十六日 雨。午前柳原又熊来訪。之を留て中食す。漢口岡幸七郎、朝鮮葉室堪純、林田道利等の信到る。午後福岡田鍋安之助の電報到る。之に復す。漢口岡幸七、朝鮮葉室堪純に返書を出す。九州新聞記者國武猪太郎来訪。

九月二十七日 雨。朝田鍋安之助来訪。之を留て中餐を共にす。柳原亦来会。午後田鍋と其の寓処洗馬柳邊旅館に至る。晩松倉の案内にて開陽亭に至り晩食す。終りて支那店に至り、談話九時に及て辞帰。井手三郎の信到る。

九月二十七日報

李鴻章直隸總督と為り、両広総督の欠は江蘇巡撫鹿傳霖之に任じ、浙撫劉樹堂行在所に召され、代理蘇撫聶緝槩其の後任を襲ふ。

榮祿召されて行在に赴く。

閏八月二日上諭、此次開霽實に朝廷の本意に非ず。皆諸王大臣等拳匪を縦庇し釁ふ。友邦に啓き以て憂を宗社に貽す。乘輿播遷朕固より咎を引き自ら責めざる能はず。而て諸王大臣等端無く禍を肇亦た亟に応に分別重軽加ふるに懲処を以てすべし。

莊親王載勛、怡親王溥靜、貝勒載瀅、載瀅は爵職を革去す。端郡王載漪は著して竟に従て一切の差使を撤去し、宗人府に交へて嚴に議処を加へ、並に著して停俸す。輔国公載瀾、都察院左都御史英年、均く著して該衙門に交へ嚴に議処を加ふ。

協弁大学士吏部尚書剛毅、刑部尚書趙舒翹、著して都察院に交へて議処以て懲儆を示す。長江提督黃少春帯兵北上に付き、江南提督李占春之を代理し、江陰に駐し各營及び南北岸砲台皆其の節制に帰す。而て江南提督は楊金龍をして署理せしむ。

揚州新駐武衛楚軍四營と外に運老二營。

九月二十八日 晴天。秋冷人に可し。朝田鍋安之助を柳邊に訪ひ、中食後帰る。高山公通、深水十八の信到る。佐々干城、安達謙造來訪。

九月二十九日 晴天。晩米原、田鍋、松倉來訪。

九月三十日 晴。朝出て田鍋安之助を洗馬柳邊に訪ひ、十時二十分其の東京行を春日駅に送り、帰途支那店に至る。深水十八在り、本夕より上海に向て出発すと云ふ。午後帰宅。高山公通來訪せりと云ふ。高山に発信す。東京同文会柏原文太郎の信到る。漢口に向ひ金四百円本月十八日匯送せりと云ふ。夜松田満雄來訪。

十月一日 晴天。詰朝出て島田数雄を訪ひ小談、去て松田満雄を訪ふ。本日動身渡清の途に上るが為なり。柳原又熊來訪。夜米原を訪ふ。雨。

十月二日 陰。午前古川権九郎、深水十八、柏原文太郎の信到る。午前大江岳父來過。午後井手三郎、島田数雄、柳原又熊、山田九郎等來訪。晩漢口岡幸七郎、上海白岩龍平、小田桐勇輔等の信到る。

十月三日 晴天。漢口岡に復書し、長崎西田龍太に添書を出す。午前柳原を訪ふ、在らず。去て支那店に至り松倉を訪ふ。中食後帰る。夜河口宅を訪ふ。西田龍太の信到る。

十月四日 晴。午前松倉を春日に訪ひ、其の牛莊行を送り、船の都合にて明日熊本を発する事となれり。午後松倉來訪。共に出て水前寺に遊び、三時松倉と分袂し、大江に到り練兵場にて花火を見、九時帰る。上海白岩の信、東京安原金次の信到る。

十月五日 雨天。午後柳原又熊、池内源七來訪。宇土奥村傳、東京柏原文太郎に発信す。林田道利の為に台北県知事村上義雄に致すの書信を作る。

十月六日 晴。朝真藤義雄來訪。午前十時妻孥と共に宇土に至り先姑の墓碕に謁す。本月一日建立せし者なり。外に法華寺先妣の墓石を重修し、弟光彦及び伯母八千女の墓を建つ。展拝終はりて一里に至り中食の饗を受け、篠原邦威を訪ひ小談、三時三十分の汽車にて帰る。留守中柳原又熊、米原、武藤等來訪せりと云ふ。

十月七日 晴天。朝柳原又熊の清国行を送り、去て春日に至り、井手三郎の上海行を送る。長崎松倉善家、漢口岡幸七郎の信到る。漢報の全部を張之洞に金三千五百に売与せしを報じ来る。岡に復書す。上海白岩、漢口橘に発信す。

十月八日 晴天。河口介男來訪。神崎清の信到る。

十月九日 雨。上海白須直、大坂緒方二三、齊藤国雄の信到る。緒方、齊藤、神崎に復書す。夜内人と米原繁蔵の招邀に赴く。

十月十日 晴。東京安原金次，中村静嘉に発信す。是日正午親族の女客を饗す。官原義雄，勝木恒喜，神崎清来訪。

十月十一日 晴。清藤幸七郎来訪，昨夜台湾より帰来せりと云ふ。晚米原，武藤，井芹，夫婦及び山田珠一等を饗す。十時席散す。高山公通，岡幸七郎の信到る。

十月十二日 陰天。午前友枝伴蔵来訪，干蝦を贈る。午後米原，清藤前後来訪。晚大江の法会に赴く。

十月十三日 陰。岡純一氏の書信到る。外に鰯五斤を小包にて送り来る。清藤来訪。

十月十四日 日曜。晴。午前清藤来訪。晚食後高山公通を魚屋町一丁目に訪ふ。九時帰る。上海岡野増次郎の信到る。午前草葉町古荘医院に至り歯を療す。田中清司来訪。

十月十五日 晴天。午前米原を訪ひ，共に竜田山の頂に登り，遊覧時を移し米原の処にて中食し，午後米原を誘て帰り晚食を共にす。河口介男来訪，十二時帰る。東京田鍋安之助の信到る。岡純一氏に復書す。

十月十六日 晴。上海篠崎，井手，広島齋藤の信到る。午前通町に到り靴を注文す。赤皮長靴一足六円，黒皮同五円たり。東京田鍋に返信を発す。午後米原を訪ふ，在らず。去て山田九郎を竹部に敲く，亦た在らず。狩野直記を掠天神に訪ひ，五時帰宅。

十月十七日 晴。午前清藤来訪。晚岡本源次，真藤義雄来訪。留めて小飲す。夜に入りて狩野直記，米原繁蔵来談。十一時散じ去る。

十月十八日 晴。午前支那店に到り人に托し洋服附属品十二円代を購ひ，中食後帰る。篠原邦威在焉。是日福永銀行に千円を預け替へ，第九銀行に至り保険掛金一ヶ年分を払ふて帰る。夜競商場に至り物品を購て帰る。

十月十九日 晴。軍令部より十一月より明年一月迄の手当四百円を送り来る。午前清藤幸七郎を新屋敷に訪ふ。小山雄太郎と相見る。中食の饗を受けて帰る。

十月二十日 雨天。午後山田夫来訪。晚親戚数人を招飲す。漢口岡幸七郎の信到る。

十月二十一日 雨天岡本源次来訪，本夕より東上すと云ふ。軍令部佐伯副官に金員の領収証を郵送す。東京古川権九郎に発信す。本日午後三時三十五分皇太子明宮殿下扈從の文武官を具し熊本駅に御来着あり。偕行社を以て御旅館に宛つ。

十月二十二日 半晴。軍令部より旅券を郵送し来る。是日皇太子殿下軍隊を檢閲し終りて水前寺に行啓有り。午後清藤幸七来訪，之を留めて晚餐を共にす。

十月二十三日 晴。是日午前九時半皇太子殿下熊本御出發。軍令部中村大佐の信到る。別に佐伯副官より旅券を郵送し来る。午後支那店に至り，人に托し第九及び肥後銀行に金員を預け入る。夜米原を訪ふ，來客有るを以て帰る。

十月二十四日 晴。佐伯閣に発信。並に大分警醒雜誌社に雜誌二冊分の代金を郵送し，購読停止の旨を告ぐ。田中清司を訪ひ，晌午帰宅。午後清藤，勝木，島田，藤本等来訪。晚内人と通町に至り鶏飯を食ふ。

十月二十五日 晴。午前支那店に至り小坐。去て春竹に牛島を訪ひ，山崎に上田電を訪ひ，帰る。大坂鳥居，牛莊深水，福岡高橋の信到る。晚内人と米原繁蔵宅の招邀に赴き，夜に入りて武藤虎太の招きに赴き，九時辞帰。

十月二十六日 晴。午後齒科医の処に至り歯を療す。

十月二十七日 晴。午前齒科医に抵る。午後支那店に至り，去て友枝伴蔵を訪ひ小説，帰る。留守島田数雄来訪。東京同文会の電報到る。直に之に復す。上海井手，漢口岡に発信，西航の期を報ず。夜米原夫婦来訪。

十月二十八日 晴。日曜。午後池内源七，牛嶋等来訪。大坂鳥居赫雄に発信す。

十月二十九日 小雨。午前鎮西館に至る。夜大江の招邀に赴く。鳥居赫雄に発信す。

十月三十日 晴。午時米原来訪。光永氏亦來談。午後東亜同文会の電報到り、予の上京を催す。内人及び米原夫婦と大江権現祠より渡鹿天神祠辺を彷徨す。白雲紅葉秋色画の如し。夕陽家に帰る。同文会二十八日附の信到る。予の北京行を請ひ来る。

十月三十一日 風陰晴如常。同文会根津一の電報到る。之に復す。

十一月一日 晴。正午島田数雄、篠原邦威來訪。牛莊松倉善家、深水十八、東京緒方二三の信到る。夜米原宅を訪ふ。

十一月二日 晴。午前島田数雄、田中宅、河口宅、山田珠一等を訪ふ。留守中松岡威稜臣、牛島貫吾、清藤、勝木等來訪せりと云ふ。東京佐々友房、田鍋安之助に発信す。午後井芹、清藤、大江、武藤虎太、津野等の諸氏を歴訪して帰る。清藤在焉、小談、辞し去る。晩米原夫婦、河口、友義諸氏を招き晚餐を共にす。九州自由新聞社国武に発信す。

十一月三日 半晴、午後雨。天長節。午前山田九郎來訪、門司三菱支店長高田への紹介を請ふ。牛島貫吾氏來訪。午後勝木恒喜、清藤幸七郎來訪。二時出で内藤儀十郎氏を訪ひ、別を叙し帰る。夜井芹経平來訪。武藤虎太來り別る。

十一月四日 晴天。是日啓程清国に赴かんとす。早起行李を戒む。午前九時家門を出づ。岳父及び田中、河口、友枝伴蔵、安達謙造、池内源七、藤本親信等來り行を送る。熊本駅に至り、十時十七分の三角行汽車に上る。清藤幸七、勝木恒喜、牛島、友枝、島田数雄、狩野直記、米原繁蔵、堀部直人、真藤義雄等來り送る。真藤亦た本日をして朝鮮に向ふと云ふ。宇土に到れば篠原邦威車站にて行を送る。車上先坐を遙拝し、山に入り海に沿ひ飽まで一路の秋色を賞し、午前十一時四十分際崎に達す。直に一元六角にて上等船票を購ひ汽船勢運丸に上る。十二時開船。午後一時半船富岡の前を過ぐ。巴字湾、臥龍山を波際に望み坐るに曾遊を想起せしむ。船頭西に転じて金峯復た望む可からず。浮雲一片離愁始て動く。樺島を過ぐ、風光甚佳。六時二十分長崎に達し上車、土佐屋に投宿す。

十一月五日 晴天。海軍々令部中村大佐に發電、渡清を報ず。外に留守宅並に同文会に発信す。国武猪太郎來訪。西田龍太、狄葆賢を伴ひ來り訪ふ。狄は難を避けて此地に在る者なり。渡辺敬昌、内田友義、井芹経平、吉川季次郎、西田龍太來訪。三時半土佐屋を出で神戸丸に上る。狄、西田送りて埠頭に來る。原福之助同船たり。午後七時半開船。波濤平穩。夜月色最佳。予甲申以来日清の間を往來する茲に十七回たり。

十一月六日 晴。穩波千里如行湖上。

十一月七日 陰。正午呉淞口に達す。午後二時半上海に入る。井手三郎、小田桐、中村、白岩、吉田、篠崎、牛島、井手、上田、岡野、深澤、中西、小林等來り迎ふ。直に上陸、同文会に入る。夜文廷式より蟹一簍を贈り来る。

十一月八日 晴。午前井手と同文書院、文廷式、佐原等を訪ひ、去て日本墓地に至り浦敬一、廣岡安太の招魂碑を見る。十月中に建立せしもの也。晩井手と汪康年、姚文藻、白岩、本願寺、篠崎等を訪ひ帰る。佐原、中村來訪。

十一月九日 晴。午前汪康年來訪。午後白岩龍平、篠崎、中西、小林等來訪。漢口岡幸七郎に発信す。

十一月十日 雨天。是日熊本留守宅、大江、米原、中村静嘉に発信す。夜同文書院中村を訪ふ。八重山副長下村少佐來訪。

十一月十一日 晴。牧巻次郎及び同文書院生徒山田、大原等來訪。

十二月十二日 晴。汪康年來訪。牧、稻村等を訪ひ、去て領事館に白須を訪ひ、帰る。

十一月十三日 晴。午前汪康年來訪。西村天因來訪。晩井手と吉田順蔵を訪ふ、在らず。樂善堂に小林を訪ふ、亦在らず。

十一月十四日 積陰。汪康年、王海清來訪。杉幾太郎、佐原來訪。是日章記洋衣舗に四十八元五角を払ふ。

十一月十五日 晴。汪康年来訪。東京中村靜嘉、熊本留守宅に発信す。予本夕を以て大亨丸に乗り漢口に向はんとす。王海清の為に福州橋本、平原両大尉に添書す。午後篠崎、葉某、文永譽、汪康年来訪。同文書院中村、岡野、山田、曾根原等来り、別る。夜九時滬報館を出で大亨丸の官艙に乗ず。井手、中村、牛島、上田、中西和泉、井手友喜外三人来送。

十一月十六日 晴。夜来北風勁烈、初寒如刺。午後一時江陰を過ぐ。支那軍艦十隻、水雷艇四隻此に泊す。通信書記官棟居及び前原巖太郎等同船たり。夜七時半鎮江に達す。予長江を上下する今回を以て二十五次とす。

十一月十七日 快晴。午前八時蕪湖に達す。十一時開船。夜十二時安慶を過ぐ。久米徳太郎、野村某来りて船に上る。

十一月十八日 晴。午前十一時九江を過ぐ。晴時武穴を過ぐ。

十一月十九日 晴。午前七時漢口に達す。東肥洋行にて小憩。長樂里の寓所に至る。夜前原巖太郎より一品香に招飲、九時席散す。帰途東肥に至り小坐。楊子荃来訪。

十一月二十日 晴。橘三郎来訪。夜原、福島来訪。

十一月二十一日 陰。午前領事館を訪ひ、十二時帰る。晚瀬川領事来訪。夜雨。

十一月二十二日

十一月二十三日 小雨。午前橘三郎来訪。夜福嶋を訪ふ。是日東肥より預金二千元を受取る。

十一月二十四日 晴。上海井手三郎に発信、金二千元を匯送す。此の金は漢報売却代価の中に姚文藻に返付する者なり。外に上海中井洋行に紙代の中五十弗を送り、残額百十五円は井手より代付（井手の処に残紙四万枚を送りしを以てなり）せしむ。東京普及社辻武雄に東亜三国図地誌十一部代金十一円を郵送し、別に篠原邦威に五十円、留守宅に五十円を郵送す。亀雄に発信す。

昨日南京佐原より急報有り、曰く、独、仏二国は劉坤一に向て左の二箇条を要求し、其の決答を促せり。

第一 金員糧食を問はず西安の行在に転送する事を停止せられたし。若し可かずんば我に決する所有り。其際総督は敵意を表するや否。

第二 聯合軍若し長江を遡りて西安府に向はんか、総督は之に對し如何の態度を取らんとする乎。午後郵便局に至り送信す。軍令部中村靜嘉、同文会柏原に発信す。三輪、松本、大瀧等を訪ひ、帰る。

十一月二十五日 陰。午前東亜同文会並に井手三郎に発信す。午後東肥の招邀に一品香に赴き、五時帰る。是日英国水師提督シーモア、水雷駆逐艇ホワイラング号にて来漢。

十一月二十六日 雨。英提督西茂、張之洞に会見す。橘三郎、柳原又熊来訪。之を留て中食を饗す。

十一月二十七日 雨。瀬川領事より晚餐の案内あり、十時帰る。

十一月二十八日 雨天。熊本留守宅の信到る。

十一月二十九日 晴。午後東肥を訪ひ、夜帰る。

十一月三十日 晴天。午後軍令部に第九十一号報告を發す。骨董舗に至り、帰途東肥にて晩食す。松田満雄、石灰窯より来着。

十二月一日 晴。午後松田、橘来訪、之を留て晚餐を饗す。夜居留地を散歩す。

十二月二日 積陰。午前岡と松田を誘ひ、江を渡りて武昌に至り朱強甫を訪ひ小談。去て自強学堂に柳原を訪ひ、中食後久米、大原等を訪ふ、在らず。木野村、中野等と談じ、共に出て骨董舗に過ぎ、黄昏江を渡りて帰る。微雨。熊本留守宅の信到る。

十二月三日 陰。夜東肥を訪ふ。篠原の信到る。上海井手三郎の信到る。

十二月四日 陰。午後東肥に至り、中智の上海行に托し井手に復書し、巴緞及び豹皮を送る。商船会社前原並に通信書記官棟居等を訪ひ小談、帰る。夜松田の石灰窯に帰るを送り、又た橘三郎の帰国を送

る。中智に托し上海にて縮緬三疋を購ひ熊本留守宅に送らしむ。柳原又熊を留て晩食す。柳原留宿。

十二月五日 陰天、夜雨。午前楊子荃來訪。午後楊子荃の処に至り撮影す。午後井手三郎の信到る。先日送る所の二千元已に領収せりと云ふ。夜楊子荃其兄少荃を携へ來り訪ふ。

十二月六日 雨天。熊本留守宅。井芹、島田、狩野、友枝、藤本等に発信す。晩原、福嶋、牛嶋等を招き晩餐を饗す。

十二月七日 陰。原、福嶋等より晩餐の案内あり。

十二月八日 晴。午前李泉溪來訪。午後領事館を訪ふ。瀬川、岡と鉄道線路を散歩し、橋口に至り、黄昏領事館に帰り瀬川の処にて晩食し、九時帰る。白岩龍平の信到る。

董福祥革職留任と為り、其の帶ぶる所の甘軍五千五百人を撤し、數營の兵を率て日を尅し甘肅に至り立功罪を贖はしむ。

張之洞は新任湖北巡撫景星の着任を待ち留守中の事を委任し、自ら襄陽迄出張すべき旨、西安行在所より命令有りしと云ふ。

十二月九日 晴。東京中村靜嘉に発信す。上海井手三郎の信到る。午後木野村、峯村、大瀧等來訪。夜東肥を訪ふ。

十二月十日 陰。

十二月十一日 陰天。東京同文会に八九十三ヶ月の決算報告書を送る。上海井手三郎に発信す。午後牛島、宝妻二生來訪。晩領事及び原、福島を招き饗す。松本來り別を告ぐ。

十二月十二日 晴天。上海井手より醉蟹三盞を送り来る。朱克柔來訪。

十二月十三日 晴天。熊本留守宅に発信、岡の帰国に托し金六百円を留守宅に送る。熊本牛嶋貫吾に発信す。外に上海井手、姚、佐原に寄書。岡の為に西郷侯、李盛鐸二に添書す。白岩龍平、土屋員安二氏に致すの書、岡に托す。岡を誘て廣恒信に至り中食を饗す。晩岡幸七郎の帰国を大利号に送る。松本亦帰国。

十二月十四日 晴。午後久米大尉來訪。夜腹痛下痢。

十二月十五日 晴。午後峯村來訪。柳原又熊の病氣甚激の状を報ず。神保軍医、中畑榮來訪。胡天照來訪。河南光州胡書漁の信を交付す。

十二月十六日 晴。朝渡江柳原の病を問ひ、夕刻帰る。熊本留守宅、東京龜雄、並に篠原邦威の信到る。上海岡幸七郎に日本より帰着せる書信を転送す。井手に発信。

十二月十七日 晴。午後福島來訪。晩福島等より案内あり。

十二月十八日 雨。東京龜雄に其開店の費用の一部を補助する為め金三十円を郵送す。

十二月十九日 晴。午前原、福島と渡江柳原の病を問ひ、中食後農務學堂に至り美代、吉田、峯村等を訪ひ、黄昏帰る。

十二月二十日 半晴。篠原祐喜來り別を告ぐ。明日より沙市に赴くと云ふ。是日軍令部に九十二号報告、並に岡幸七郎、緒方二三に発信す。午後郵便局に至り発信し、帰途領事館に瀬川を訪ひ、帰る。晩東肥へ至り入浴す。

十二月二十一日 雨。悪寒頭痛。午後瀬川領事來訪。

十二月二十二日 晴。午後胡天然來り、湖南光州に帰るを告ぐ。金二元を与ふ。原、福島來訪。原と租界に散歩す。留守中に峯村、河瀬來訪せりと云ふ。東京普及社より金子受取証到る。辻武雄の信到る。

十二月二十三日 晴天。上海井手三郎の信到る。軍令部に九十三号報告並に柏原、井手に発信す。

十二月二十四日 晴。朝渡江、柳原の病を訪ひ、三時帰る。留守中岡本監輔、松田満雄來訪。中西正樹、白岩龍平、緒方二三、藤本親信の信到る。夜松田を訪ひ、九時帰る。

十二月二十五日 陰天。上海井手、東京同文会に発信す。午後郵便局二橋を訪ひ、去て三輪高三郎を訪

ひ、夕刻帰る。

十二月二十六日 陰天。原、福嶋の処に至り晩食す。

十二月二十七日 陰天。東亜同文会より十一、十二両月分支部費三百円銀行為替にて送りしとの電報有り。上海岡幸七郎の信到る。

十二月二十八日 雨。寒気甚し。瀬川より湖南洋務局総弁蔡乃煌来訪の報有りしに付き会談を勧め来るに付き午前より領事館に至り蔡と会談す。蔡氏来漢の用向は嚮きに湖南衡州府属にて仏国宣教師二人、伊国宣教師一人、土人の為に殺害せられたる件に付き仏国領事と交渉の為なり。瀬川の処にて中食し帰る。夜福嶋来訪。

十二月二十九日 陰。東京田鍋安之助、牛莊松倉善家、上海井手三郎の信到る。夜白石生来訪。

十二月三十日 陰天。熊本留守宅の信到る。之に復す。熊本緒方、藤本に復書す。武昌峯村喜蔵より歳暮として牛酪二缶を送り来る。夜東肥に至る。

十二月三十一日 晴天。牛莊松倉善家に復書す。晩領事館より忘年会の案内有り。六時之に赴く。十時散ず。是日三十三年尽日たり。孤燈独生感慨四集、除夜の詩一首を賦し午前一時半寝に就く。

除夜

去年今夜湘水舟雪裡探句掃旧愁今年落拓江漢澣殘燈守夜坐小樓回顧十又七年事彷彿如夢來心頭歲華
勿々催白髮中原罔愧祖劉禹鼎七分秦鏡破山裂河碎誰能修北廷臣僚爭助桀南中疆吏學倡優勢去運
盡子可為大好江山任踐蹂歲云暮矣感何極枉將積憂付東流有人若問來年計去拾閩浙予湘瑀。